
白銀の翼

鳥丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の翼

【Zコード】

Z3952R

【作者名】

鳥丸

【あらすじ】

異形の禍々しき生物 魔物：

人類に牙を向き 殺戮を繰り返す魔物達。世界は魔物で溢れていた。政府は魔物や悪人への対抗手段として 傭兵ギルドを設立する。数多くの傭兵ギルドが設立されていく中 基本ギルドの人数は何十人とメンバーが在籍するものだが メンバー僅か4名で依頼成功率が100%という驚異のギルド 白銀の翼が話題となっていく。人々はこの白銀の翼を幻のギルドと呼んだ。

第1話 銀髪の男

「ママ、ワンちゃんだよーお腹空ってるんじゃないかな? さつや買つたパンを少しあげてもいい?」

村の正門近くにある商店街の裏道に3匹の犬が喉を鳴らして潜んでいるのを少年は発見した。

建物と建物に挟まれた狭い場所で太陽の日差しも当たらぬ、薄暗い場所なので、姿ははっきりとは確認できないが、たしかに瘦せこけた3匹の犬が存在する。

「少しだけよ。せひ、おやつなさい。」

「おにしこよ。いづちにおいでー。」

少年の母親は優しく微笑み、パンの一欠片を少年に手渡す。

少年はしゃがみこんで3匹の犬に向かってパンを差し出した。それに反応し犬達はゆっくりと少年に歩み寄る。しかし、その瞬間…

「…ひつひーー。」

母親は恐怖に顔を青ざめ 喉の奥から声にならない声で悲鳴をあげた。

3匹の犬が少年に歩み寄り僅かに口差しによつて その姿が映し出されたのだ。

姿形は犬のそれだが 体毛は全く生えず 生物とは思えないような不気味なドス黒い皮膚が露になっている。口は耳元まで裂け 銳利な牙がズラリと剥き出しの状態で 目は瞳が無く眼球全てが真つ赤に光つっていた。

ヘルハウンド…

この生物は犬などではなく 正真正銘の魔物だ。

言うまでもなく この親子はヘルハウンドによつて無惨に殺されたのだった。

ここはトト村。広大なガレン大陸の最南端に位置する小さな村だ。花や草が数多く生い茂る自然豊かな平和な村だ。否…

「平和な村だつた」が正しい表現だろう。

先日の親子が魔物に喰い殺された事件があり、村長は傭兵ギルドに魔物討伐の依頼を出していた。

傭兵ギルドに依頼を頼むシステムには2パターンある。一つは自分の好きなギルドに直接 手紙や訪問で交渉するパターン。

もう一つは政府に書状を送り 政府側が最適なギルドを選んで依頼主の元へ派遣するパターンだ。依頼するギルドによるが こちらのほうが依頼料は高くつく。

今回のケースのように今まで平和だった場所に初めて魔物が現れた場合は、政府を通して依頼するパターンが多い。なぜなら、ギルドに直接依頼して依頼料だけを取られる詐欺が存在するからだ。ギルドや依頼のノウハウを知らない素人を狙つた極めて悪質な詐欺だ。

どうでもいいが俗に『ギルド詐欺』と呼ばれている。

「村長！ いつになつたらギルドの方達は来るんですか！？」
「こままじや安心して買い物もできないわ！ 騙されたんじやないの！？」

村人達は怒りを露に次々に村長に抗議をしていた。

「皆、すまぬ。内の村には政府を通して依頼出来る程の資金の持ち合わせがなかつたんじや…」

村長は両手で顔を覆い、詐欺を行つた相手への怒りと自分の愚かな行為への悔しさに、力いっぱい歯を食い縛つた。

トト村 商店街

「なんだよ、腹^ごしらえしようと思つたのに入つこ一人いねえじやねえか。」

商店街の道の真ん中を一人の青年が不機嫌そうに歩いていた。

身長は178前後 筋肉質のガッチリとした体格で髪は珍しい銀髪
身なりは黒のレザーの上下 ジャケットの背中の部分には白い翼
の刺繡が施されている。背中には彼の身長と同じぐらいはありそ
な巨大な剣を背負っている。

「ちくしょう腹減ったな…ん？」

青年の視線の先には一人の小さな少年が立っていた。

「おい坊主。どうした迷子か？」

「違うよ。パパもママも他の村の人もみんな村長さんの所に行っち
やつたんだ。だから僕はここで待ってるんだよ。」

「どうか。すぐ帰つて来るといいな。俺はロイ、ロイ・ストライド
だ。お前は？」

ロイは少年に握手を求めるように手を差し出す。
その手をギュッと握りしめ 少年は答えた。

「エバンだよ。」

セツニイながらエバンは不思議そうにロイを見つめる。

「ん？ ビーハ？ 僕の顔に何かついてるか？」

「お兄ちゃん どうして髪の毛真っ白なの？ 本当はお綿せん？」

「なんで銀髪なのかは わかんねえんだよなあ。 変だよな？」

ロイの問いにエバンは激しく首を横に振つて答える。

「カツコココみ？」

「本当か？ へへ…」

ロイは嬉しそうに笑顔を見せた。

幼き頃から特殊な銀髪のせいで忌み嫌われてきた彼にとつて この少年の言葉は心の底から嬉しかったのだ。

「そうだ エバン その村長さんの家はどこか教えてくれないか？」

時同じくしてトト村 村長宅。

「ギャアアアアアー！！」

村長への抗議が続くなか 突如 外から男の悲鳴が轟く。そして村人達の視線が一斉に玄関の扉へと集まつた。

バタン！！

扉が激しく開かれ そこに血まみれの村の男が血相を変えて 飛び込んできた。

一斉に悲鳴があがり 怯える村人達。

「助けてくれ！魔物だ！！魔物が現れつ 」

男の声は途中で ヘルハウンドに首を噛みつかれたことにより 遮られる。

その瞬間 村人達の悲鳴は更に大きくなり 人を押し退け外に飛び出そうとする者 家具の裏に身を潜め隠れようと/or>する者 文字通りパニック状態に陥つた。

「パパー・ママー！」

その時 玄関の扉の向こう側 道の真ん中に先程ロイと会話していた少年 エバンが立っていた。

「エバン！逃げてええつ！！」

エバンの母親が奇声に近い声で叫ぶ。

しかし 男に噛みついたヘルハウンドとは別の2匹が喉を鳴らし ヨダレを垂らしながら ジリジリとエバンに迫っていく。
恐怖で身動き一つとれないエバンは 涙を流し 震えることしかできない。

その時…

凄まじい風圧が巻き起こり 2匹のヘルハウンドは胴体を真つ一つに両断される。

その中心 エバンの前に銀髪の青年が身の丈程ある大剣を構え 立っていた。

ロイだ。

エバンと村人達はその姿を見つめ 唾然としている。

「馬鹿野郎 危ねえから隠れてうつて言つたら？ 急に飛び出しあがつて。」

「『』めんなさい…」

叱られて落ち込むエバンの頭に優しく手を乗せるロイ。

「後は任せろー！」

そう告げた後にロイの眼光は先程までとは別人のように鋭くヘルハウンドに放たれる。

睨まれたヘルハウンドは一瞬怯んだように後退り すぐに戦闘態勢に入る。

「来やがれ 犬つこい。」

ロイはニヤリと笑って見せた。

その瞬間 ヘルハウンドはそれをわかつて怒ったようにロイに牙を向いて 飛び掛かる。

ロイはそれをひらりと華麗にかわし 体を回転させながら大剣でヘルハウンドを一刀両断に斬り伏せた。

「一丁上がりつと。」

大剣を軽々と片腕で持ち上げ 肩に乗せて エバンに微笑むロイ。そんなロイをエバンはヒーロー番組を観る子供のようなキラキラし

た瞳で見つめていた。

「貴方はギルドの方ですか！？」

村長がペコペコと何度も頭を下げながら ロイに話しかける。

「ん？まあ そうだけど。」

「よかつた…私は騙されていた訳じゃなかつたんですね…」

「いや アンタは騙されてるよ。」

「え…？」

胸を撫で下ろす村長にロイは告げた。村長は田を丸くしている。

「どうことです？貴方はギルドの方なんですよね？」

「ただけどアンタが依頼してたギルドの者じゃねえんだよ。俺達のギルドはギルド詐欺を行う奴等を捕らえる仕事もしてるんだ。それでたまたま今回のアンタが出した依頼状をその仕事中に見つけて

変わりに俺が来たつてわけだ。」

「やつだつたのですか…本当にありがとうございます。我々が今生
きてこるのは貴方のお陰ですか…」

やつはつておはロイに深く頭を下さた。

「…。じや あな。Hバンもまたな。今度遊びにでも来
る。」

ロイはHバンの頭をくしゃくしゃと撫で回し 歩を出した。

「待つて下されー貴方の'ギャル'の如前せ…」

村娘の間ごにロイは足を止める。
そして 背中を向けたまま答えた。

「白銀の翼だ。」

第2話 幻のギルド

幻のギルドと呼ばれる傭兵ギルド【白銀の翼】の本部は人里離れた海沿いに建てられている。

外觀は小さな小屋のようで真っ白な建物だ。ちょうどその中心辺りに白銀の翼のエンブレムである 大きな翼のモニコメントが貼り付けられている。

白銀の翼は所属メンバーが僅か4名で 依頼成功率100%を誇る驚異の少数精銳の傭兵ギルドだ。

しかし白銀の翼に所属する銀髪の青年 ロイ・ストライドは その4名の中にはカウントされない。

なぜなら彼は最近このギルドに加入したばかりのルーキーだからだ。

「ただいま。」

トト村の依頼から帰ったロイは ギルド本部の扉を開けて挨拶する。

「おかえり。早かつたですね。簡単でしたか?」

眼鏡をかけた男が椅子に座りながらロイに優しく微笑む。彼はこのギルドのメンバーの一人 レオ・アルベルト。

綺麗な金髪に整った顔立ち。町を歩けば女性が振り返る程の容姿をしている。

彼は魔導師の名門一族 アルベルト家の長男で すば抜けた魔力を

誇る魔導師だ。

「楽勝だよ それよりなんか食い物ない?さつきから何も食つてなくて腹減つてんだよ。」

「相変わらずだな口イ。」

「ゼクス。 いたのか?」

腕を組みながら壁にもたれ掛かる男がいた。

彼もまた白銀の翼のメンバーの一人 ゼクス・ラインハルト。黒の短髪に白いバンダナを頭に巻いている。そして腰には一丁の拳銃を所持していた。ゼクスは元バウンティーハンター（賞金稼ぎ）で凄腕のガンマンである。

「先にマスターに依頼完了の報告に行つてこいよ。」

「それは私も賛成です。先にマスターに報告するのが決まりですからね。」

ゼクスが親指でマスターの部屋の扉を指差すと レオも同じよう手指を差し 微笑む。

「ん~ わかつたよ。おっさん元気だよ。」

ロイは困った顔をしながら答える。ロイはマスターが苦手なのだ。重い足取りで頭をかきむしりながらマスターの部屋の扉を開けた。

「おっさん 依頼完了したぜ~。」

「お~! ロイ! 帰ってきたか!~! 早かったな!~!」

部屋が揺れる程のバカデカい声で、この白銀の翼のギルドマスターバルボア・ヤンクマンはロイを迎える。

2メートルはありそうな巨体にスキンヘッド 左目には眼帯を着けている。どう見ても盗賊にしか見えない。

ちなみにメンバー全員 服装はロイと一緒に背中に翼の刺繡が入った黒のレザーの上下を着て居る。これは白銀の翼のユーホームのようなものだ。

「ヘルハウンド3回... 楽勝だつたよ。」

「がつはつまつ!~! 楽勝とは生意気な!~! まあ飯でも食つて体を休めとけ!~!」

「ああ そうするよ。腹ペ「なんだ。」

『声『テカすぎるだろ…』のオッサンと話す度に耳が痛くなる。』

そんな文句を心の中で呟きながらロイはマスターの部屋を退室する。

食事を済ませ 自分の部屋のベッドに寝転がり体を休ませるロイ。
その時 部屋の扉を数回ノックする音が響く。

「誰だ？」

ロイは上半身だけ身を起し 扉に向かい 声をかける。

「私です。入つてもいいですか？」

扉の向こうからレオの優しい声で返事が返ってきた。

「レオか。入つてもいいぜ。」

「じゃあ入りますね。」

扉を開けてレオは部屋へと入る。

「ここ 座つてもいいですか？」

「いいよ。」

レオはロイの寝転がるベッドの隣に置いてある椅子を指差しながら
ロイに確認をとると ゆっくり椅子に腰をかけた。
そして眼鏡を人差し指で上げて 微笑みながらロイに顔を向ける。

「もうロイがここに来てから1年程になりますね。ここは馴れましたか？」

「ああ 居心地はいいし 依頼も結構楽しいのが多いし みんなも
好きだから かなり馴れたよ… あつ！オッサンの声のデカさには全
然馴れねえけど。」

「それはずつとここにいる私も馴れてません。」

二人は同時に笑い出す。

ギルドメンバー全員にこんなことを思われているバルボアだが そ
の実力 人望は皆が認めている。ロイを含め 皆から絶大な信頼を

得ていいのは確かだ。

「 なあ レオ……」

「 なんですか？」

「 どこのか思い詰めたような表情のロイにレオは不思議そうな顔で尋ねる。

「 俺… 本当に感謝してるんだ。どこに行つても この髪の色のせいで不気味がられて居場所のなかつた俺を レオが見つけて ここに連れて来てくれて… そして マスター や皆が笑顔で迎えてくれて… 本当にありがとつ。」

ロイはレオに深く頭を下げた。そんなロイを見て レオは一瞬驚いた表情をして すぐに笑顔でロイの頭をポンと優しく叩いたのだった。

「 ロイ どうですか？ 明日は久しぶりに私と依頼を受けませんか？」

「 マジで… やるやる… レオに俺がどれだけ強くなつたか見せたかつたんだ！」

レオの突然の嬉しい申し出にロイは頭をガバッと上げ 子供のよ
な無邪氣な笑顔になる。

「決まりですね。じゃあ明日。今日はゆっくり休んでください。お
やすみなさい。」

「おうーおやすみー」

レオが部屋を出て 扉を閉める音が鳴ると同時にロイは大きくガ
ツツポーズをした。

「うわあー ワクワクして全然眠れねえよー」

と言いながら その1分後ぐらいに 大きなイビキをかいて 眠る
ロイであった。

「よし それじゃあ出発しましょうか。」

翌朝…

「おしー行こーぜー。」

ロイとレオは意氣揚々と出発する。

「わいこや今回の依頼は どんな魔物だ?」

「今日は魔物じゃなーですよ。ビルドの町で好き放題 暴れまわる悪者達の退治です。」

「へえー 今日は人間が相手か…」

「不満ですか?」

レオはやれやれといつ感じでロイを見つめる。

「まあ魔物のほうがやりがいあつたけど 戦えりゃあ それでいいや。」

道中そんな話をしながらビルドの町へと向かうロイ一行。ビルドの町はここからターミナルに向かい バスに乗り 30分ぐらいで到着する位置にある。酒場が多く 無法者が数多く徘徊する治安の悪い町だ。

バスに揺られることが30分。ロイ達はビルドの町に到着した。

「ターゲットは何人いるんだ？」

「バンカーギヤングというチームで 人数は10数人ということらしいです。えっと…さざ波亭という酒場に毎日集まっているようですね。」

レオは眼鏡を上げながら 依頼状に目を通す。

「じゃあ早速行こうぜ。」

「そうですね。いっしょです。」

二人は足早にさざ波亭へと足を進めた。

「よし! 入れう。おじやましまーす!」

「いいのよつです。」

セザーポ亭の中へ入ると 柄の悪い連中が一斉に一人の方に目を向ける。

奥にカウンターの席 そして手前に多くの机と椅子が並べられている。

レオはそんな中 気にもしないでカウンターの席へと腰をかけた。

「マスター ミルクを2杯お願いします。」

レオが注文すると 店のマスターは柄の悪い連中の視線が集まつた二人に戸惑った表情を見せながらミルクを差し出した。

「おー! なんでミルク頼んでんだよ? 仕事は?」

ロイが不思議そうに尋ねるとレオは視線を合わせぬまま眼鏡をゆきつ上げる。

「……で戦つと店に迷惑がかかります。今は待ちましょ。」

「おあずけかよ……」

ロイは不満そうな態度を見せ 店にいる連中を一睨みする。

その時…

「おー！テメエ！何いひち見てやがるー？」

ロイの田の前の席に座っていた 大柄の男が荒々しく立ち上がりロイに近づく。

「俺達に喧嘩売つてんのかテメエ？それにこの店は俺達専用だ！よそ者が勝手に入つて来んじゃねえよ！」

「あーー そななの？まあ いじりじやなんだし 外で話さない？」

「上等だ！テメエ等 表に出やがれ！！」

ロイはレオに向かつてニッコリ笑つてピースサインをして見せる。それを見て またも やれやれという表情をするレオであった。

男達はロイとレオを引き連れ 裏路地へと入つていく。
この場にいるバンカーギヤングの人数は14人。

「おい お彼らのメンバーはこれで全員か？」

「そうだ。そして俺が頭のザイモンだ。テメエ等もしかして傭兵、ギルドの者か？」

ロイの質問に先程の大男が答える。

「そうだ。俺達は白銀の翼だ。」

「白銀の翼？……ガツハツハツハツ！-！」

堂々と答えたロイに対して男達は一斉に笑いだした。
当のロイはなぜ笑われたのか訳もわからないまま、ただなんとなく不機嫌そうな顔をしていた。

「なにが可笑しいんだよ！-？」

「テメエ等のギルドがなんで幻のギルドなんて呼ばれてるか知ってるか？メンバーがたつたの4人で依頼成功率100%！？んなもん有り得る訳ねえだろ！皆がバカにして幻のギルドなんて呼んでんだよ。中には信じてる奴もいるみたいだが、そんなもん真実な訳ねえだろ。ハツタリかましてるか、よっぽど簡単な依頼ばかりしてるかだろ。ガツハツハツ！-！」

「なつー!？」

怒りに身を任せて飛び掛かろうとしたロイの肩をレオが押さえる。

「我々と構えるのが恐いんですか?」

レオはザイモンに向かって挑発の笑顔を飛ばす。

「んな訳ねえだろーーー!」

「だつたら御託並べてないで もうあと掛かってきたらどうです?」

レオの表情が笑顔から冷たい殺氣の籠つた表情へと一気に変わる。
それを見た男達は恐怖に体が動かなくなってしまう。

しかしざイモンはバンカー・ギヤングの頭である意地からか 恐怖で
顔を引きつらせながらも雄叫びをあげてレオへと飛び掛かる。

その刹那 全員の視界からレオの姿が消えた。

「ど、どこ行つたー?」

ザイモンが言葉を発したと同時に 後ろの2人の男が倒れる。
その更に後ろにはレオが立っていた。一瞬で移動し 手刀を放つた

のだ。

あまりの早業に男達はどよめき 後退る。

「ロイ！熱くならないで。終わらせましょう。」

レオはいつもの笑顔でロイに呼びかける。

呆気に取られていたロイも我に返り ニッと笑顔を見せた。

「行くぜ。」

ロイはぐっと足に力を入れる。

次の瞬間 憎まじいスピードで男達に向かっていく。上下黒い服装とこうじともあり まるで黒い閃光のように男達との距離を縮める。そのスピードのままパンチを繰り出し 次々と男達を吹き飛ばしていく。

そしてレオの隣まで来て足を止めた。

残る人数は7人。一気に半数になってしまったバンカーギャング。

「うぬう…バカな！？」

ザイモンは唸り 驚きを隠せない。

「あれえ？さつき幻のギルドがなんだって？」

ロイは意地悪く笑つて見せる。

「うるせえ！…おい！あれ出せ！」

ザイモンがそう言うと残りの男の1人がどこからか大きな両刃の斧を取り出し ザイモンに渡した。その斧を高々と構えると 手下の男達はロイとレオを囲むように広がる。ロイも背中の大剣を抜き 前に構えた。

「やれえい！！」

ザイモンの号令と共に男達は一斉に飛び掛かる。

2人はそれをヒラリとかわす。

そのままロイはザイモンの懷に飛び込む。

ザイモンは焦りを見せ 抱え上げた斧をロイ目掛けて力いっぱい振り下ろした。

しかし 冷静にそれを右にかわされ 斧は轟音と共に地面にぶつかる。

その瞬間ロイは跳躍し 斧の柄の部分に足を乗せ 更に高く飛び上がる。

「おーりあああー…」

大剣を地面と水平に向きを変え 刃の腹の部分でザイモンの頭を打ち付ける。鈍い音を奏で ザイモンは白目を向いて地面に倒れた。残るは手下6人。ロイが振り返ると そこには残りの敵を全員倒し壁にもたれ掛けり一休みするレオがいた。

「お疲れ様。」

「ああ！全員倒しちまつてゐ！俺のいいとこ見せれなかつたじゃねえか！」

「あ…すいません。つい…」

駄々をこねだすロイに向かい 手を合わせ謝るレオだった。

「さて 悪者達を保安官に引き渡したことですし 任務完了ですね。帰りましょつか。」

「へえ～い。」

ロイは今だスネていた。

「まだ機嫌直らないんですか？じゃあ食事でも！」馳走……！」

突然レオは険しい表情になり 振り返る。

「どうしたんだ！？」

普段は冷静沈着なレオの反応にロイに緊張が走る。
レオはしばらく黙つたまま辺りをぐるっと見回し 口を開く。

「魔物の魔力を感じます。それも中級ランクが3体。後1つ不気味な魔力を感じますね。」

中級ランクの魔物は一人にとつては たほど恐れる存在ではないが
それが3体もいるとなると少々厄介である。それ以上にレオは不
気味な魔力のほうを恐れていた。
ちなみにロイが倒したヘルハウンドは下級ランクの中でも下の下と
いうところだ。

「へへっ…ちょうどいい。まだ慣れ足りないとこだつたんだ。行くんだろ？」

「そうですね。そのまま見過すところ訳にもきませんし。」

「だつたら早速行こう。モタモタしてたら町に攻めてくるかもしねいぜ？」

「ええ 行きましょう。」

二人は足早に魔力の感じるほうへ足を運んだ。

魔力の気配がする方へ近づくにつれ 大きな3体の魔物の姿がハッキリ見えてくる。

3メートルぐらいの大きさで 毛深い大男の様な体にバッファローに似た一本角の牛の頭。手には巨大な斧を持っている。

「ミノタウロスが3体：おかしいですね。不気味な魔力の気配が消えていきます。」

レオは辺りを注意深く見渡しながら呟く。

ロイは既に大剣を構え 戦闘態勢に入っていた。

「ロイは左の奴をお願いします。後は任せてください。」

レオは魔法を放つため 掌に魔力を集中させながらロイに指示を出

す。

「了解……」

ロイは再び黒い閃光となつてミノタウロスの懷へと飛び込んだ。

ガキイ——ン——！

金属同士が激しくぶつかる高らかな音を放ち ロイの大剣とミノタウロスの斧が衝突する。

「……たすが中級。一筋縄じやいかねえか……」

すぐさま後方に飛び ミノタウロスとの距離を取る。

『サンダーbolt！』

その間 レオは2体のミノタウロスに対し魔法を放つ。
数本の雷が天から降り注ぎ ミノタウロスの体へとぶつかる。

「ブオオオオオオ——！」

ミノタウロス2体は断末魔の叫びをあげ 黒焦げになつて地に伏せる。

その光景を見たロイは若干の焦りを見せていた。自分は1体を1撃で倒すのに失敗したが レオは2体をいとも簡単に1撃で倒して退けたからだ。

しかし その焦りは一瞬のもの。ロイは即座に気持ちを切り替えミノタウロスへと剣を向ける。

ロイは白銀の翼では新人扱いではあるが 他のギルドの傭兵達と比べれば戦闘能力は格段に上位クラスだ。そんな戦闘のプロとも言えるロイが このような焦りから取り乱すことなど皆無と言えよ。

「フツ……」

ロイは大きく息を吸い込んでから一気に吐き出し ミノタウロスへと向かう。先程の直線的な特攻ではなく ジグザグに華麗なステップを踏み 相手を翻弄する。

ミノタウロスはキヨロキヨロとロイの動きを目で追いながら斧を大きく振りかぶりロイ目掛けて振り下ろす。

しかし ロイの閃光のようなスピードとミノタウロスの鈍足な動きでは雲泥の差。斧は空しく空を斬り 地面へとぶつかつた。その好機をロイが見逃すはずはない。素早くミノタウロスの背の高さまで跳躍すると 横薙ぎの一撃を繰り出した。

呆気なくミノタウロスの首が宙を舞い 首を失った体は地面へと倒れ込んだのだった。

「よしーやつたぜー！」

ロイは小さくガツツポーズをして見せた。

その時…

突如 レオが先程感じた不気味な魔力が辺り一帯から漂い始める。

「なんだこれ！？ すげえ嫌な感じがする…」

「ロイ！ 気をつけて下さい！ 何か近くにとんでもない者がいるはずです！」

一瞬にしてロイとレオに緊張が走る。一人は背中を合わせるようにして 辺りを警戒し 身構えたのだった。

第3話 暗黒の胎動

強大な魔力により辺りの一切の雑音が遮断され 完全なる無音の世界となる。

「凄まじい魔力です。ロイ！退却も頭に入れておいてください。」

「…わかつた。」

二人の額からは緊張により汗が流れ出していた。

その時 道の脇にある草むらのほうから人影が現れ ゆっくりと一人に近づいて来る。

その異様な魔力を感じ取り レオは人影に向かい両手を突き出し魔力を溜め始めた。

ロイも続いて 人影の方向に体を向け 大剣を構える。

「ほう… 我の魔力を感じ取りながら尚 刃を向けるか。」

一見 人の姿に見えるが 血の通っていないような 白い肌に金色の瞳。尖った耳。髪は腰の辺りまで伸びた黒髪。全身黒ずくめの服装に黒いマントを着けている。

「魔人ですか…」

魔人…その名の通り 魔物側の人間の様な存在で 強さは人間と同じ様に個々により様々である。それによつて他の魔物みたいにランク付けはされていない。下級ランクの魔人もいれば上級ランクの魔人もいるからだ。

『サンダースピア』

レオの手から鋭い雷の槍が放たれる。

魔人は自分に向かつて飛んでくるサンダースピアを見据え 顔色一
つ変えずに身に付けたマントで身を包んだ。

バシュン！

魔人へと直撃したサンダースピアは跡形も無く消し飛ばされる。

「ふむ…中々の魔力だ。だが 我を倒すには あまりに無力！」

身を包んでいたマントをバツと開き レオを嘲笑う。

「ならばこれはどうです！？」

『スパーク』

魔人の回りに広範囲の雷が対流する。

「なるほど…これで我的動きを止めるつもりか。」

魔人は雷に閉じ込められながらも 余裕の笑みを浮かべていた。
そのまま魔人は右手を前に向ける。

すると 掌の前に黒い球体の様な物が現れ 雷は全て黒い球体へと
吸い込まれてしまった。

「…ブラックホール?いや 魔力吸收の類いですか?」

「いひがそつさま。」

「正解の様ですね。」

魔人はレオの問いにニヤリと口の端を吊り上げると 納得したレオ
も同じようにニヤリと笑って見せる。と同時に後方へと飛び退いた。
先程までレオが立っていた位置に雷撃が放たれる。雷撃の出所は魔
人の掌の前にある黒い球体からだ。

黒い球体はレオのスパークを吸収し そのまま雷撃に変換され レ
オへと放たれたのだ。

「よく避けたな。人間にしては大したものだ。」

魔人の言葉が終わるとほぼ同時に、凄まじい速さで黒い閃光が魔人へと向かう。

「何つ！？」

黒い閃光となつたロイはそのままの速さで激しい剣撃を連續で繰り出す。

しかし魔人はそれを凌駕する速さで剣撃の嵐をかわし続けた。そしてそのままロイの腹に蹴りを放つ。

蹴りをまともに食らつたロイは数メートル吹き飛び、ビルドの町の外壁に激しく叩きつけられた。

「ぐう…」

「その髪色……なるほど、道理でこれだけの速さを持つ訳だ。貴様も我等の力に魅了された者の一人か……いや、この魔力は種の者かおもしろい。」

魔人はロイを見つめ、笑みを溢す。

「種の者？なんのことです！？貴方はロイのことを知っているんですか！？」

レオが魔人へと詰め寄る。

「ん？興味があるのか？フフ…『己』で調べるんだな。」

魔人は右手をレオへと向ける。

「ま 待て！…この…野郎！…」

大剣を杖によるめきながらロイはゆっくりと立ち上がり 魔人に向
かって叫ぶ。

「今の話し…教えろ！お 僕は…一体…なんなんだ！？」

ロイは鬼の形相で魔人を睨みつける。
そんなロイを魔人は嘲笑う。

「知りたければ力ずくで聞き出してみる。」

「う、オオオオオオ！！」

凄まじい雄叫びをあげて ロイは魔人へと突っ込む。その体の周りには黒いオーラの様なものが放出されていた。

「ロイ…？」

ロイの変化にレオは不安を覚える。今のロイから感じ取れる魔力は邪悪な物だったからだ。

ロイは黒いオーラを放ちながら再び剣撃を連続で繰り出す。しかし黒いオーラ以外に先程とは違う所があった。

それは速さだ。先程の倍以上の速さで剣撃の嵐を繰り出していた。徐々に魔人の体は斬り刻まれ 赤黒い鮮血が飛び交う。

しかし魔人は余裕の表情を見せていた。

「フフ… そのままで魔力に飲み込まれるぞ。」

「うるせえんだよおおおーーー！」

剣撃は更に激しさを増す。

そんな中 魔人はロイの腹に手を当てる。

その瞬間 手から黒い光が放たれ ロイの体が宙に舞つた。

「があつ！！」

苦痛の呻き声をあげ そのまま地面へと激しく叩きつけられる。

「ロイ！！」

『サンダー・ボルト』

ロイの元へ駆け寄りながらレオの手から雷が一直線に放たれる。魔人はそれを上半身だけを動かし かわした。

「ロイ！大丈夫ですか！？」

慌ててロイの半身を抱え上げ 声をかける。

しかし黒いオーラは既に消え去り ロイの意識は朦朧としていた。

『これはまずいですね… 早く治療しないと。』

そこに魔人がゆっくりと歩み寄る。

接近に気付いたレオは臨戦態勢をとった。

「構えなくともよい。この町の襲撃は中止だ。私はこれで引き上げ

させてもらう。その小僧は実に興味深い……そいつが強くなつた頃に再び現れよう。……我的名はガルハイト。精々足搔くんだな。脆弱な人間よ。」

そう言い残すとガルハイトは自ら作り出した闇の空間へと消えていく。

ロイはガルハイトの言葉を朦朧とする意識の中、頭に刻み込んだのだった。

瞼を開けると、そこには見馴れた風景が写し出された。白銀の翼のアジト。ロイの自室だ。

「…つ…！」

ロイはベッドからゆっくり半身を起こした。体の節々が痛み、悲鳴を上げている。

「力に魅了された者……種の者……魔力に飲み込まれる？ 一体どういうことなんだ？ それにあの力は……」

ロイはガルハイトの言葉を思い返し、頭を抱え込む。その時、部屋の扉が開かれ、レオが中に入ってきた。

「ロイー！気がつきましたか。」

レオの表情が驚きから安堵に変わる。

「あれから2日間 眠り続けていたんですよ。」

「2日間！？」

レオの言葉にロイは驚愕する。
あのガルハイトとの戦闘から2日間もロイはは田を覚まさなかつたのだ。

「おそらくあの黒いオーラの様な物が原因でしょうね。あれは身体能力を大幅に上げる効果があるようですが 体力を大量に奪うリスクもあるんでしょう。あまり何度も使わないほうがいいですよ。」

「いや あれはじつやつたのか俺にもわからないんだ。」

ロイの言葉にレオは腕を組み 考えこむ。
あの時のロイから感じた物は邪悪な気配。
博識なレオでさえ謎の出来事だったのだ。

「おおー！田が覚めたかロイ！ー」

部屋の扉を豪快に開き バルボアがズカズカと入ってくる。

「オッサン うるせえよ。病み上がりなんだからもつと静かにしてくれ。」

バルボアはロイの言葉に豪快に笑つてから 真剣な顔つきになり口を開く。

「レオから話しさ聞いた。今は体に異変はないのか？」

「今は大丈夫だ。ちょっと体がだるいくらいかな。」

バルボアの言葉に腕を回しながら答える。

「そうか。俺の古い友人にカイラスという博識の魔術師がいるんだが そいつならお前のことがわかるかもしけん。一度話しかけてみるのもいいかもしけんが…」

「本当か！？ それなら会つてみたい！」

ロイは目を輝かせるが 何故かバルボアは浮かない表情をしていた。

「それは神祕の森のカイラス殿ですか？」

バルボアの反応にレオが口を開く。

「… そうだ。」

二人の表情が曇るが ロイには理由がわからず 疑問符を浮かべている。

「なんだよ？ その神祕の森つて？」

「神祕の森は 一度足を踏み入れたら 一度と生きては戻れないと言わ
れている難所ですよ。」

「でもそのカイラスつて人はそこに住んでんだり？」

「奴は特別だよ。実力もあるし 知識も豊富だ。奴は大体の道を把
握している。しかし常人ではそんなことは不可能だ。」

バルボアは頭を搔きながら困った様な表情を浮かべた。
しかしロイの瞳の輝きは失われてはいなかつた。

「俺はそれでも行くよー。」

ロイの言葉にバルボアとレオは同じように苦笑する。こうなつてしまつた時のロイには何を言つても無駄だということを一人は知つていたのだ。

「わかつたわかつた！ 神秘の森の場所を教えてやるよー！ ぐれぐれも無茶だけはするなよー！」

「了解！」

この選択がいかに過酷な物か この時のロイは知るよしもなかつた。

翌朝 まだ太陽も昇りきつていない薄暗い早朝から神秘の森へと出発する。

今現在このガレン大陸の季節は肌寒い秋の時期。
冷たい風がロイの肌に突き刺さる。

「寒つーもうちょい着込んでくりやよかつたかな……ん？」

ロイの前方から人影が近づいて来ていることに気付き 足を止めた。

黒いフード付きのローブに大剣を背負つた男。

ローブの裾はボロボロで頭までフードを被つていて顔は半分隠れている。いかにも怪しい雰囲気を漂わしていた。

「ジャガーンさん！？」

ロイの呼びかけに男は顔を上げる。

「…ロイ…か…」

この男は白銀の翼 初期メンバーの一人。魔剣士のジャガーンだつた。実力ではマスターであるバルボアを凌ぎ 白銀の翼最強と言われている強者だ。

誰にでもフレンドリーに話すロイでも このジャガーン相手では 異様な雰囲気とオーラもあり 自然と敬語になつてしまつていた。

「仕事…か？」

「今日は仕事じゃないです。カイラスって人に会いに神秘の森に行くところです。」

ロイの返答にジャガングがピクリと反応する。

「神秘の森……あそこは……氣をつけろ。」

「わかつてます！俺は絶対戻つて来ますよ！」

ロイは笑顔で答える。

その強い眼差しを見て ジャガングは一瞬微笑んだ様に見えた。

「じゃあ 行つてきますんで！！」

ロイは胸の前で力強く拳を握りしめて見せた。

「シユバルツの田に……アイツはどうなるか……」

ジャガングは黒のローブを風になびかせながら 見送る様にロイの背中を見続けた。

白銀の翼を後にしてから 時間にして6時間程。
ロイは神秘の森の入口へと到着していた。

「ロイが神秘の森……」

その異様な雰囲気に圧倒されていた。

その名の通り 言葉にするなら正に神秘の一言だ。

「……行くか！」

ロイは力強く神秘の森へと足を踏み入れた。

第4話 種の者

森の中は 葉の多い高い木々が並んでいるため太陽の光が入りずら
く 薄暗い視界が続いていた。

「クソ……さつきから景色が全然変わんねえ……ちゃんと進んでんのか
？」

神秘の森に足を踏み入れてから およそ5時間。
ひたすら歩き続けるロイに疲労の色が見え始めていた。

「カイラスって人はどこにいんだ？ 魔力の気配を辿れば大丈夫と思
つたんだけどな……そこら辺から魔力の気配がして どれかわからんね
えよ。どうなつてんだこは……」

神秘の森は自然の魔力が集まる聖地とされている。木々や花にも微
量ながら魔力が宿っているのだ。故に魔力探知能力が高いレオにな
らカイラスという人物を特定することも可能だつたかもしれないが
魔力探知能力があまり高くないロイにとつては かなり難しい。

突然感じた邪悪な魔力にロイの足が止まる。

「……？」

こちらに敵意を感じる気配が4つ。

ロイは背中の大剣を引き抜き 前方に構えた。

草むらから1つ目 1本足の魔物が4匹飛び出して ロイを取り囲む。

この魔物は下級ランクのリツキー。俊敏な動きが特徴の魔物だ。

「魔物までいんのかよ！？」

ロイは大剣を下段に構え 正面のリツキーに向かって疾走する。

「つりあつーーあーー！」

振り上げた大剣は空しく空を斬る。

「キキキキキッ！」

攻撃をかわしたリツキーがロイを嘲笑つかのよつて その場でピヨンピヨン飛び跳ねていた。

「…」の野郎。」

ロイの眉がピクリと動き 苛立ちを見せる。

歩き続けた疲労のせいかロイの動きが若干鈍いようだ。

「キイシー。」

背後にいたリッキーがロイの背中に向け蹴りを放つが それをヒラリと体を捻り かわす。

と同時に疾風の如き 斜め斬りでリッキーの体を一刀両断にする。

「1匹目。」

50

間髪入れずに再び正面のリッキーへ向かって疾走した。

素早く飛び上がり 大剣をかわそうとしたリッキーだが 更に速い剣撃の前に無惨にも鮮血を撒き散らしながら真っ二つとなる。

「2匹目。」

そのまま左方向に横つ飛びし リッキーの眼球目掛けて鋭い突きを繰り出す。

リッキーは呆氣なく眼球ごと体を貫かれ絶命した。

「3匹目。」

残されたリツキーがロイ目掛けて飛び掛かる。

「ラストオー！」

真上に跳躍し 旋回しながらの墜落としてリツキーを地に打ち付けて そのままの勢いでリツキーごと大地に剣を突き刺した。

「ふい〜〜！ 一丁上がり！」

電光石火の早業で4匹のリツキーをあつといつ間に倒したロイは手を叩きながら余裕の表情を浮かべる。しかし 疲労していた体で戦闘を行つた為 ロイの体力は限界に近づいていた。

「…」の辺でちょっと休むか…」

疲れきつたロイはその場で腰を下ろす。この行動が後に後悔することになるとは知らずに。

時刻は夕刻の刻。辺りは夕日によつて紅く染められている。ロイはいつの間にか 眠つてしまっていた。

今日の疲労だけでなく ガルハイドとの戦闘の疲労とダメージも残つていたのだから当然の結果と言えよう。

その時、突如ロイが横になつている地面が爆発を起こす。

「があつー。」

寝起きにこきなり爆風に飛ばされたロイは受け身も取れずに地面に激しく叩きつけられる。

「な なんだ！？」

爆発の起こつた場所に目を移す。すると爆煙の向こう側から棘付きの棍棒を持った緑色の肌の 小鬼の様な魔物がぞろぞろ現れる。

更にその背後から茶色のローブに身を包み 杖を持った緑の小鬼が現れた。

ゴブリンの大群とゴブリン・シャーマンだ。

ゴブリンの大群は優に20匹を超える多さだ。

先程の爆発はゴブリン・シャーマンの魔術であつた。

「次から次へと……なんて数だよ……」

ロイはよろめきながら立ち上がり 大剣を抜こうと背中に手を回す。

「……？」

しかしロイの大剣はゴブリンの大群のど真ん中に落ちていたのだ。

「まことに……」

「ゴブリン」と「ゴブリン・シャーマン」は下級ランクの魔物だが、いくら下級ランクとは言え、あの数と疲労した体に武器なしでは、相当な驚異となる。

「まことに剣だな！」

残る力を振り絞り、黒い閃光となつてゴブリンの大群へと突撃する。しかし大群の元へ到着するより早くゴブリン・シャーマンの魔法ファイアーボールによつて弾き飛ばされた。

「うわあつ！」

元の位置まで弾き飛ばされたロイは地面で一回転し、態勢を整える。

「くそ！軌道は見えてたのに足の踏ん張りがきかなかつた！」

自分の体が思う様に動かせない悔しさから 齒をくいしばる。
その間にもゴブリン・シャーマンは再びファイアーボールを放つ。
それをなんとか右に跳躍し かわした。

「ゲギヤギヤ！」

ロイの着地した瞬間を狙い3匹のゴブリンが棍棒を振り上げ 向かって来る。

そのゴブリン達の攻撃を右へ左へかわすロイだが 徐々に棍棒の棘によつて 体を斬り刻まれる。

体調万全のロイなら これだけの数でも無傷で切り抜けることは可能だろうが この状況ではそれだけ疲労していることがわかる。

「クソったれがあ！」

たまらずロイは正面にいたゴブリンを蹴り飛ばし 後方へ飛び退く。

その時…

「アオオオオオーン！－！」

後方から狼の遠吠えが聞こえてくる。

と同時に白い閃光がジグザグにゴブリンの大群へと突撃し ゴブリン達は呆気なく鮮血を撒き散らしながらバラバラになつて地面に転がつた。

「白い狼……？」

ロイの視線の先には 綺麗な白銀の毛並と黄金色に輝く瞳を持つ巨駆の狼が ゴブリンの大群の中心に堂々と立つていた。

その姿には神々しい雰囲気と邪悪さが入り交じる不思議な気配が漂つていて。

その姿に見入つていたロイだが ふと銀狼の視線がロイに向かられる。

「命ガ惜シクバ立チ去レ人間…ゴブリン程度ニ苦戦シテイルヨウデハコノ森デハ通用シナイゾ。」

銀狼の口から発せられる言葉にロイは目を丸くする。

「喋つた…？」

人間とは異なる声帯の為 所々聞き取り辛くはあるが たしかにこの銀狼は人語を話したのだ。

「聞コエタダロ?去レ!」

呆然と立ち尽くすロイに向かい銀狼が口を開く。

その言葉で我に返ったロイはニヤリと口元を緩めた。

「」忠告有り難いが俺にはまだやるべきことがあるんだ。帰る訳にやいかねえよ。お前 人の言葉がわかるんだろう? すまねえけど その足元の剣を拾つてくれないか?」

銀狼の足元に転がる大剣を指差しながらロイが答える。

銀狼は足元に視線を移すと 大剣を口にくわえ ロイ目掛けて放り投げた。

「好キニシロ……」

「助かるー!」

ロイは大剣を掴むと同時に標的を変え ゴブリン・シャーマンへと疾走する。

「多少休ませてもらつたから さつきよりは体が動くぜ!」

そのまま黒い閃光となり 銀狼の前を通過し ゴブリン・シャーマンの懷へと飛び込んだ。

そのタダ者とは思えない驚愕のスピードに今度は銀狼が目を丸くする。

その刹那 杖で大剣を防ぐとしたゴブリン・シャーマンの杖」と体を一刀両断に斬り伏せる。

「スマヌ…前言撤回ダ。貴様ハ コノ森デモ通用スル強者ノヨウダナ。」

銀狼は口の端を吊り上げる。笑つたのだらつか？器用な狼である。

「シカシ カナリ疲労シテイルヨウダナ。休ンテイロ。」

そう告げると銀狼は宙に高く跳躍し そのまま横に旋回すると 白い旋風となつて次々に残りのゴブリンを蹴散らしていく。

「すげえ…」

銀狼はあれだけの数がいたゴブリンを 瞬き一つの間に全滅させたのだ。

ロイは情けなく口をあんぐり開いてその光景を眺めていた。

「貴様 何ノ為ニココヘ来タノダ?」

銀狼はゆっくりとロイのほうへ振り返る。

「カイラスつて魔術師を探してるんだ。」

ロイは大剣を背中に納めながら答える。

「.....」

急に無言になつた銀狼にロイは不思議そうな表情を浮かべる。

一方の銀狼は無言のままロイの姿を観察するよつに眺めていた。

しばしの沈黙の後 最初に銀狼が口を開く。

「ソノ髪色...コノ魔力...貴様 種ノ者力?」

その言葉にロイの目の色が変わる。

「お前 種の者が何なのか知つてゐるのか！？！」

いきなりのロイの変化に銀狼は一瞬驚きを見せる。

「貴様 知ラヌノカ？……ナルホド…ソレデ カイラス殿ヲ探シテ
イルワケカ。」

銀狼は一人納得した表情を浮かべ うんうんと頷いていた。
しかし なかなか答えを聞き出せないロイは更に声を荒げる。

「知つてゐるなら答えてくれ！！種の者つてなんなんだ！！？この髪
色とどう関係しているんだよっ！！！？」

興奮状態のロイに銀狼は落ち着けと促すが ロイは既に頭に血が昇
つてかなりヒートアップしていた。

幼少の頃から 他の人とは違う不気味な髪色のせいで酷いいじめや
差別を受けていたロイにとつては仕方がないことなのかもしれない。
白銀の翼という唯一 心安らげる場所を見つけても 長年 孤独に
悲惨な人生を歩んで深い傷を負つた彼にとつては 簡単に埋められ
る物ではないのだ。

「我ノ知識モ全テハ カイラス殿カラ得タ物。話ヲ聞キタクバ 直
接力イラス殿ニ聞クノダ。貴様ハ ソノ為ニ ココヘ来タノダロウ
？連イテ来イ。案内シヨウ。」

銀狼は振り返ると森の中へと足を進めた。
ロイも銀狼の言葉で少し落ち着いたのか 深い深呼吸をしてから後
を追つて行く。

数分 森の中を沈黙のまま歩き続けていたが 銀狼はロイが落ち着
いたのを横目で確認した後 口を開いた。

「我ノ名ハ シュバルツ。貴様ノ名ハ？」

シュバルツと名乗った銀狼は足を止めることがなく 首だけを少しロ
イの方へ向ける。

「俺はロイだ。さつきはすまなかつた…宜しく頼む。」

ロイは少し恥ずかしそうに頭を搔きながら答えた。
それを見てシュバルツはフツと笑みを溢す。

「貴様 白銀ノ翼ノ者ダロウ？ジャガソハ元氣ニシテイルカ？」

シュバルツの口から知った名前が出てきた事に驚いてロイは足を止

めた。

「ジャガンさんを知つてんのか！？」

「古キ友ダ…イヤ…親ト言ッタホウガ正シイカ。」

シュバルツも足を止め どこか思い出に浸るような表情をしている。

「親あ～！～？」

「奴ノ生マレハ知ラヌガ 奴ハコノ森テ育ッタ。育テタノハ我ダ。」

シュバルツは再び足を進めながら答える。

ロイも慌ててシュバルツの後を追つた。

「ジャガンさん…狼少年だったのか…イカすなあ…」

目を輝かせながら訳の分からぬ事を言つロイをシュバルツは遠い目で眺めていた。

ロイにとつてジャガンは知らぬ間に憧れの対象となつていたようだ。これにはある理由があるのだが それは後に分かる事である。

シユバルツと共に歩き続けること数時間：

森の中にヒツソリ佇む 木造の小さな小屋へと到着していた。
道中 様々な魔物の襲撃にもあつたが頼もしい銀狼が共にいたこと
もあり 苦も無く退けていた。

「カイラス殿！客人ヲ連レテ来タゾ！」

シユバルツが小屋に向け そう叫ぶと 扉がギイツと年期の入った
鈍い音を奏でながら開かれ 中から黒いローブに身を包んだ一人の
優しそうな白髪の老人が姿を現した。

「客人とは珍しい。ワシに何か用かな？若いの。」

カイラスは笑顔でロイを迎える。

「俺はロイ・ストライド。バルボアに教えられてアンタを探してた
んだ。聞きたいことがあるんだが いいか？」

ロイは軽く会釈してから 早速本題へと入った。

「バルボアか…懐かしいなあ。まあ立ち話もなんじやし 疲れてお
るじやろ？中に入りなさい。」

カイラスはそう言いながら小屋の中へと入っていく。
そしてロイヒシュバルツも その後に続く。

小屋の中は中央に机と椅子が並び 後は大量の本に埋め尽くされた
本棚がズラリと並んでいた。

「どうぞ。座りなされ。」

カイラスはゆっくり椅子に腰掛けながら 向かい側の椅子を指差す。

「お邪魔します。」

ロイは辺りを見回しながら カイラスが指差した向かい側の席へと
腰を下ろした。

シュバルツは机の横の床へ腰を下ろす。

「それで聞きたいことは なんだね?」

「『』の俺の髪色と種の者について教えてほしい。」

カイラスはロイの髪を見つめ フムと一息つく。

「魔食者といつのは、『存知かな?』

「ましょくしゃ?..」

聞き慣れない言葉に疑問符を浮かべる。

「君の様な髪色の者は大きく分けて 魔食者と種の者の二つに分類される。」

前者の魔食者といつのは魔物の血肉を口にし 魔物の力を得た者のことと言つ。

後者の種の者といつのは人間の女が魔物に種を植え付けられ 身籠つて産まれた子供のことと言つのじや。」

カイラスの言葉にロイは生睡を飲み込む。

「…つまり 魔物と人間の子供?」

カイラスはロイを見つめ しばらく黙り込んだ後 話しを続けた。

「……やつこいつとじや。お前をとせどりやつ後者のよつじやの魔食者と種の者の共通の特徴として髪色が色素の抜けた銀髪となるのじや。」

「…………」

カイラスから告げられる驚愕の事実にロイは言葉を失つてしまつて
いた。

その光景を見て シュバルツが口を開く。

「シッカリシロ！貴様ハ話ヲ聞キニ來タノダロウ！？最後マデ聞キ
遂ゲロ！！」

ロイは銀狼のほうに視線を移してから 力強く頷き 視線を戻して
カイラスの目を真っ直ぐに見つめた。

「うむ！話を続けよう。魔食者と種の者は同じように関わりを持
つた魔物によつて大きく差が出る。魔食者ならば捕食した魔物の強
さに種の者ならば種を植え付けた魔物の強さによつて能力に違い
が出る。より高ランクの魔物と関わればそれだけ強さも上がるとい
うことじじゃ。」

「種の者が魔物を食つたらどうなるんだ？」

「いい質問じや。本来 普通の人間が魔物の力を得ることは不可能
なんじや。魔物の邪悪な魔力には精神を汚染し 命を蝕む力がある。

常人なら魔物を捕食したり 種を植え付けられた時点で死に至る。強靭な精神力の持ち主か特殊な力を持つ者にしか 力を得ることはできない。かと言つて必要以上の捕食は それだけ体に負担がかか り 死ぬ可能性が大幅に上昇することになる。

種の者に至つては 元々体が最大限に魔に近づいている状態なのじ ゃ。つまり捕食は危険な選択となるといふことじやな。」

「なるほど。必要以上に力を欲すれば 死の制裁が待つて いるとい うことだな。」

「そういうことじや。例としては そこのシユバルツじや。」

カイラスはシユバルツを指差しながら そう告げる。
ロイは銀狼へと視線を移す。

「彼は元々この森の主。侵入した魔物を撃退しては捕食を続けて いた。それによつて大きな力を得る事はできたが 体はもうギリギリ の状態じや。ワシが知識を与え なんとか止めることはできたが もうかなり寿命は縮んでしまつたことじやろつて。
まあ彼の場合 力を求めた訳ではなく 生きる為の選択じやがな。」

「どうりで強いし デカイし 真っ白な訳だ。なんか変な感じして たんだよなあ……」

ロイは銀狼をまじまじと見つめながら そう呟いた。

「それと最後に重大なことを一つ。種の者には覚醒といつものが存在する。」

「覚醒…？」

「左様。覚醒とは魔物の姿へと体が変化し 格段に戦闘能力が上昇することを言う。狼男等 ライカンスロープ（獣人）の様なものを想像すればいい。

覚醒は感情の激しい変化や 死の危険が迫ると発動する」ことがある。必ずしもという訳ではないのじやがな。」

「…それって元に戻ることはできるのか？」

ロイの目に不安の色が見える。

「それは覚醒した者による。強い精神力の持ち主なら覚醒しても自我を保ち 自力で戻ることが可能じや。中には暴走し 戻ることが出来ず そのまま魔物となる者もあるがな。極力覚醒は避けたほうがよいじゃねつ。」

「そうか… ありがとう。驚いたけど なんかスッキリしたよ。」

ロイはカイラスに深く頭を下げる。
カイラスはそれを見て優しく微笑んだ。

「それはよかつた。これから先 様々な苦難があると思つが頑張る
んじやぞ。

今日はもう遅いし 泊まっていくといい。」

外はもう日が落ち 暗い視界が広がっている。
カイラスの言つた様に この先 ロイには数々の苦難が待ち構えて
いるのだった。

第5話 魔導教典と豪魔邪靈衆

日が昇り 森の中は木々の隙間から陽射しが射し込み 幻想的な光景が広がっていた。

しかし 神秘の森の動物や植物達は怯える様にざわついていた。

「ロイ君！起きなさい。」

うつすらと瞼を開けると 体を揺さぶつてくるカイラスが目に入る。その表情には焦りの様なものが見えていた。

「なんかあつたのか！？」

カイラスの表情に異変を感じ ロイは飛び起きる。

「ワシの張つていた結界が 邪悪な魔力に破られた！かなり強大な魔力じゃ…

恐らく上位ランクの魔物…

「上位ランク！？」

上位レベルの魔人であるガルハイトとは遭遇したことはあるが 今

まで上位ランクの魔物とは遭遇したことがなかつた為 驚きを隠せない。

未知なる物への不安と 強敵と戦闘が行える喜びが入り交じつた。

ロイは大剣を手に取り 部屋を見回す。

銀狼の姿が見えない。

「シユバルツは？」

「ワシより先に魔物の気配を感じ取り 飛び出して行きよつたわ。」

カイラスはそう告げながら窓の外を眺め 心配そうな表情になる。

「……の魔物 真っ直ぐ ここへ向かっている様じやな。」

急にカイラスの表情が険しくなる。

「どうこいつだ？ 狹いは爺さんなのか！？」

「いや… 恐いへんじやねん。」

カイラスはそう答えながら一冊の黒い分厚い本を取り出した。

「それは？」

「魔導教典、

コレには様々な強力な魔術が書かれている。魔道具の一つじや。」

魔道具とは簡単に言つと　この世界に存在する強力な力を秘めたレアアイテムのことだ。

「」の魔導教典を狙う魔人の一団が存在するんじや。」

「魔人…」

ロイの脳裏にガルハイトの姿が過る。

「その一団の名は豪魔邪靈衆。
じゅうまじやれいしゅう

恐らくは其奴等にこの場所を悟られ　使い魔を送り込まれたんじや
るつ…」

ズシン！――！

その時…

大きな地響きが起こり 銀狼の咆哮が近くで聴こえてくる。

「どうやら ここまでたどり着いてしまったようじゃの。
ロイ君…手を貸してくれるか？」

「おう…！」

二人は外へ飛び出し 銀狼の咆哮が聞こえる方へ急いだ。

「ナントイウ大キサダ…」

シユバルツの眼前には四足の巨体 暗い紫色の肌に 頭にはゴツい
角が一本生えた 超大型の魔物。

悪魔の野獣ベヒーモスが牙を剥き出しながら睨みつけていた。

シユバルツの美しい白銀の毛並は出血によつて いたるところが紅
く染められている。

「シユバルツ！無事か！？」

後方から走つて来たロイは剣を構え シュバルツの前に身を乗り出します。

それから遅れてカイラスが 息を切らしながら現れる。

「ベヒーモスか… 骨が折れるの…」

2人と1匹は 直ぐ様 戦闘態勢へと入つた。

「なんだあ？ ガキと老いぼれと犬つころかよ…
随分つまんねえ仕事だなあ。」

ロイ達は急な上からの声に視線を上げる。
すると ベヒーモスの頭の上に人影が現れた。

「誰だお前！？」

「豪魔邪靈衆が1人 ジダンだ。大人しく魔導教典を渡せ。」

ベヒーモスの頭の上に立つ魔人が 面倒臭そうに答える。
逆立つた金髪に 赤い刺々しい鎧を身に着けている。

「貴様らは魔導教典を殺戮兵器として使うつもりじゃろー断じて渡さんー！」

カイラスの目には怒りの炎が灯っていた。

「おいおい そんなこと言つてると俺様の可愛いペットの餌にしちまつぞ？」

ジダンはニヤつきながら ベヒーモスの頭を撫でる。

「渡さねえつづつてんだよ！クソ魔人ー！」

ロイは大剣の先をジダンに向け 力強く叫んだ。

それを見たジダンの顔つきが変わり 頭をかきむしり苛立ちを見せる。

「やれー！ベヒーモス。」

大地を震わす様な 咆哮をあげながらベヒーモスが動く。
振り上げた足の目標はロイとシユバルツ。

風を裂きながら 憎まじい音をたて ベヒーモスのストンピングが迫る。

ロイとシユバルツは同時に横へ飛び退き それをかわすと ロイは

頭上の魔人目掛け シュバルツは踏み下ろされた足へと突撃する。更にその後ろではカイラスが魔導教典を開き 魔法を放つ為 魔力を溜め始めていた。

「ハムをおねがい……。」

ロイは雄叫びをあげながら剣を振りかぶる。
しかし ジダンへ届く前に ベヒーモスが頭を縦に振り ロイへと
ぶつけた。

「ぐう……！」

大剣を横に構え ガードはとつたものの ベヒーモスの重い一撃を
耐えきれる筈はなく そのまま急降下していく。

その間にシユバルツはベヒーモスの足へと食らい付くが
によって 牙はいとも簡単に弾かれた。

「二人共 下がれ！！」

カイラスの言葉に
く。
ロイとシユバルツは着地と同時に後方へ飛び退

『ジオ・スタンプ』

魔導教典から眩いひかりが放たれ ベヒーモスを取り囲む様に円上に 重力のプレスが炸裂する。

ズンッ！――！

凄まじい轟音と共に 重力の重みがベヒーモスを押し潰そうとする。

「ゴアアア……」

ベヒーモスはなんとか踏み留まり 態勢を保っていた。
その頭上でジダンが苦悶の表情を浮かべている。

「やつてくれる……」

重みに耐えながら ジダンは口の端を吊り上げた。
好戦的性格のジダンはこの状況を楽しんでいるようだ。

「グオオオオオ――！」

ベヒーモスが凄まじい咆哮をあげながら 膨大な魔力を解き放つ。森の木々が咆哮によつてザワザワと揺れている。

森の中に静寂が戻つた。魔力の放出でカイラスの魔法を焼き消したのだ。

「なにー?」

カイラスはその光景に眉を寄せる。

「よくやつた。今度はこいつの番だな。」

そう言いながら ジダンは手を高く掲げた。

すると ジダンの回りに赤い大きな針のような物が多数現れる。

『レッド・ヒーラル』

掲げた手をロイ達の方へ振り下ろすと 回りに浮かんでいた赤い針が一斉にロイ達に降り注ぐ。

上空から降り注ぐ無数の赤い針をロイとシユバルツは華麗に避ける。カイラスは周りに魔法障壁を張り これを防いでいた。

「小僧！トニカク アノデカイノヲ倒サント 埼ガアカン！行クゾ
！！」

「おうーーー！」

攻撃を避けながらシユバルツはロイに声をかけ 同時にベヒーモスへと疾走し その巨大な腕を器用に駆け上がった。
体の上を移動されている為 ベヒーモスには体を震わせ 振り落とそうとするこことしか出来ない。

そのままシユバルツはベヒーモスの頭部まで駆け上ると その瞼に噛みついた。

「ギャオオオオーーー！」

ベヒーモスが苦痛の叫びをあげる。

「馬鹿野郎！前だーーー！」

ジダンが叫ぶ。

ベヒーモスの眼前には 口イが大剣を構えながら 宙を舞っていた。
シユバルツが瞼に食らいついて視界を狭め その死角から口イが跳躍し 接近したのだ。

「離れる シュバルツ！」

シュバルツが飛び退くと同時に ロイの体から黒いオーラが吹き出し そのまま大剣をベヒーモスの額に掛け 振り下ろす。

ベヒーモスの額がパックリ裂かれ 中から赤黒い血が大量に噴き出した。

「グオオオオ……」

呻き声をあげながら ベヒーモスは大地を揺らして 崩れ落ちた。

「テメエ…種の者かよ…
おもしれえじやねえか。」

ジダンが笑みを溢しながら ゆっくりとベヒーモスの頭から降りる。

「氣をつけるんじゃ！ロイ君！」

カイラスはジダンを警戒し 構える。

ロイの体からは禍々しい黒いオーラが放たれ続けていた。

黒きオーラのマイナス面 体力の大幅な浪費がロイの体を蝕む。

「…」いやあ一気にケリつけないと ヤバいな…」

大剣を前方に構え 臨戦態勢をとる。

ジダンはそのままゅつくつと歩み ロイとの距離を縮めていた。

「踊れ…」

ジダンは先程と同じ様に手を高く掲げた。

すると 先程よりも圧倒的な数の赤い針が上空に浮かび上がる。

「イカン…！」

シユバルツが援護の為 飛び出すが 一歩遅かつた。

『レッド・ニードル』

再び放たれた赤い針は 視界を覆いつくす程の数だ。
それが全てロイに向かつて飛ぶ。

「くそつ……」

黒いオーラの戦闘能力向上を利用して剣で弾いたり 避け続けるがあまりにも数が多い。徐々に体のあちこちに傷が増えてゆく。

そして遂に ロイの左肩 左脇腹 右ももを赤い針が貫いた。

「ぐわあっ……！」

赤い鮮血を撒き散らしながら 苦痛の悲鳴をあげる。そのまま地面に倒れ伏すロイに容赦なく赤い針が迫る。

大量の赤い針がロイに突き刺さる寸前で 白い閃光がロイの体を拾い上げる。

間一髪 シュバルツがロイの救出に成功したのだ。

しかし 銀狼のその巨躯には2本の赤い針が突き刺さっていた。

「逃がすかよ！」

ジダンが2人を追撃する。

『ガイア・ウォール』

カイラスが唱えた魔法は ジダンの前方の地面から巨大な岩の盾を出現させ 追撃を阻止する。

魔導教典は閉じられていることから見て これはカイラス自身の魔法である。

「助力ル…カイラス殿。」

シュバルツは口にくわえていたロイをゆっくり地面に下ろした。ロイとシュバルツの体からは赤い針が消えていた。あれはジダンの魔力により形成された物の為 効力が終わり 姿を消したのだ。しかし 生々しい傷からはおびただしい量の血が溢れ出していた。

「とりあえず止血じゃ。治癒魔法は得意ではないが多少は扱える。止血ぐらいなら可能な筈じゃ。」

カイラスはそう告げると 両手から眩い光が放たれ ロイとシュバルツの出血を止めた。

「くそ…体が動かねえ…」

ロイの体からは黒いオーラが消えていた。大量の出血により著しく体力を消耗した為だろう。

ドゴンッ！！

岩を碎く音が響き 3人は視線を移す。

「ううとうしい野郎だな。」

そこにはガラガラと音をたて 崩れ落ちる岩の壁の向こうに苛立ちを見せるジダンの姿があった。

「もう面倒臭え。さつさと死にやがれ。」

そう呟きながら掲げる手の先には 先程と同じぐらい大量の赤い針

が浮かんでいた。

全員に緊張が走る。

その時…

人影がジダンの後方から 真っ黒な大剣を振り下ろした。間一髪それをかわしたジダンの顔に更に苛立ちが見える。

「誰だテメエ！？」

その人影に口イ達は見覚えがあった。

漆黒の魔剣士 ジャガンだ。

「ジャガンさん！！」

「苦戦している様だな 口イ…
手を貸そい…」

ジャガンは大剣を上段に構え ジダンを睨みつける。

「誰だつて聞いてんだろうがつ！…！」

怒りの叫び声をあげながらジャガンへと突撃し 素早い上段蹴りを放つ。

ジャガンはそれを上体だけでかわすと 直ぐ様 横薙ぎの一撃を繰り出した。

しゃがみこみ 間一髪その一撃をかわすジダン。

しかし 大剣の勢いがピタリと途中で止まり 軌道を変えて再びジダンを襲う。

「くそったれ！…」

今度は上に飛び上がり 大剣をかわす。

「ほう…思つたより やるようだな…」

大剣をクルクル回してから肩に担ぎ ジャガーンは呟いた。
着地したジダンは悔しそうにジャガーンを睨みつける。

「ジャガーンさん！後ろ！…」

ロイが叫ぶ。

ジャガーンの後ろで 先程まで倒れていたベヒーモスがのっそり起き
上がつたのだ。

「ハハハハハ！これで終わつたな。」

ジダンは勝利を確信し 大声で笑い出す。

すると ジャガーンは後ろを振り向きもしないで 剣を持つ手とは逆
の手を 後方のベヒーモスに向ける。

「グルアアアア！…！」

ベヒーモスは雄叫びをあげながらジャガーンに襲いかかる。

『ヘル・フレイム』

地獄の業火がベヒーモスを焼き放つ。
圧倒的な火力により 森の中は明るく照らされた。
しばらくの間 燃え続けたベヒーモスは断末魔の叫びをあげ 黒焦げになつて大地へと転がつた。

「バカな…」

驚きを隠せないのはジダンだ。その身を怒りに震わせる。

「ちくしょうがああ…！」

両手を掲げ 上空を埋め尽くす程の赤い針を形成する。

『レッドクリフ』

赤い針が膨大な量から 最早壁となつて ジャガンに襲いかかる。
しかし ジャガンは動搖することなく 大剣を上空に掲げた。

「唸れ…魔剣 ダークエンペラー！」

漆黒の刀身から黒い炎が溢れ出す。
そのまま力いっぱい振り下ろすと 黒炎が横に広がり無数の赤い針
を一瞬で焼き払った。

「俺様の技を いつも簡単!」…」

ジダンは呆然と立ちぬく。

「終わりにしよう…」

ジヤガンは大剣の先をジダンへと向ける。

「ジヤガンとか言ったな。テメエの顔は覚えたぞ! いざれケリはつけさせてもらう!」

そう告げると ガルハイトの時と同じ様に 前方に黒いゲートの様な空間が現れ そこに姿を消していった。

「…………」

ジャガンは剣をしまい 口イ達の方へ歩み寄る。

「久シイナ ジャガン。」

「シュバルツ…大丈夫か？」

「問題ナイ。少シ休メバ 治ル。」

シュバルツの言葉に ジャガンの口元が緩んだ。
そして カイラスに視線を移す。

「カイラス殿ですね？先程の魔人は一体何の目的で襲つてきたのか
わかりますか？」

カイラスは魔導教典を前に掲げる。

「これじゃよ。」

「それは…？」

「魔導教典…これには世界を火の海に出来る程の魔法が書かれてい

る。

更には これを持つことで 所持者の魔力を底上げし 魔法の威力を上げることが出来る魔道具じゃ。」

「奴はそれを狙つてゐると?」

「奴は 魔人の一団 豪魔邪靈衆の一員。コイツを欲しがつてるのは そこの首領じゃろ?」

ジャガーンは腕を組み 何かを考え込む。

「…………つまり また奴らに狙われる」となると……

「だつたら俺達のギルドに来なよ 爺さん。」

体を動かせないロイは寝転びながら カイラスに声をかける。

「しかし……」

カイラスの表情は曇つていた。

だが ロイにとつてはそんなことお構い無しだつた。

「俺達なら大丈夫さ。それにバルボアのおっさんも同じ事言つと思
うぜ？爺さんを一人 ここに置いてはいけねえよ。」

ロイの提案にジャガンは静かに微笑む。

「俺も賛成だ…」

ジャガンとロイの真っ直ぐな視線がカイラスへと向けられる。

「… そうかい ありがとう。それじゃあ 御世話にならせてもらひ

ロイの優しさに触れ カイラスの表情から曇りが晴れる。

「シユバルツ！お前も一緒に来いよ。」

ロイの言葉に銀狼は驚きの表情を浮かべた。

「我モ 誘ツテクレルノカ…」

フツ…アリガトウヨ 小僧。シカシ 我ハ生マレ育ツタ コノ森ヲ
出ルツモリハナイ。」

長年この森で暮らし 森の主となつて生きてきたシユバルツにとつて この森は我が家であり 森の動物や植物は 家族であるのだ。それを捨てて 他で生きていく事など この誇り高き銀狼には出来るはずがないのである。

「…そつか わかつた。元氣でやれよ？」

「皆モナ…小僧 感謝スルゾ。我ノ力ガ必要ナ時ハ イツデモ呼べ。スグニ駆ケツケル。」

そう告げると 銀狼は森の奥へと 鳥爽と姿を消して行つた。

「あいつ…怪我大丈夫かな？」

「シユバルツは元々 生命力が高い…そして魔食者だ…あのぐらいの傷なら数日休めばすぐに回復するだろ？…」

ロイの心配をジャガンがすぐに打ち消す。
そして ロイはあることに気付いた。

「よかつた…」

……あれ！？ ジャガンさん魔食者のこと知りてんですか！？

「知らぬとは一言も言つてないが？」

ジャガンは意地の悪い笑みを浮かべる。

それを見たロイは すねた子供の様に顔を歪めたのだった。

ジャガンはフツと軽く鼻で笑うと 倒れていたロイを軽々と抱き上げた。

「帰るぞ……俺達のギルドへ……」

「お おうーー！」

3人は 幻想的な朝日が射し込む 神秘の森を歩き 我が家である白銀の翼へと戻つて行くのであった。

第6話 共同戦線

神秘の森から戻つて 数日の時が経つていた。

ロイの体力と体の傷は カイラスの回復魔法と種の者 特有の圧倒的な治癒能力の効果もあり 既に完治していた。

白銀の翼、ギルドマスターであるバルボアは ロイの言つた通り 快くカイラスを迎え入れ 彼は白銀の翼の新たなメンバーとなつていた。

「おつす レオ。」

ロイが眠たそうに瞼を擦りながら 広間へと顔を出す。

「おはよう。 休暇が続いてるからつて 少したるんでもるんじやないですか？」

レオは呆れた表情を見せる。

時刻は昼過ぎ。 神秘の森から戻つたロイは 每日こんな急けた生活をおくつている。

元々ぐうたらな性格のロイだが 休暇続きで完全に体が鈍つっていた。

「わりい わりい…

… オッサンと爺さんは… またか？」

ロイは頭を搔きながら 広間を見回した。

「ええ… 一日酔いです。」

レオは更に呆れ顔になる。

バルボアとカイラスは久し振りの再会を喜び 每晩飲み明かしていったのだ。

つまり 白銀の翼は今現在 かなり急げている状態という事だ。

「お～い… おはよう 諸君…」

広間に今にも嘔吐しそうな 苦しい表情のバルボアが姿を現す。そんな酔っ払いマスターに レオは軽蔑の眼差しを向けていた。

「マスター！ 飲み過ぎですよー！」

「おい… うふ… デカい声 出すんじゃねえよ…」

「アンタが言つのかよー？」

ロイのジッコミは的を得ていた。

「……まあいい… 実はかなりデカイ依頼が入った。」

そのキーワードにロイの瞳がキラリと光る。

「俺が行く！！！」

「うるせえよ……！」

ロイの叫びに バルボアが叫び返し 直ぐ様 吐き気をもよおし 口を抑える。

そんなアホな光景をレオは冷めた目で眺めていた。

「依頼の内容はなんですか？」

「うつぶ… ああ…

まず依頼主は政府直々だ。帝都のすぐ近くに 洞窟があるんだが どうやらそこは魔物の巣窟になつて いるらしい…

依頼は 帝都親衛騎士団と共に 洞窟の魔物を全滅させることだ… 内の他に2つのギルドの傭兵を雇つて いるようだ… かなり大規模な討伐作戦の様だな…」

帝都とは ガレン大陸の中心に位置する 最も栄えた巨大な大都市

のことだ。

帝都には このガレン公国の王 エドワルド3世が住まう ガレン王城が建てられている。

この帝都こそが政府そのものなのだ。

ここには多くの騎士団が存在し 帝都親衛騎士団はその中でも 最下位にあたる騎士団だ。最下位と言つても 帝都直属の騎士団であるため 実力 身分はそれなりの物を持っている。

「その話し 面白そうだな。」

何処からともなく 急にゼクスが現れ 話しに割つて入る。

「俺も暇してたんだよ。 その依頼 内からは何人送るんだ？」

「2人つてところだな…」

「じゃあ俺とロイで決定だな！レオもいーだろ？」

ゼクスはロイの肩に手を回し ニンマリ笑顔を見せた。

「私は構いませんよ。」

「…よし…じゃあ2人共…頑張れ！」

バルボアは そう告げるトすぐにトイレへと 駆け込んだのだった。

帝都 広場

広場には帝都親衛騎士団を始め 屈強な戦士達が集められていた。ロイとゼクスの2人も 帝都へ到着してすぐに門番の兵士に案内され この広場へと連れて来られていた。

「おおー 強そうな奴がウヨウヨいるなあ。」

ロイは目を輝かせながら 辺りをキヨロキヨロと見回していた。

「そりゃ そりゃ。 帝都親衛騎士団に加えて 同業者も何人かいるからな。

折角だから有名所を何人か教えてやるつか？」

「教えてくれ！」

ゼクスは周りをゆっくり見回す。

「まず あそこの白い服着た 派手な赤髪。アイツは傭兵ギルド『グリフィン』所属の魔剣士 キルバイン。

その隣のドレッド頭が 同じ『グリフィン』所属の フラッシュだ。奴は気性が荒い。近くにいる時は念のため注意しどけ。

…後は あの噴水の近くにいる 左目に傷があつて 黒の長髪を後ろで結つてる奴 アイツは傭兵ギルド『風神雷神』所属の パルシオン。背中に背負つてるクソ長い槍がアイツのエモノだ。

…知つた顔はそんなもんかな。」

白銀の翼以外の2つの傭兵ギルドは10人以上を帝都に送り込んではいた。

どの傭兵も屈強そうな雰囲気を出しているが ゼクスが言つた3人は 他のメンバーとは桁外れなオーラを放つてゐる。

「全員注目……！」

突然 広場に大きな声が響く。

声の主は帝都親衛騎士団 団長のレオナルド・バーモンド。

「これより 帝都近辺にある 魔物の巣窟となつてゐる洞窟の魔物討伐作戦を開始する！諸君の活躍に期待する！」

レオナルドの言葉に続き 戦士達の歓声が巻き起こる。
上にたつ者にとって必要なカリスマ性を持つていると言つていいだ
らいい。

帝都親衛騎士団と3ギルドのメンバーは洞窟へと到着すると 陣形
を組み始める。

先頭は帝都親衛騎士団30名。前衛に重装備の剣士部隊10名。中
衛に弓隊10名。後衛に槍を持つ突撃部隊10名。団長であるレオ
ナルドは突撃部隊の後ろについている。

その後ろに傭兵ギルド 風神雷神12名。
続いて傭兵ギルド グリフィン15名。

白銀の翼のロイとゼクスは最後尾を任せていた。

この陣形で洞窟を進み始める。

「一番後ろかよ……やつぱ2人だけじゃ あんま期待されてねえのか
な。」

ロイは不服そうに口を尖らせていた。
そんなロイをゼクスは横目で眺める。

「なんことねえよ。最後尾は重要な役割だ。前からの攻撃には臨機
応变に対応したり 最後の砦として。背後から奇襲を受けた場合は
俺達が主力として対応できる。

それに わざわざ依頼を出してきたんだ。実力は認められてるや。

「なるほど…そういうもんか。」

ロイにとって 軍規模の多人数の人海戦は初めての経験であった。傭兵とは元々こういった 軍に助力を求められ 軍に参加する仕事である。

「敵発見！下級ランクのゴブリン！数 およそ40！！」

突如 前衛の剣士部隊から報告が入り 全員に緊張が走った。

ゴブリンの大群は棍棒を振りかざし 侵入者を迎撃つ。

「弓隊！構え――――！」

レオナルドは冷静に指示を出す。

「放て――――！」

号令と共に 中衛の弓隊から一斉に矢が放たれる。

次々にゴブリン共は体を射ぬかれ 地に転がつた。

「盾を構えろ――――！」

剣士部隊の大きな盾が展開され ゴブリン共の前に盾の壁が現れる。攻撃を防ぐと同時に盾の間から剣で斬りつける。

「突撃――――――！」

剣士部隊が幅の広い洞窟の両端に分かれ 中央を開ける。そこを突撃部隊が颶爽と駆け抜け 怯んだゴブリンの大群を次々と貫いていくのだった。

あれだけの数のゴブリンを あつという間に倒して退けた実力はさすがは帝都親衛騎士団といったところだ。

「団長！ 前方に巨大な魔物です！」

大きな地響きと共に 前衛の騎士が叫ぶ。

一団の前方からは茶色い肌に赤い瞳。頭部には巨大な一本の巻き角と 背中には翼が生えた魔物がゆっくりと近づいて来ていた。

アークデーモン。驚異的な戦闘能力を誇る悪魔種で 上級ランクの魔物だ。

アークデーモンは前方から近づいていたが ゼクスの視線は 何故か後方に向けられていた。

その姿を不思議に眺めていたロイだが、突然そのロイも後方に視線を移し、大剣に手を伸ばす。

「団長さんー、背後から奇襲だー！」

ゼクスの叫びと共に、背後の岩の影から、ゴブリンの大群が飛び出す。

数は先程の倍ぐらいになる。

「ヒヤハーー！やつと暴れられるぜつーー！」

真っ先にゴブリンへと飛び込んだのは傭兵、ギルド、グリフィンのドレッド頭、フラッグだ。

彼は拳闘士。無手での戦いを得意とする。

ゴブリンの大群に真っ向から突入し、次々と殴り飛ばしていく。続いてロイが突撃し、踊るようにしてゴブリン共を叩き斬る。

その間、前線ではアークティーモンの猛攻により、騎士達は小枝のようにな次々と吹き飛ばされていた。

「弓隊放てーーー！」

レオナルドの号令の後、放たれる矢の雨。

大量に突き刺さる矢に、アークティーモンは苦痛の呻きを漏らす。

「グオオオオオオ！！！」

怒りの咆哮。

開かれた口からは 凶悪な魔力エネルギーが放たれる。

騎士達は一瞬にして半数が塵とかす。

そんな中 一人の男が飛び出し アークデーモンの額に長い槍を突き立てる。

傭兵ギルド 風神雷神のパルシオンだ。それに続き 風神雷神のメンバーがアークデーモンを取り囲む。

「やれやれ…前線は結構苦戦している様だな。こいつをさつさと終わらすか。」

そう呟きながらゼクスは腰の2丁の拳銃を引き抜く。

その刹那 目にも止まぬ速さで銃口が何度も火を吹いた。

その後 ゴブリン共がバタバタと倒れだす。

ゼクスが放つた銃弾は計12発。その全てがゴブリン共を捕らえたのだ。

そのあまりの早業に周りの人間は呆然とゼクスを眺めていた。

しかしゼクスはそんなことお構い無しに次々に引金を引いていく。

「あの野郎…俺の獲物を！」

フラッグは悔しそうにゼクスを睨み付けていた。

認めたくはないが 認めざるを得ない自分より遙かに高い ゼクスの実力。

自信過剰でプライドの高い彼にとっては 何とも言えない状況だ。

「それに アイツ…」

フラッグの視線が ゴブリンをバッサバサ斬り伏せるロイへと移る。

「なんて速さしてやがる…アイツ等が白銀の翼か…」

白銀の翼の2人はフラッグのライバル心に火をつけた。

殆ど発狂に近い雄叫びをあげ ゴブリン共の体を叩き伏せていく。

3人の活躍で ゴブリンの大群を あつという間に一掃したのであつた。

一方 前線ではアーケーモンとの死闘が繰り広げられていた。

帝都親衛騎士団の残りの数は剣士部隊3名。弓隊5名。突撃部隊4名と、かなりの数の騎士が倒されていた。

応戦する 傭兵ギルド 風神雷神の人数も残り6名と、半数がやられている。

そんな中、善戦するのが、槍使い、パルシオンだ。

アークデーモンの攻撃を華麗にかわしては、徐々にではあるが、自慢の長い槍でアークデーモンに傷を負わしていく。

その時、再びアークデーモンの口からエネルギー砲が放たれる。それをパルシオンは真上に高い跳躍でかわし、空中で一回転すると、アークデーモンの右目を槍で貫いた。

「ギヤオオオオ！」

アークデーモンは喚き、右目を抑える。

パルシオンは直ぐ様、槍を抜き放ち、アークデーモンの顔を蹴つて離脱する。

騎士達から、大きな歓声があがる。

しかしパルシオンはそれには応えず、槍を構えた。

アークデーモンの太い腕が振り上げられる。

それに直ぐ様、反応したパルシオンは後方に飛び退く。

ぐしゃり！ という鈍い音が洞窟内に響き渡る。

運悪く、近くにいた風神雷神のメンバーの1人が太い腕に叩き潰さ

れただ。

そんな光景を静かに見つめる男が一人。

傭兵ギルド グリフィンの魔剣士 キルバインだ。

他のギルドの面々が飛び出す中 彼だけは その場に佇んでいた。
そんな彼が初めて動く。

ゆっくりと腰に下げた 魔剣を抜き放つ。

「目覚めろ 幻魔剣 夢幻刀。」

魔剣から白い煙のような物が放たれる。
キルバインが抜いた剣は 剣というより刀に近い。形は日本刀その
ものだ。

魔剣から放たれる魔力にパルシオンが反応し 振り返る。

「なんだ… あれば?」

パルシオンの目に写った物は 10人の同じ男。

煙に包まれたキルバインの姿が10人に増えていたのだ。

そのままパルシオンの前を横切り ゆっくりアーケードモンへと歩
み寄る。

パルシオンは その不思議な光景を 目で追うことしか出来ないで

いた。

「**幻乱刃**」
[げんらんじん]

煙と共に 10人のキルバインがアークデーモンを囲み 斬撃が四方八方から繰り出される。

飛び散る 血飛沫。

アークデーモンの体の至る所が切り刻まれた。

「グオオオオオ！」

怒りの咆哮と共に 前方のキルバインに拳を落とす。
しかし キルバインの姿はコラコラと揺めいた後 煙となつて姿を消す。

「幻か…」

パルシオンが呟く。

夢幻刀の効力はその名の通り 幻。

先程の斬撃は9人のものは幻のものだが キルバイン自身の驚異的な身体能力による高速移動で 四方八方から繰り出す事により 全ての斬撃が本物だと錯覚させたのだ。

幻トリアルの融合。彼は夢幻刀の真の使い手と言つても過言ではない。

「へゝ　夢幻刀か…面白い物持つてんな。」

「魔剣かあ…」

「さすが　先輩だぜ。」

いつの間にか　ゼクス　ロイ　フラッグの3人は前線へ移動していった。

周りを囲む何人もの同じ顔に　アークデーモンは困惑し　キヨロキヨロ見回していた。

「終わりだ。」

9人のキルバインが夢幻刀を上へ掲げると　アークデーモンの背後に立つキルバイン以外は煙となる。

背後に立つキルバインが本体だったようだ。
煙全てが夢幻刀へと集まる。

全て集まり終えると同時に　キルバインは高く跳躍し　アークデーモンの首を　斬り落とした。

「強い……」

騎士達の歓喜の声が響く中 ロイは呆然と呟く。
今の自分とキルバインとの差は どれぐらいなのか。
自分は このメンバーの中で 一体どれぐらいのレベルなのか。
ロイの心に焦りが生まれていた。

「先へ進もう。」

キルバインはゆっくり夢幻刀を腰に納め 洞窟の奥を見つめる。

現在 帝都親衛騎士団 18名。傭兵ギルド 風神雷神 7名。
計 25名の死者が出ている。

「隊列を組み替える。」

レオナルドは多大な損害を考慮し 即座に対応する。

前衛にグリフィン。その後ろを帝都親衛騎士団。そして 風神雷神
白銀の翼と続く。

「これ以上の損害は 撤退の可能性も出てくる。心してかかってく
れ。進軍再開！！！」

「先輩よ…」この仕事が終わったら あの白銀の翼のビックリ決闘させてもうつてもいいかい？」

フラッグは 悪どい笑みを浮かべる。

「これが終われば貴様の好きにしる。だが任務に私情は挟むなよ？」

「わあつてるよ…さすが先輩だぜ。話が分かる。」

フラッグは拳を打ち付ける。既にヤル気満々といったところだ。彼の火が着いたライバル心は 消えることを知らず 更に燃え上がつていた。

「団長。先程から魔物の姿が見えなくなりましたね。あれで全滅させたんでしょうか？」

騎士の一人がレオナルドに声をかけた。

「その可能性もある。だが念のため 最深部まで行く。油断はするな。」

「はつ……」

レオナルドの言葉に 騎士は敬礼をした後 すぐに持ち場に戻つていいく。

「たしかに魔物の姿が無さすぎる… 本当に全滅させたのか?」

一人 疑問を呟くレオナルドに一人の男が近寄る。

「いや この奥から邪悪な魔力を感じる。小さな魔力が4つ 強大な魔力が1つだな…」

傭兵ギルド 風神雷神の槍使い パルシオンはレオナルドにそう告げて 歩きながら洞窟の奥に視線を向けている。

「風神雷神のパルシオンだつたか? 強大な魔力とはどれほどの物だ?
?上級ランクか?」

「上級ランクではあるが 先程のアーケーテーモンとは比べ物にならぬぐらいの魔力だ…」

パルシオンの表情が曇る。

強者であるはずのパルシオンの表情が一変したことにより レオナルドは危機感を覚えた。

アークデーモンによつて半数近くの死者を出したのにも関わらず更にそれ以上の強敵。レオナルドには勝利の瞬間を想像することは出来ないでいた。

「このまま戦闘に入つて 勝機はあるのか？君の意見を聞かせてくれ。」

レオナルドの問いかけに パルシオンは暫く黙り込む。

「…………可能性はゼロではない。
グリフィンのキルバイン。そして 白銀の翼のゼクス。キーマンとなるのは奴等だろう…
俺達は全力で この2人のサポートに回る。それが一番 勝利の可能性を上げる方法だ。」

「なるほど…了解した。我々は全力で彼等のサポートに回りつつ。」

一方 最後尾では…

「ロイ　」の先に　とんでもない奴がいるぞ。」

「ああ　さつきからかなりデカイ魔力をビリビリ感じじるよ。」

ゼクスとロイに緊張が走る。

そんな中　一行は　とうとう強大な魔力が潜む　最深部へと到着したのだつた。

第7話 死闘

洞窟最深部…

広い空間になつた場所に禍々しい魔力が満ち溢れていた。
手前にゴブリン4匹。

その奥に 強大な魔力の発信源。
大きさや姿は人間に近いが 顔の中心に大きな一つ目があるだけで
後は全身が真っ黒だ。

その異様な姿に全員が息を呑む。

「ナイトメアだ…」

ゼクスが呟くが 口元には聞き覚えがない名前であった。

「ナイトメア？」

「かなりの強さを持つ魔物だが 希少種で その姿は滅多に見るこ
とはできない魔物だ。まさか こんな所でお目にかかるとはな…」

ナイトメア。希少種で情報が少ないことから 戦闘方法等は不明で
ある。

「オラオラア！秒殺だ この野郎！－！」

勢いよく飛び出していくフラッグ。

4匹のゴブリンが同時に飛び掛かるが 呆氣なくフラッグによって呪き潰される。

「次はテメエだ！ 一つ田え－！」

フラッグがナイトメアに向かつた その時…
全員の目が見開かれた。

激しい衝撃音と共にフラッグが一団の最後尾より 遥か向こう側に吹き飛ばされたのだ。

「なんだ!? 何が起きた? ナイトメアは指一本 動かしてなかつたぞ！」

さすがのロイも この状況に動搖を隠せない。

「…恐らく衝撃波の類いだる。迂闊に近づくなよ?」

この状況でも ゼクスは冷静に状況判断していた。
ゆっくりと拳銃を引き抜き ナイトメアへと向ける。

そして 引金を引き 銃弾を4発放つ。

放たれた銃弾は真っ直ぐナイトメアへと向かつて飛ぶ。

しかし銃弾はナイトメアの手前3mぐらいの距離で見えない壁に弾かれた。

「やはりダメか…」

ゼクスは悔しそうに 眉根を寄せる。

その背後から 白いコートに身を包んだ 赤髪がゆっくつと前へ出る。

「どういってろ。」

キルバインは腰から夢幻刀を抜き放つと 直ぐ様 煙を発動させた。辺り一面に広がる 白い煙。再び現れる10人のキルバイン。

しかし ナイトメアは未だに動こうとはしない。
ずっと同じ場所から 戦士達を見つめるばかりだ。

キルバインは夢幻刀を構え 相手を誘つが それでもナイトメアは微動だにしなかった。

キルバインは痺れを切らし 5人ナイトメアへ向かわせる。

ボンッ！！

激しい音と共に 5人のキルバインは 見えない壁にぶつかり 煙と化す。

「おい！あの男が全員いないぞ！」

「見ろ！あの魔物の後ろだ！」

残り5人のキルバインは いつの間にか ナイトメアの背後へと回っていた。

ナイトメアは気づいていないのか 余裕を見せているのか 振り返らずに前方を見つめたままだ。

その隙をついて 4人のキルバインがナイトメアへと突撃する。

しかし 同じように 4人は見えない壁にぶつかり 煙と化してしまった。

「なるほど…

これは衝撃波ではない！半径3m程の 円形の結界だ！」

キルバインが叫ぶ。

読みは当たっていた。ナイトメアは自分の周囲に強力な結界を張つ

ていたのだ。

「結界か… この中に解除魔法を使える奴はいてないか！…？」

ゼクスは周りを見渡す。

しかし 誰も名乗り出る者はいなかつた。
結界を解くには解除魔法を使える者が必要なのだが この中には
人もいなかつたのである。

全員の表情が曇りだす。

「何か他に方法はないのか！？」

ロイの問いに ゼクスは表情を曇らせたまま答える。

「もう一つ方法はある…

それは 奴の結界の魔力を超える威力の攻撃を ぶつけるという方
法だ。

だが この中には それほど強力な攻撃を放てる奴はいないだろう。

「

ゼクスの言葉にロイは沈黙する。

しかし 突然ロイが何かを閃いたような表情になる。

それを見た ゼクスは不思議そうにロイを見つめた。

「俺がやる……」

ロイは一步前に進み 大剣を構える。

ロイが閃いたのは 黒いオーラによる 攻撃力底上げの一撃。
しかしロイはまだ黒いオーラを 使いこなせるとは言えない。一か
八かの賭けである。

ロイは目を閉じ 魔力を集中させる。

そして 目を開くと同時に 一気に魔力を解放させた。

「な なんだあれは……？」

「真っ黒なオーラ？」

ロイの体からは禍々しい黒いオーラが放たれていた。
それを見た 全員が驚愕し 呆然と眺めている。
しかし一番驚いているのはロイ自身だ。

初めて自分の意思で黒いオーラを放つことができたのだ。

よし…これを全て剣と腕に集中させるイメージ……

「出た……」

再び目を閉じ サラに魔力を集中させる。

すると 全身から放っていた黒いオーラは 徐々に腕の方へ集まり
大剣と腕だけが巨大な黒いオーラを放つて いる状態となつた。

「あれが レオの言つてた黒いオーラか…
なんて魔力だよ…」

ゼクスは黒いオーラを放つロイを見つめる。

「さあ！勝負だつ！！」

ロイは叫びながら 大剣を振り上げ 走り出した。

ナイトメアに近づくにつれ ロイの魔力が段々と上昇していく。
気付けば 大剣から放たれる黒いオーラは洞窟の高い天井にまで達
する程 大きくなつて いる。

ナイトメアの3m程手前 結界が張られていると思われる空間に
ロイは渾身の力で大剣を振り下ろした。

ズドオオオオオオオオ！！！

凄まじい轟音と共に眩い光が放たれる。

その光に全員の視界が一瞬奪われた。

パラパラと岩の崩れる音が響く中 瞼を開けると そこには目を疑う様な光景が広がっていた。

洞窟の奥の壁と天井が大きく斬り裂かれ 外の光が射し込んでいる。地面にも長い大きな地割れが続いていた。辺りは その破壊の衝撃から粉塵が立ち込め 視界の悪い世界が広がっている。

その中央に地面に半分以上 突き刺さった大剣を持つ 青年が一人。その奥に 左腕を切り落とされ 大量の黒い血が吹き出しているナイトメアがいた。

瞬間 全員から歓喜の声があがる。

「やつたぞ！ 結界を破った！」

「あの青年はたしか 白銀の翼の剣士だつたな。さすがだ！」

「あれで まだルーキーらしいぞ。幻のギルドと呼ばれる訳だ…」

ロイに注目が集まる。

この事がきっかけでロイの名は ガレン大陸中に広がることになる。

戦士達が浮かれている中 ロイ ゼクス キルバイン フラッグ
パルシオン レオナルドの6人は 硬い表情のまま同じ方向を 見
つめていた。

その状況に一人の騎士が気付く。

「おい 見ろ！不気味だ…」

視線の先には 左腕を失つて 大量の出血をしているにも関わらず
平然と立つ ナイトメアがいた。

ロイはすかさず 攻撃に移る。
黒いオーラは既に消えているが 憂まじいスピードでナイトメアへ
と迫る。

結界は完全に消失しているようだ。
あつという間に懷に入ったロイは 間髪入れずに ナイトメアの胴
体目掛けて 大剣を振り下ろす。

「なにっ！？」

振り下ろされた大剣は 何の手応えもないまま 地面を激しく打ち
付ける。

剣がナイトメアの体をすり抜けたのだ。

刹那 ナイトメアの瞳が光る。

「ぐわあつーーー！」

ナイトメアの目から放たれた光線が ロイの右肩を撃ち抜く。
光線の衝撃によって バランスを失ったロイはよろめき 地面に転がる。

「ロイーーー！」

ゼクスが叫ぶ。

ナイトメアの瞳が再び光り 無防備なロイに光線が放たれた。

「させんーーー！」

光線を大きな盾が遮る。

帝都親衛騎士団 団長 レオナルドがナイトメアとロイの間に 割つて入ったのだ。

光線が直撃した大きな盾は 粉々に碎かれる。

「急いで退避しろー！」

「お おーーサンキューーー！」

レオナルドとロイは素早く 後方へと下がる。

「ぜああああつーーー！」

それと同時に パルシオンが飛び出し ナイトメアに連續で突きを繰り出す。

しかし 先程と同じ様に 槍はナイトメアの体を全て すり抜けていく。

微動だにしないナイトメアの瞳が 先程とは異なる 赤い光りを放つ。

「…………」

突如 パルシオンの動きがピタリと止まった。

しばらく動かなかつたパルシオンが ゆっくりと 一団の方に振り返る。

「…………後ろにも 魔物がいたか。」

パルシオンの憎悪の籠つた視線は 明らかに一団に向けられている。そのままパルシオンは長い槍を 味方であるはずの一団へと構えた。

パルシオンの皿はじんよりと濁っている。

先程のナイトメアが放った赤い光りは 洗脳の効果があつたようだ。
今 パルシオンの目には仲間が魔物に見えているのだ。

「パルシオンさん デリしたんですね？」

残り4人の風神雷神のメンバーがパルシオンを心配し 近寄つてい
く。

「バカ！近づくんじゃねえつ！！」

ゼクスの叫びも虚しく パルシオンが槍を回転させながら振り回す
と 風神雷神の4人は 呆気なく バラバラの肉塊となり 地面に
散らばつた。

これにより パルシオンを残し 傭兵ギルド 風神雷神のメンバー
は全滅となつてしまつた。

洗脳されていいるとはいえ 奇しくも 風神雷神を全滅させたのは同
じ風神雷神のパルシオンとなつたのだ。

「何やつてんだよ おっさん！今アンタが殺したのは アンタの仲
間だぞ！！」

ロイは悔しそうに パルシオンに叫ぶ。
しかしパルシオンの表情が変わることはなかつた。

「…仲間？魔物を仲間にした覚えはない。」

「馬鹿野郎があ…！…！」

ロイの体から黒いオーラが勢いよく噴き出す。
パルシオンに向かい走り出そうとした その時 キルバインがロイ
を手で制す。

「その力は ナイトメアに使え。
フラッグ！！」

キルバインがそう叫ぶと 後方からフラッグが飛び出し パルシオ
ンに掴みかかる。

「了解だ 先輩！」ロイツは俺がやる…！」

そのままフラッグは洞窟の裂け目に パルシオンを投げ飛ばし 自
身も裂け目に飛び込み 外へと出していく。

「魔物め……なんの真似だ？この俺が成敗してくれるー！」

「ああ？ 訳わからんねえ事言つてんじゃねえぞー！ その前に、俺がお前をブチ殺すー！」

パルシオンとフラッグは構え、激しく睨み合つ。

先に動いたのはフラッグ。

大地を強く蹴り、ワンステップでパルシオンの懷へと入り込む。パルシオンは素早く一步下がると、槍の柄の部分を振り上げる。それを左にかわし、フラッグは強烈な左フックをパルシオンのテンプル目掛け、放つ。

しかし、体を捻つて上手くかわされ、フラッグの拳は空を切つた。

「ちいっーー！」

フラッグは舌打ちし、飛び退くが、パルシオンの長い槍の射程範囲は恐ろしく広い。

体を捻つた反動を利用して、そのまま柄の部分で、フラッグを殴り飛ばす。

勢いよく、飛ばされたフラッグは、なんとか受け身を取り、態勢を整える。

「結構やるじやねえか。」

フラッグは「ヤリと笑いながら 足を少し屈め 低い姿勢をとる。そのまま拳を振り上げると 激しく地面へと叩きつけた。

「オラアツー！」

拳を打ちつけた地面から 地割れが起こり 激しいスピードで
パルシオンへと伸びる。
それをパルシオンは冷静に 高く跳躍して避ける。

しかし 地割れに意識を集中させていた パルシオンのすぐ目の前
に フラッグの姿があった。

「隙だらけだよつー！」

鈍い音が響く。

腹部を殴られたパルシオンは 激しく地面へと打ち付けられる。

そして すぐに急降下してきたフラッグの追い討ちを まともに食
らった。

上空から 全体重を乗せたストンピング。それをまともに食いついた
パルシオンは 内蔵をやられたのか 吐血する。

「ゲホッ！」

お 僕は一体…」

「なんだ？元に戻ったのかよ？つまんねえな。」

攻撃の衝撃で 我に返ったパルシオンを見て フラッグは不服そうに パルシオンから離れていった。

一方 洞窟内ではロイとナイトメアの睨み合いが 続いていた。

結界 攻撃のすり抜け 光線 洗脳。厄介な戦闘スタイルに迂闊に手を出すことが出来ないでいたのだ。

ロイが躊躇していた その時…

ナイトメアが初めて自ら動き出す。

ゆっくりと一步ずつ ロイへと向かう。

「くそったれ…！」

段々と距離を縮められ たまらずロイが飛び出す。

右肩の傷は重傷で 利き腕である右腕をダラリと下げ 左腕一本で大剣を構え 走り出した。

ナイトメアを射程に捕らえると ロイは渾身の力で 横薙ぎの一閃を繰り出す。

しかし やはり大剣は虚しく ナイトメアの胴体をすり抜けていく。

「くそつー！」

焦るロイに向け ナイトメアの瞳が激しく光る。
攻撃後の大きな隙に 至近距離からの光線攻撃。
ロイには回避の仕様がない。

しかし 光線が放たれるより前に 銃声が3回 鳴り響く。
ゼクスの拳銃から放たれた弾丸は真っ直ぐナイトメアの頭部へと向かう。

ナイトメアは寸前の所で上体を反らし それを回避した。

「……？」

今まで攻撃に対しても 微動だにしなかったナイトメアの初めての回避行動に ゼクスは眉根を寄せた。

「田だ！奴の弱点は恐らくその田だーー！」

ゼクスの言葉の後 帝都親衛騎士団の「部隊が一斉に ナイトメアの瞳目掛けて矢を射つた。

ナイトメアはそれを 全てかわす。

やはり ナイトメアは瞳に向けられた攻撃に対しても 回避行動をとるようだ。

「おい 小僧。あの黒いオーラの一撃は まだ放てるか？」

全員がナイトメアの皿を狙って 攻撃を続ける中 キルバインがロイに近づく。

「デカイのを後 一撃は出せると恩つかせ。」

「よし。じゃあ貴様は それで奴の胴体を狙え。」

キルバインの言葉に ロイは怪訝な表情をする。

「なんで胴体なんだよ? アイツの弱点は皿だろ?」

「いいから やれ!」

キルバインの気迫に圧され ロイは渋々 了承する。

「いいか? 貴様は剣を振り始めたら 何があつても そのまま振り

抜け。」

キルバインの言葉に頷き、直ぐ様ナイトメアへ疾走する。黒いオーラを放出させ、先程の様に剣と腕にオーラを集中させる。圧倒的なまでのスピード。ロイは黒い閃光となつて瞬き一つの間にナイトメアの懐へと入つた。

そのまま、ナイトメアの胴体目掛けて大剣を振るうと同時に、背後から白い煙が舞い込み、ロイとナイトメアの間に対流する。キルバインが夢幻刀を発動させていたのだ。

ナイトメアの視界には夢幻刀の幻覚効果により、ロイが頭部目掛けて剣を振るつてくる光景が見えていた。

その幻覚に惑わされ、ナイトメアは身を屈めて、幻の攻撃を避ける。しかし、屈んだ先には本物のロイが煙から飛び出してきていた。

「もうつたあ――――！」

黒いオーラが爆発的に放出され、白い煙は一瞬で搔き消されていく。ロイの放つた渾身の一撃は見事にナイトメアの目を、真つ二つにした。

「キヒヒヒ――！」

断末魔の叫びと共に ナイトメアの体は 空間に溶け込む様に消えていく。

「勝った…勝ったぞ～！！

ロイは歓喜の雄叫びをあげながら 後ろへ豪快に倒れこんだ。
黒いオーラによる 疲労のためである。

なんにせよ 戦士達は この戦いに勝利したのだ。
歓喜の声は いつまでも鳴り止むことはなかった。

第8話 アルベルト家

洞窟の魔物討伐作戦を完了した一行は、帝都へと戻つて来ていた。パルシオンは肋骨骨折に内臓破裂の重傷の為、病院へと搬送されていた。

ロイも右肩の傷の治療の為に、病院へと来ている。ゼクスもそれに同行していた。

「ああ～、せつかく神秘の森での怪我が治つたのに、また怪我かよ。」

…

治療を終えたロイは、不機嫌そうに傷口を眺めている。

「まあ、命があつただけでも、儲けものだと思え。」

ゼクスはそんなロイを宥めていた。

病院から出ると、2人の男がロイとゼクスを待ち構えている。

「よつ！ 探したぜ。」

傭兵、ギルド、グリフィンのフラッグとキルバインだ。

「なんだ？なんか用か？」

「お前らのどつちか 僕と決闘しろ。」

フラッグは闘争本能剥き出しで ロイとゼクスを睨み付ける。それを聞いたロイの闘争本能にも火がついた。

「いいぜ。俺が相手してやるよ…… イテツ！」

前に出るロイの頭を ゼクスが小突く。

「お前は怪我人だろ。下がつてろ。俺が相手してやるよ。」

その言葉を聞いたフラッグは 待ちきれないとばかりに ゼクスに飛び掛かる。

フラッグから繰り出される 打撃の嵐をゼクスは余裕でかわしていく。

止まることのない連續攻撃に フラッグのスタミナは徐々に下がり動きのキレが無くなってきていた。

「まるで犬だな…」

動きが鈍る その瞬間をゼクスは見逃さなかった。

強烈な膝蹴りをフラッグの腹に叩き込む。
フラッグは悶絶し その場に膝をついた。

「終わりだな。」

ゼクスはフラッグの頭に銃を突き付ける。

「終わり？…勝手に終わらせてんじゃねえよ…！」

フラッグは怒りの叫びをあげながら 突き付けられた拳銃を左手で
素早く掴み ゼクスの側頭部に強烈な右フックを叩き込んだ。

「……油断したな。」

後方で決闘を眺めていたキルバインが呟く。
その横ではロイが驚きの表情を浮かべていた。

「ゼクス！何やつてんだよ！…？」

「フラッグは諦めるということを知らない。あの男はフラッグを甘く見ていたようだな。」

そんな口イを横田にキルバインが呟く。

殴られたゼクスは地面へと転がった。

しかし フラッグは倒れることも許さない。
地面を転がるゼクスを追い 跳りを放つ。

しかし セクスは蹴りがヒットする瞬間を狙い フラッシュの足をガツチリとキャッチした。

「なつ！？」の野郎！離しやがれ！――」

フラッグがゼクスを振り払おうとした瞬間のことだった。

何故か地面に転がったのはノックた

「……なんだ？」

「合氣道って知ってるか？相手の攻撃を利用して攻撃する格闘技さ。武器が拳銃だけじゃ近接戦は不便でな。こういう小細工も持つてんだよ。」

呆気に取られるフラッグにゼクスが告げる。

「ブッ殺す！！」

フラッグが飛び掛かるとした刹那 銃声が鳴り響く。

「ぐつ……！」

ゼクスが放った弾丸は フラッグの右脇腹を撃ち抜いていた。
フラッグはゼクスを睨み付けながら ゆっくりと地面へ倒れ込む。

「くそがつ！」

「ま まだだ！殴り殺してや……る……！」

「やめろ。」

再び立ち上がるとするフラッグを キルバインが手で制す。

「貴様の負けだ。」

キルバインの言葉に フラッグは顔を俯かせる。

「… それじゃあ 僕達は行くぜ。縁があつたら また会おう。」

二人にそう告げて ゼクスとロイは帝都を後にした。

とある廃墟と化した街で 逆立つた金髪に 赤い刺々しい鎧を身に付けた 一人の魔人が苛立ちを見せていた。

彼は神秘の森で 魔導教典を狙つてきた豪魔邪靈衆の一員 ジダン。

ここは豪魔邪靈衆が襲撃し 壊滅させた街だ。
今は豪魔邪靈衆が根城としている場所である。

「ちくしょう！あのジジイビニへ行きやがったんだ！」

「落ち着けジダン。今 魔物達に搜索させていい。
見つかるのは時間の問題だろつ。」

苛立つジダンに話しがけたのは 青い長髪の端正な顔立ちをした魔人だ。

「エリックー俺様は待つことが嫌いなのは知つてんだろ！」

ジダンの苛立ちは収まることを知らず 更に熱くなつてきていた。
そんなジダンの背後から首元に黒い大きな鎌の切つ先が 当てられる。

「…………つ……」

「五月蠅いよ……ジダン。
僕がこの首を落としてもいいんだよ？」

「ミカエル……てめえ……」

ジダンの瞳には怒りの炎が燃え上がつてている。
大鎌の持ち主は 明るい金髪に 頭までフードを被つた黒いパーカーの様な物を着て いる魔人 ミカエルだ。

ミカエルはまだ子供であり 身長はジダンやエリックの半分程しかない。しかし その戦闘力は この状況を見れば 一目瞭然だ。

「やめろー!!カエル！」

「ボスのいない間に問題を起こすな。」

エリックがミカエルを制す。

「ちえつ…

ボスには叱られたくないからね。」

ミカエルは渋々ゆづくりとジダンの首から鎌を離す。そして ジダンの前へ移動して口を開いた。

「たしか黒い魔剣士に邪魔されたんだよね？ そいつ 僕が殺つてもいい？」

「なんだと？ アイツは俺様の獲物だ！ 横取りすんじゃねえよーー！」

ジダンは怒りを露に ミカエルの襟首を掴む。そんなジダンを馬鹿にするかのようにミカエルは 不敵に笑みを浮かべた。

「君が？ ハハッ 手も足も出なかつたくせに どうやって相手するのさ？」

「テメエ！ 殺されてえのかつーーー？」

「やめると書いているだろ！」

「そいつはジダンの問題だ。奴にケツを拭かせてやれ ミカエル。」

エリックは冷静にその場を収める。

その言葉にジダンは掴んでいた手を離した。

ミカエルも不服そうではあるが 納得して その場を後にする。

「エリック 話が分かるじゃねえか。」

「勘違いするな。お前は一度失敗しているんだ。一度はないと？」

エリックの言葉にジダンの顔色が変わる。

「分かってるよ…

魔導教典か黒い魔剣士を発見したら教えてくれ。」

そう言い残し ジダンはその場を後にした。

白銀の翼アジトへ戻ったロイドゼクスは バルボアに報告を済ませ
休息へと入っていた。

「ロイ また力を使つたそうですね？」

広間の椅子に腰掛けっていたロイに 真剣な顔つきでレオが話しかける。

ロイは一瞬 しまつた！ というような表情になり 口を開く。

「ああ……でもちゃんとコントロールできたんだ。これなら使つても平氣だらっ？」

「なにをバカな！ 危険です！ 得体の知れない力なんですよー…？ あまり使わないよつて言つたはずです！」

ロイの軽い言葉に レオは珍しく声を荒げて叫ぶ。
ロイは観念したのか 顔を俯かせ 黙り込んだ。

「力の多用は控えてください。体に異変が起つてからでは遅いんですよ？」

塞ぎ込むロイに レオは優しく声をかける。

仲間思いの 優しいレオは 心の底からロイを心配しているのだ。
そんな思いを 無下にするロイではない。

「…わかつたよ。ありがとう。」

謝るロイを見て レオは優しく微笑み 頷いた。

その時 突然一本の電話が鳴り響く。

「はい。白銀の翼です。

え！？」

……………わかりました。すぐ戻ります……」

急に顔色の変わったレオを 不信に思い ロイが声をかける。

「どうした？誰からだ？」

「私の実家からです。父が病で倒れたそつなんで 至急 戻つて来
いと…」

レオの表情が曇る。

レオは魔導師の名門一族 アルベルト家の長男。

彼の父親は セルゲイ・アルベルト。大魔導師と呼ばれる 激腕の
魔導師であった。

「本当か！？大丈夫なのかよ！？」

ロイは驚き 声をかけるが レオの表情は更に曇る。

「いえ そう長くは持ちそうにならうです。次期当主を決める為に戻つて来いと…

…ロイ 一緒に来てくれませんか？」

「え…？ いいけど… なんでだ？？」

レオの突然の要求に ロイは驚きを見せた。
何故かレオは照れくさそうに口を開いた。

「白銀の翼に入る為に 家を飛び出した手前 一人では どうも帰りにくいくらいですよ…」

レオの意外な一面に ロイは少し微笑む。

「よし…じゃあ早速準備しようつー親父さん待ってるやー！」

「ありがとうございます。マスターに報告しておきますから 先に

準備を始めておいてください。」

ロイとレオの二人はスーツに身を包み アルベルト家の屋敷へと出発を始めていた。

ロイはレオと違い 慣れないスーツに落ち着かない様子だ。

「なあ レオはアルベルト家の長男なんだろ?
…じゃあ次期当主になっちゃうのか?」

ロイはレオが白銀の翼を抜けてしまつのではないかと 不安が過つていた。

「…いえ。私は当主になるつもりはありません。
第一 家を飛び出していた私に そんな権利があるとも思えません
し 私は白銀の翼でずっと働くつもりですよ。」

レオの言葉に内心ホッとしたロイだが 心配もあった。

「でも大丈夫なのか?レオが跡を継がないと アルベルト家はどうなっちゃうんだよ?」

ロイの心配をよそに レオは眼鏡を上げながら微笑みを見せた。

「心配いりませんよ。内は3兄弟でね。

弟達のどちらかに跡を継いでもらいますよ。」

そんな話をしながら 途中バスや列車に乗り 移動すること5時間。

辺りは日が沈み 真っ暗となつた頃 一人はアルベルト家の屋敷へと到着したのだった。

「レオ様！ そろそろ到着なさる頃かと思つていました。
お久しう「ひ」ぞこます。」

屋敷の大きな門の前には 一人のスーツを着た 白髪で白鬚を生やしたダンディな老人が待つっていた。

「サムソンー久し振りです。変わらないですね。」

深々と頭を下げるのは この屋敷の執事 サムソンだった。電話をしてきたのも このサムソンだ。

「レオ様も お変わりないようで よかつたです。
……そちらの方は？」

サムソンの視線がロイへと向けられる。

「彼はロイです。同じ白銀の翼のメンバーで 私の要望で同行して
もらいました。」

レオに紹介されて ロイはペコリと頭を下げる。

「そうでしたか。遠い所をわざわざ有難うござります。さあ 二人
共どうぞ中にお入り下さい。」

サムソンに案内され 二人は屋敷の中へと入っていく。
門を抜けると広い中庭が広がり その奥に巨大で上品な屋敷が構え
ている。

「クソ冗貴ーどの面下げて帰つてきやがつたんだ！」

「キラ…」

玄関に入るなり 怒鳴り散らしてきたのは 金髪の短髪で 上品な
屋敷には似つかわしくない厳つめの顔立ちの男だ。
彼はアルベルト家の三男。キラ・アルベルトだ。

「俺は お前を許さない…」

キラは魔力を集中させる。

「お止めください…キラ様！」

サムソンの制止も虚しく キラは更に魔力を集中させ レオに向かって魔法を発動させようとしていた。

「止める…キラ…」

突然 キラの前に 金髪のロングヘアの男が立ち塞がつた。

「ライル兄い！邪魔しないでくれ！」

彼は アルベルト家の次男 ライル・アルベルト。

「黙れ！部屋に戻つてなさい。」

ライルに叱られたキラは 子供の様に塞ぎ込み 自室へと戻つて行

つた。

その姿を見届け ライルはレオの方へ振り返る。

「お帰りなさい 兄さん。」

「ただいま。」

微笑むライルに レオも微笑み返す。

「父さんと会つておたらどうだい?」

「そうですね…

会いに行きましょう。ロイは少し待つていても構えますか?」

「ああ わかった。」

レオとライルは屋敷の奥へと進んで行く。

「それではロイ様は 広間の方で お待ち頂けますか?」案内します。」

「おう！頼む。」

「父さん 兄さんが来ててくれたよ。」

豪華な部屋の扉をノックする ライル。

「入りなさい。」

中からは弱々しくも 威厳のある声が響いた。
レオとライルは扉を開け 中へと入っていく。

部屋の中の大きなベッドには 鼻の下に立派な髭を生やした壮年の
男が 横になっていた。

彼がアルベルト家の現当主 セルゲイ・アルベルトである。

「父上…

ただいま戻りました。」

レオはセルゲイの横に立つと 申し訳なさそうに口を開いた。

「レオか…久し振りだな。元気にしていたか？」

「はい……白銀の翼でも上手くやつていけてますよ。」

レオの言葉に セルゲイは嬉しそうに優しく微笑む。
しかし ロイの表情は暗かつた。

「わづか…それはよかつた。」

「なぜですか？私は勝手に家を飛び出で 今更戻ってきたのに なぜ怒らないのですか？」

レオはたまらず セルゲイに疑問をぶつける。
セルゲイは一瞬驚いた表情を見せたが すぐに優しく微笑む。
そして ゆっくりと語り出した。

「私は お前を次期当主として きつく育ててきた…
だが お前が家を出て行つた時に気付かされたよ。
私の勝手な思いに お前を巻き込んで お前の夢もやりたい事も
無視して強制していたことにな…」

「父上…」

「私も若い頃 父親に強制的に次期当主として育てられてきた。
私は一人っ子だったから仕方がないことだったのかもしれないが
私にも他にやりたい事はあったのだ。」

旅をして もつと世界を見て回りたかったし いろんな仕事もしてみたかった…

それと同じ思いを お前にさせていたと思うと 私は自分に腹が立つてな…

それにライルとキラの二人は 自ら次期当主になりたいと ずっと思っていたらしい…

それなのに私は お前を次期当主にする」としか考えていなかつた。とんだ馬鹿親父だったよ。」

セルゲイの話をレオとライルの二人は 暗い表情で聞いていた。

「ライル。次期当主はお前に頼もうと思つていて。お前ならシッカリしているし 上手くやっていけるだろう。キラと共に 頑張つてくれ。」

「わかりました。」

ライルはセルゲイの目を真っ直ぐに見つめ 力強く返事を返した。

「レオ…お前はお前の好きなように白銀の翼でしつかり働け。そして最高の魔導師となれ。

だがもしアルベルト家に何かあれば 力を貸してやってほしい。」

「父上…わかりました。有難うござります。本当に…有難うござい

ます。」

レオは大粒の涙を流しながら何度も感謝の言葉を口にした。

ここまで育ててくれたことには心から感謝している。

ただ強制的に次期当主として育てられていることが嫌だった。

父親が嫌いな訳ではない。ただ 分かつて欲しかった。自分にもりたい事がある事を。

そんな思いで家を飛び出し 父親を傷つけてしまった事を後悔していた。

もつと話し合えば分かり合えたのではないか?父親に悲しい思いをさせずに済んだのではないか?

レオは涙を流し続けた。

後悔しても後の祭り。人生とは無情である。

アルベルト家の夜は静かにふけていったのであつた。

第9話 家族の絆

「おはよっ ロイ。もう朝ですよ。」

「ん？ おう…」

レオの自室を使って一晩アルベルト家に泊まつた二人は朝を迎えた。

ロイが目覚めてすぐ 部屋の扉をノックする音が響く。

「レオ様 ロイ様 お食事の準備が出来ております。」

執事のサムソンが部屋の外から声をかける。

二人は返事を返すと すぐに食事部屋へと向かつた。

「おおー！ すげえ！ これが朝飯かよー？」

大きなテーブルの上には 豪華な器が並べられ 彩り鮮やかな 高

級料理が盛り付けられていた。

庶民的料理や狩りの獲物しか口にしたことがないロイにとってはまるで違う世界が広がっているように感じられた。

「お気に頂けたようで よかつたです。わあわあ 冷めないひひこ
お召し上がりください。」

ロイの歓喜の表情に サムソンは満足気な様子だ。

食事が始まると レオは さすがの育ちの良さから 上品に料理を
口に運んでいく。

一方のロイは まるで好きなお菓子に食いつく子供のようこ 豪快
に 次々とたいらげていた。

流石に その下品極まりないロイの食事に サムソンは苦笑いを浮
かべていたのであった。

食事が終わり 部屋を出ようとした一人に 後ろから声がかかる。

「おい！クソ兄貴！また家を出て行く気かよー？」

アルベルト家 三男のキラだ。

その表情には怒りの色が見える。

「すみません。私はもう白銀の翼の一員。戻らなければいけません。

」

「随分勝手な話しだな！白銀の翼だかなんだか知らねえが その前
に お前はこのアルベルト家の長男だろうがー！」

それでも出て行くつって言つなら俺を倒してから出でつけ！

キラの表情は真剣であった。

キラにとつては レオが父親を見捨てて行くように感じていたのだ。

その怒鳴り声を聞きつけ ライルが慌てて部屋の中に飛び込んで来る。

「またか キラ！ いい加減にしろ！ 兄さんは この家を見捨てて行く訳ではない！ 兄さんには兄さんの生き方があるんだ！」

「… んなこと知らねえよ！ … こいつだけは許さねえ！」

ライルの言葉にも聞く耳持たず キラはレオを睨み付ける。その光景を見ていたロイは我慢出来ずに口を開いた。

「なんだよ お前？ レオが この家を見捨ててるつて言つなら わざわざ戻つて来ないだろ！ レオは親父さんが病氣だつて聞いた時 すげえ悲しそうな顔してたんだぞ！ きっと家を出たことを後悔してるはずだ！」

一瞬ロイの剣幕に圧され キラは言葉に詰まる。

その時 レオがロイの肩に手を置いた。

「ありがとうございます ロイ。でもこれは 内の問題です。
キラー それほど言つのなら相手になりましょ！」

「兄さん…！」

レオの意外な言葉に ライル ロイ サムソンは驚きの表情を浮かべる。

当のキラさえ 驚きを隠せないでいた。

「どうしたんです？ やらないんですか？」

「 やるよ… いい度胸じゃ ねえか！…」

キラは威勢よく叫ぶと ズカズカと外へと向かっていった。

その後をレオは颯爽と追つていく。

残る三人も戸惑いながら 一人の後を追つた。

アルベルト家の屋敷の裏には 家2 3軒分はあるつかといつ 広い魔法練習場が広がっていた。

ここでレオとキラの兄弟が対峙する。

「先に言つておきますが 決闘となると いくら家族といえど 手加減はしませんからね。」

レオの目 表情から今の言葉は本気だとこいつがわかる。

「ハッ！そりゃこいつちだつてやつだ。手加減する気なんて これつぱつともないぜ！」

キラはやつ言い放ちながら両手を体の前に動かし 魔力を溜め始める。

既に戦闘態勢万全と言つたところだ。

一方のレオは 動じつとはせず 仁王立ちのままであつた。

「ライル。開始の合図を。」

レオはキラを真つ直ぐ見据えたまま ライルに指示を出す。あまり納得のいっていないライルは 一瞬躊躇つが 諦めたかのようすに右手を高々と上げる。

「…………始め！！！」

開始の合図と共に 勢いよく走り出したのはキラ。キラの両手の間にには赤い光りが輝いている。

『ファイヤーボール』

キラが両手をレオに向けると そこから燃え盛る火球が放たれた。

魔導師にはそれぞれ適性属性という物が存在する。基本は その適性属性の魔法しか使えないことになるのだ。

しかし 中にはいくつもの適性属性を持つ魔導師もいる。

このことからレオは雷の魔導師だが 弟のキラは炎の魔導師のようだ。

放たれた火球は勢いよくレオに迫る。

火球が寸前まで迫った時 初めてレオが動いた。

『スパーク』

レオは自分の体だけを避け 周りに雷撃を対流させる。すると 雷にぶつかった火球は跡形も無く消え去った。

「速い……」

二人の決闘を眺めていたライルは 驚嘆の声を漏らす。

本来魔法の発動は魔力を溜めて 魔法の形 威力 効果を形成してから 放出するものなのだ。

しかし今のレオの魔法は その形成部分があまりにも速かつたのである。

「止めなくていいのか？」

ライルを横目にロイが口を開いた。

「ううと決めた兄さんは 何を言つても無駄や。」

ライルは諦めたように そう呟く。

ロイにも身に覚えがあることなので納得したように頷いたのだった。

「 もう終わりですか？」

魔法を呆氣なく防がれ 呆然とするキラに レオが声をかける。

「 そんくらいで調子に乗つてんじゃねえよ。」

キラは再び魔力を溜め始める。

それに反応し 今度はレオも魔力を溜める。

『フレイム・バレット』

『ライトニング・スター』

二人の魔法がぶつかる。

キラの魔法は 激しい炎の弾丸が散弾の如く飛び交う。

一方のレオの魔法は 大きな星形の雷が飛ぶ。

激しくぶつかった両者の魔法は相殺し 辺りに強い衝撃波と爆煙が広がった。

強い魔力の衝突により 発生した衝撃波で サムソンは地面へと転がる。

しかし ロイとライルは微動だにすることなく 戦況を見守つていた。

「俺の魔法と相殺するとは 中々やるじやねえか クソ兄貴。だが
まだまだ勝負はこれから……！」

広がる爆煙の中 キラの視界に突然レオが飛び込む。

「いいえ 終わりです。」

レオの手には既に強大な魔力が込められていた。

『ライトニング・ブلاスト』

レオの手からは強大な 太い光線状の雷撃が放たれる。
視界の悪い状態で 至近距離から放たれた為 キラには防ぐ術がない。

見事に直撃され キラの体は枯木の様に宙を舞う。

キラは既に意識が無く そのまま地面へと落ちていったのだった。

キラが目を覚ますと そこは自室のベッドだった。

「キラ 大丈夫ですか？」

声のする方へ視線を移すと そこには椅子に腰掛けたレオの姿があった。

「兄貴…」

キラの意識が戻つたことを確認すると レオは一ヶコリ微笑む。
しかし キラは複雑な表情を浮かべていた。

「なんだよ？勝つたんだから セツセツ出て行けばいいだろ。」

キラは不機嫌そうにそっぽを向く。

そんな姿を見て レオは少し困った顔をしながら口を開いた。

「少し話したいと思いましてね。」

「…………」

「……たしかに私はまた この家を出て行きます。
だけどそれは アルベルト家を見捨てて行く訳ではありません。
私は この家も父上もライルもキラもサムソンも みんなを愛しています。」

沈黙するキラを他所に レオはゆっくりと 語り出す。

「ロイの言った通り 正直 あの時勝手に家を飛び出したことは後悔しています。
もつとみんなと話し合ひべきだった…
そのことは謝ります。すみません。
だけど 白銀の翼に入つたことは後悔していません。むしろ入つて良かつたと思いますよ。
メンバーみんなの温かさや 人々の役に立てている事は本当に嬉しいことです。」

けど私は アルベルト家のみんなのことを忘れた日なんて一度もありませんよ。

また家を出て行くことを父上とライルとサムソンは許してくれました。あなたは どう思っていますか？キラ。」

レオの問いに キラは複雑な表情を浮かべながら レオの方へ振り向く。

「俺は……俺だってわかつてたんだ。兄貴が強制的に次期当主として育てられてきたことを…
兄貴はそれが嫌だったことも…
だけど…だけど俺はそれがわからなかつた！俺は次期当主として期待されている兄貴が羨ましかつたんだよ！だから家から逃げ出した兄貴を許せなかつた！」

キラは瞳に涙を溜めながら 悔しそうに布団のシーツを強く握り締めた。

「すみません…」

今のレオには ただ謝る」としか出来ないでいた。
キラは涙を拭いながら そんなレオに笑顔を向ける。

「もういいよ。俺も親父と一緒に 兄貴の気持ちを考えてなかつた

…「ごめん…

なんかスッキリしたよ。ありがとう。」

「それはよかつたです。もし このアルベルト家に何かあれば私は
いつでも力になりますから いつでも呼んで下さい。」

キラの笑顔に レオも笑顔で答える。

これでアルベルト家は全員が和解し 強い絆で結ばれたのだった。

ロイとレオがアルベルト家の屋敷を後にし 白銀の翼のアジトへ戻
った数日後：

アルベルト家当主 セルゲイ・アルベルトは静かに息を引き取った。
その死に顔は なんの未練も感じない安らかな表情をしていたとい
う。

葬儀には各国の著名人 そして白銀の翼のメンバー全員が参列して
いた。

終始 レオの瞳から涙が無くなることはなかった。

アルベルト家の新当主にはセルゲイの遺言通り アルベルト家次男
のライル・アルベルトが就き 優秀な補佐役として 三男のキラ・
アルベルトが就いたのだった。

大魔導師セルゲイ・アルベルト ここに眠る。

第10話 襲撃

白銀の翼のアジトでは、いつもと変わらぬ日常が続いていた。

「おっす 口イ。相變わらはずの 寝坊助だな。」

広間の椅子に寝惚け眼で腰掛ける口イに、ゼクスが声をかける。

「うへす。だつてよお また暫く依頼がないから 遅屈でしじうが
ねえんだよ…」

口イは前の机に うなだれながら答える。

「トレーニングでもしてろよ。俺は今から散歩でも行つて来るわ。」

ゼクスは そう告げて外へと出て行く。
すると 暫くして…

「おー！ 来てくれー！ 白い狼が血だらけで倒れてるぞーー！」

突然 外からゼクスが叫んだ。

白い狼..

ロイには心当たりがあつた。

「まさか！？」

勢いよく立ち上がり 椅子を倒しながら ロイは外へと駆け出す。すると ロイの目に驚きの光景が飛び込んできた。

「シユバルツ！？」

狼としては大きすぎる巨駆 黄金色に輝く鋭い瞳 白銀の毛並。神秘の森で出会った 魔食者の銀狼 シュバルツの姿がそこにはあつた。

シュバルツの美しい白銀の毛並は 血によつて紅く染まり グッタリと地面に横たわつていた。

「なんだ？知り合いなのか？」

慌ててシュバルツへ駆け寄るロイを見て ゼクスに疑問符が浮かぶ。

「ああ。カイラスを連れて来た時に話しただろ？こいつがその銀狼だ。」

ロイがシュバルツの傷の深さ 数を調べる為 体を探つていた時
シュバルツが動き ロイを見つめた。

「小僧……久シ振リダナ……」

「馬鹿野郎！ なすこと どうだつていい！ 何があつたんだ！？」

ロイが叫ぶと 騒ぎに気付き レオ カイラス バルボアが姿を現す。

「……シュバルツ……お主……
何があつたんじや……？」

シュバルツの姿に気が付いたカイラスが声をあげる。

「カイラス殿……前ノ魔人ガ仲間ノ魔人共ヲ引キ連レ 森ヲ襲撃シテ
キテイル……」

その言葉にロイとカイラスの顔色が変わる。

「豪魔邪靈衆か…ワシのせいじや…」

ワシを狙つて襲撃に来たのか…すまぬ…」

カイラスは責任を感じ 表情が曇つていく。

そんな彼を見て シュバルツは微笑んだ。

「フッ…何モ氣ニスル事ハナイ。カイラス殿ハ 我ノ恩人。元々カ
イラス殿ニ助ケラレタ命ダ。」

シュバルツは笑みを浮かべながら話すが みるみる衰弱していくの
がわかる。

応急処置として カイラスは急いで治癒魔法をかける。

「オッサン！俺 神秘の森に行つてくる！」

突然ロイが叫ぶ。

全員がロイならそう言つだらうと わかつていたことなので驚く者
はいなかつた。

「いいだろう。だが一人では駄目だ。レオ！ゼクス！ロイに同行し
て豪魔邪靈衆の襲撃者を討伐してくるんだ。」

「了解！」

レオとゼクスは同時に 力強く返事を返した。

「ワシも行こう。」

「駄目だ！お前が行つたら標的にされるだけだぞ！」

バルボアはカイラスを止めようとするが 今のカイラスには通じない。

「分かつておる。しかし ワシだけが残ることなどできるか！ケジメはしつかりと付けさせてもらつ。」

カイラスの強い眼差しに バルボアは反論することが出来なかつた。

「……わかつた。

では改めてロイ レオ ゼクス カイラスの4名は急ぎ神秘の森に出発。豪魔邪靈衆の襲撃者を討伐しろ！

シユバルツは俺が知り合いのヒーラー（治癒魔導師）に頼んで治療してもうかつ。心配するな。行け！！

「了解！！！」

一行は急ぎ 神秘の森へと向かつたのだった。

神秘の森

森の中は 独特の神秘的な姿が消え 辺りは動物の死骸 燃える木々 荒れ果てた大地と まるで地獄の様な光景が広がっていた。

「クソッタレが！ジジイも魔導教典もねえじやねえか！！」

その中で豪魔邪靈衆の一人 ジダンが苛立ちながら傍にあつた動物の死骸を蹴り飛ばす。

ジダンの他に 金色のモヒカン頭の男と スキンヘッドの男と 白いフード付きのローブを頭まで被つた男の姿があつた。

「ジダンさん どうします？あの犬つ口も逃がしちまいましたし

…

モヒカンの男が 恐る恐るジダンに尋ねた。
するとジダンはモヒカンの男を睨み付ける。

「黙れザンバ。犬に逃げられたのは テメエが弱いせいだ。」

ザンバと呼ばれた男はビクリと体を震わせてから ペコペコ頭を下げながら後ろに下がつていいく。

「不様だな ザンバ。」

「黙れヨーク！あの犬つ 口口 結構強かつたんだよー。」

ザンバは ヨークと呼ばれるスキンヘッドの男を睨み付けた。しかしヨークは フンと鼻を鳴らし ザンバを無視する。

「レイド。お前は ビツ思ひへ。立き上げるべきか？」

ジダンは レイドと呼ばれる田いロープの男に声をかける。レイドは振り返り 森の出口の方角を見つめた。

「……いや。恐らく あの銀狼は仲間の元へ行つたんだ。奴は戦闘から逃げ出すタイプとは思えん。仲間に危険を知らせに行つたのだろう。」

「つまり 奴の仲間がここに来ると？」

「可能性は高いな。」

レイドの言葉を聞いて ジダンは怪しく笑みを浮かべる。

その時…

全員が何かに反応する。

「下がれ！！」

ジダンの号令と共に全員が後方へと飛び退く。
すると 先程まで立っていた場所に雷撃が落ちる。

「ハハッ！本当に来やがった！」

ジダンが歓喜の声をあげ 雷撃の出所に視線を向けた。
そこには4人の男達の姿があった。

「避けられましたか…
不意討ちは通用しませんね。」

雷撃の出所はレオだ。

「お前らあああ……！」

黒い閃光が一直線にジダンへと向かって来る。

ガキイン！

凄まじい金属の衝突音。

ロイの前に白いローブの男 レイドが立ち塞がる。
ロイの大剣を 腰に下げていた剣で受け止めたのだ。

「お前が種の者か……」

レイドはロイを見つめ 不敵に笑みを浮かべた。

その背後からザンバとヨークの二人がゆっくりと前へ出てくる。

「レイド。お前は暫く下がつてろ。そいつらは俺とヨークのオモチ
ヤだ。」

ザンバは懐から2本の短剣を取り出した。

同時にヨークも背中に背負つていた 両端に大きな刃物が付いてい
る薙刀に似た武器を取り出す。

レイドは大剣を弾き返すと 言われた通り後方へと下がっていく。

そして レオ ゼクス カイラスの3人はロイに追いつき 戦闘態勢に入った。

「……おいおい あの黒い魔剣士はどうだよ？」

ジダンは辺りを見回しながら問いかけた。

「…ジャガンさんならいねえよ。」

「はあ！？」

「…まあ いい。魔導教典だけ頂いて帰るか。
ザンバ！ヨーク！しくじるなよ。」

ジダンが睨みをきかせると ザンバとヨークの二人に緊張が走る。

そして 最初に動いたのはザンバだ。

一番近くにいたロイに 短剣による怒涛の連撃を繰り出す。
しかし それをロイは全て大剣で防いでいた。

「ゼクスとカイラス殿は スキンヘッドの方を頼みます！」

レオがそう叫びながら 魔力を溜めて ザンバの方へ向かう。

『サンダー・スピア』

鋭い雷の槍がザンバへと伸びた。

ザンバは手を止め なんとかそれをかわす。

紙一重。

雷の槍はザンバの右頬をかすめた。

「ちつ！危ねえな！」

『ダーク・ボム』

ザンバが放った魔法は 黒い爆炎を巻き起こす。

間一髪 反応したレオは後方へと飛び退くが 爆風の衝撃で 吹き飛ばされた。

「レオ！」

「この野郎！！」

ロイは怒りに任せて力いっぱい大剣を振り下ろしたが それは虚しく空を斬る。

「なんだそりゃあ？遅すぎだぜ！」

ザンバは嘲笑いながら ロイの がら空きになつた顔面に蹴りを入れる。

まともに食らつたロイは 激しく後方へと飛ばされた。

一方 ゼクスとカイラスは冷静にヨークの動きをうががつていた。

「とりあえず お手並み拝見といくか。」

ゼクスはそう言い放つと 銃を抜き 弾丸を3発撃ち出した。

放たれた弾丸はヨークの体に被弾する直前 大きな鉄板に弾かれる。それはヨークの手にする薙刀の刃だった。

「ヒュー 案外やるねえ。」

銃弾を薙刀で防いだ早業に ゼクスは挑発的に口笛を吹く。それを見たヨークは 何故か冷めた表情になつていた。

「なんだそれは?この程度で驚く等 実に低レベルだな……」

溜め息混じりに ヨークも挑発的に返す。

「ハツー、言つてくれるな。じゃあ、いつこののはめどりだ？」

ゼクスは田にも止まらぬスピードで銃を撃つ。
そのスピードは最早、早業といつより神業に近い。

放たれた弾丸は真っ直ぐヨークの額に向かつて飛ぶ。
しかし、ヨークはその軌道を完全に見切つていた。
間近まで迫つた弾丸を、容易く薙刀で叩き落とす。

「……？」

驚愕の表情を浮かべるヨークの瞳には、田の前まで迫るもう一つの弾丸が写つた。

ゼクスは銃を一発だけ撃つたと錯覚させる程の速さで、一発撃つていたのだ。

しかも、一発田の弾丸を最初に放つた弾丸のすぐ後ろにつけるように。正に弾丸は一発だけだと錯覚させるように撃つたのだ。

針の穴に糸を通すよつた正確性。
世界一のガンマンと言つても過言ではない。

既に一発田の弾丸を叩き落としたことにより、今のヨークはスキだらけになっている。

防ぐ術はない…

しかしヨークは、一発田の弾丸を叩き落としたモーションのまま無

理矢理 上体を左に傾けて回避行動を取つたのだ。

流石にかわしきる」とは出来ずに 弹丸はヨークの右頬に被弾し 右耳の辺りまで貫通すると ヨークの右耳は無惨に弾け飛んだ。

「くつ… 小賢しい真似を…」

ヨークの瞳に怒りの炎が灯る。

「へえ… やるじゃねえか。額を狙つたのによ。」

ゼクスは銃を指でクルクル回しながら挑発的な笑みを浮かべていた。

ヨークは 右頬から無くなつた右耳の辺りにかけて ボタボタと夥しい量の出血をしている。

人間なら致命傷となる傷だが 魔人であるヨークにとつては そこまでのダメージにはなつていなかつた。

「この落とし前は高くつべぞ!」

ヨークは叫びながらゼクスへと飛び掛かる。

『ロック・ショット』

走るヨークに 岩の塊が直撃した。

「ぐうっ……」

苦痛の呻き声をあげ 後方に飛ばされるヨーク。
今の岩の塊はカイラスの魔法だ。

「……どうにもこいつも舐め腐りやがって……」

ヨークは ゆっくりと立ち上がりながら怒りの叫びをあげる。

「アイアンフォーム！」

ヨークの体がみるみる鉄へと変貌していく。

「な なんだあれ！？」

ゼクスの瞳には 鉄人間と化したヨークの姿が写った。

「ハハハハッ！これは俺の特殊能力だ！貴様らの攻撃は最早俺には通用しない！」

鉄の体にダメージを受けるのは不可能に近い。
絶対絶命である。

「オラオラアー…どうしたよ？もつ終わりか？」

「くそつー…調子に乗るなよ！」

ロイは痛みに顔を歪めながら ゆっくりと立ち上がる。

「ロイ！援護します！」

「任せたー！」

ロイは再び黒い閃光となつて ザンバへと疾走する。

『ライティング・スター』

レオが放つた電光石火の魔法はロイを追い越し ザンバへと飛び。凄まじいスピードで迫る星形の雷撃を ザンバは目を見開きながら跳躍して なんとか避ける。

しかし その避けた先には既にロイが大剣を振り上げて待ち構えていた。

「ううああああ！！！」

力いっぱい振り下ろした大剣は 見事にザンバの体を真つ二つに叩き斬った。

黒い鮮血を撒き散らしながら ザンバの体は力無く地面に落ちていった。

「ちつ！役立たずが…

レイド 賴めるか？」

「承知した。」

レイドは腰に下げた剣を引き抜きながら ロイ達の方へ歩き出す。そして おもむろに被っていたフードを外した。

「なつ……？」

声にならない驚愕の声をあげるロイ。

なぜならレイドは魔人特有の尖った耳ではなく 普通の耳がついていたのだ。

つまり…レイドは魔人ではなく人間だ。

そして それより驚くべきは彼の髪色。綺麗な銀髪。

「お前…種の者か！？」

初めて出会う自分以外の種の者。しかし それは同じ境遇の仲間としてではなく 悔しくも敵として出会ってしまったのだ。

第1-1話 種の者VS種の者

ロイとレイド。

同じ種の者同士が対峙する。

「お前なんで魔人なんかと手を組んでんだよー!?」

ロイの問いかけにレイドは首を傾げ 不思議そうな表情を浮かべる。

「俺にはお前のほうが理解できないがな。俺達 種の者には魔人の中が流れているんだぞ? それでも自分は真っ当な人間だと言い張るつもりか?」

レイドの返答に ロイは言葉を詰まらせてしまった。

たしかに黒いオーラや異常な治癒能力。真っ当な人間と言うには程遠い能力を備えている。

「…だけど俺達には人間の血だって流れてるだろ! だつたら真っ当な魔人とも言えねえじゃねえか!」

必死に力強く意見するロイを見て レイドは呆れた様な笑顔を見せる。

「確かに真っ当な魔人とも言えない。だが魔人の血は黒。

黒色は全てを呑み込み 全ての色を黒へと変える。人間の赤い血液等 魔人の黒い血液の前では 余りに無力。

つまり俺達 魔人の血が流れる種の者は 人間というより魔人に近い存在ということだ。」

淡々と話すレイド。

ロイの表情はみるみる内に曇っていく。

「そんなの……そんな訳あるかよ！」

「認めたくないなら それでも構わん。お前の自由だ。
だが事実は事実。覚醒というのを知っているか？

俺達 種の者は感情の高ぶりや 致命傷によつて 覚醒という現象が起ころる。

覚醒とは体が魔人化したり 化物へと変貌することを言つ。
これが何よりの証拠だろ？ 俺達は化物なんだよ。」

迷うロイに向け レイドは確信をついてくる。

動きの止まつたロイを見て レオに不安が過る。

「そんなの……

そんなもん関係あるか！ 俺は人間だ！ 要は気持ちの持ち用だろ。人間として生きたら人間なんだよ！ テメエはただ人間を捨てただけだ

「魔の力を恐れて人間であることを諦めただけだ！俺は人間として生きる！！」

ロイの迷いが吹っ切れる。

不安にその光景を眺めていたレオも安堵し 笑顔を見せた。

「つぐづく救えぬ男だな…」

レイドは瞳に怒りの炎を灯し 剣を構えた。
それに答える様にロイも大剣を構える。

「レオ…」いつは俺がやる！手を出さないでくれ！」

「……わかりました。」

レオはロイの要求に答え 後ろへ下がる。

それが合図だつたかの様にロイとレイドは同時に疾走する。

鼓膜が破れそうになる程の 激しい金属の衝突音。
ロイの大剣とレイドの剣がぶつかる。

「お前は…自分が魔人に近い存在だと思つてゐるから魔人に味方すんのか？」

全力で大剣を押しながら ロイが呟く。

「……人間は この髪色を見て 不気味だとか 悪魔の子だとか 差別を繰り返す ゲス野郎だ。

だが魔人達は俺を快く受け入れてくれた。

お前だつて そうじやないのか？今まで人間に差別を受けてきたんだ ろ？」

「…………」

ロイは言葉を失う。

ロイとレイドの境遇は全く一緒だつた。

ひどい差別を受け 居場所を失つてしまつた時に今の仲間達に助けられた。

だが違うのは ロイは白銀の翼の心優しき人間達によつて 汚い心の人間ばかりではないという事を教えられた。

対して レイドは冷徹な豪魔邪靈衆の魔人達に拾われ 人間を恨んだまま敵対する形になつてしまつたのだ。

出会い方さえ違えば この二人は固い友情で結ばれていたのかもしない。

「人間は酷い奴ばかりじやない。お前は酷い人間しか知らないだけだ。」

「ふん… 人間なんてもんはどいつも一緒になんだよ…。」

レイドが両腕に力を込める　大剣」とロイを吹っ飛ばした。
飛ばされたロイは足に力を入れて地面に踏み留まり　なんとか転倒
を避ける。

しかしレイドは甘くはない。

ロイが完全に体勢を整える前に　追い討ちをかける。

一気に間合いを詰めたレイドは渾身の力で　斜めに斬り下ろす。
これをなんとか大剣で防いだロイだが　体勢が悪かった為に　不十分なガードとなる。

剣の先端の方が　ロイの左腕に食い込んでいた。
じわじわと赤い血が溢れだしながら　ロイは苦悶の表情を見せる。

「どうした？ そんなものか？」

レイドは剣を押す力を更に強めながら　口の端を吊り上げる。

どんどん肉に食い込んでくる刃。
流石に　これ以上の傷は致命傷となる。

その時　ロイはレイドの不意をつく行動を取った。

剣を押し返すのではなく 剣の軌道と同じ方向に転がり それをかわしたのだ。

「ちっ……」

ロイの行動にレイドは舌打ちをしながら 後方に跳び 追撃に備える。

しかしロイは腕の痛みで 体勢を整えることが精一杯であった。

そんなロイを見て レイドは不満そうな表情を浮かべる。

「…期待外れだな。
もう少しやると思ったが…
もう遊びは終わりだ。」

レイドの体から黒いオーラが放たれる。

「黒いオーラ…！？」

ロイは驚嘆の声をあげる。

同じ種の者だから使うことが出来るのは当たり前のことだが 実際に自分以外の人間が黒いオーラを放つ姿は驚かざるを得なかつた。

「お前も発動させなこと 一瞬で死ぬ」とこなるやへ。

レイドがジリジリとロイに詰め寄る。

「俺は使わねえー。」

ロイが叫びながらレイドへ疾走する。

しかし レイドの姿がロイの視界から消えた。
その瞬間 ロイの背中に衝撃が走る。

レイドの高速移動からの蹴りだ。

「それは なんの意地だ？早く発動させないと 次は斬るぞ？」

レイドは冷静な表情で言い放つ。

ロイは蹴り飛ばされながらも地面に手を着き 体を回転させて 体勢を整える。

「やつてみるよー。」

ロイが叫んだ瞬間 再びレイドが視界から消える。

ガキイン!!

鉄の衝撃音が辺りに響き渡る。

「なんだとー?」

ロイが背後からのレイドの剣を防いだのだ。
その動きには一切の無駄がなかつた。
つまり ただ闇雲に防いだ訳ではなく レイドの動き
見極め それを防いだことになる。
レイドが驚く理由はそこにある。

「まぐれは続かないぞ!」

再び姿を消すレイド。

ロイは落ち着いた様子で 辺りを窺つて いる。

ガキイン!!

更に再び鳴り響く 鉄の衝撃音。

ロイは右側からの 剣の一撃を防いで見せた。

「……」それで、まぐれじゃないってわかったか？「.

ロイはニヤリと笑みを浮かべながら呟いた。

一方のレイドは、その事実を信じられないのだ。怪訝な表情を浮かべている。

「なぜだ！？なぜ今の動きが見える！？」

「見えねえよ？」

ロイは、あっけらかんと答えた。

その言葉にレイドは呆然としている。

「……なんて言つたらいいのかな？俺の魔力がお前の魔力を感じ取つてゐる感覚？」

「……？」

「なるほど。種の者同士特有の共鳴といつやつか……」

「共鳴？？」

聞き慣れない言葉に ロイは疑問符を浮かべる。

「種の者や魔食者の魔力の質は極めて異質だ。
それによつて種の者同士や魔食者の魔力は互いに共鳴し合つて 相手の動きや状態を感じ取り易くなるらしい。
つまり お前が俺の動きを読んだのは確かにまぐれではないが そういうつたタネがあつたわけだ。」

「なるほど。そんなことが出来たのか。」

不敵に笑みを浮かべるレイドを他所に ロイは呑気に納得していた。
「理由が分かれば 対応の仕様はいくらでもある。次は同じ様にはいかないぞ。」

そう言い放つと レイドは剣を構えた。

ロイも魔力を感じ取りながら 迎撃体勢を取る。

突如 レイドの黒いオーラが爆発的に吹き上がつた。
その衝撃にロイは体勢を崩す。

「体勢を崩し 真正面から突つ込む…これなら魔力を読もうが無意味！」

よみがるロイに向かって 正面からレイドが凄まじいスピードで迫る。

「ぐうっ……！」

飛び散る鮮血。

ロイの右脇腹が深く斬り裂かれた。

夥しい出血。

これは完全に致命傷となつた。

「まだ終わつてないぞ！」

レイドは叫びながら ロイの体を蹴り飛ばす。

そして そのままロイが飛ぶ速度に合わせて追撃する。

「死ね……！」

鋭い突きが ロイの心臓に掛けて放たれる。

剣が刺さる寸前 ロイはレイドの体を激しく蹴り上げた。

「ぐつ…クソツ！」

レイドは即座に体勢を整える。
しかし その隙にロイも体勢を整え 追撃を阻止した。

「悪あがきを…

素直に死んでいればいいんだよ。」

「俺は…諦めが…悪くてな…」

ロイは一ヒルな笑みを浮かべるが 大量の出血によって 既に顔面
蒼白となっていた。
意識は朦朧としている。

「ロイ！ 黒いオーラを発動させてください！」

じゃないと今は命が危険です！ 致し方ありません！」

見かねたレオがロイに叫ぶ。

ロイはコクリと頷くと 魔力を集中し始めた。
そして 一気に解放し 黒いオーラを発動させる。

「使わないんじゃなかつたのか？」

レイドは挑発的に笑みを浮かべていた。

「悪いがそうも言つてられなくてな。」

ロイは挑発に乗ることなく 笑みで答える。

黒いオーラの力を治癒能力向上に回し ロイの傷はみるみる内に塞がり始めた。

既に出血は止まっている。

「傷が治りきるのを待つと思つか?」

レイドは激しく黒いオーラを放出し ロイへと疾走する。

黒いオーラの力を治癒能力に回すロイとは逆に レイドは全てを攻撃へと回していた。

ロイは瞬時に回復を中断し 力を防御に回して レイドの剣を大剣で受け止める。

激しい衝撃に 治りかけていたロイの傷口が開き 再び出血する。

「ぐう……。」

激痛に顔を歪ませながら耐えるロイ。

しかし レイドは攻撃の手を休める事なく 凄まじい連撃を繰り出す。

なんとか全ての攻撃を防いでいるが ロイの体は既に限界を超えていた。

「終わりだ！－！」

黒いオーラを纏わせた 剣の一撃は ロイの左肩から鎖骨を越えた辺りまで深く食い込んだ。

「つわああああ！－！」

苦痛の叫びと共に 激しい鮮血が地面を真つ赤に染める。

ロイは力無く その場にガクリと両膝を着いた。

「なにつ－－？」

驚愕の声をあげたのは レイドだった。

なぜなら 口イの体から 尋常ではない程 大量の黒いオーラが吹き出し 体にある全ての傷が一瞬で塞がったのだ。

そのままロイは ゆっくりと顔を上げて レイドを睨み付ける。その睨み付ける瞳は 黄金色に輝いていた。

「半覚醒か！？」

レイドは そう呟ぶと身の危険を感じ 後方に飛び退く。

簡単に述べると 覚醒の一歩手前の状態の事を言つ。

半覚醒…

レイドを睨み付けたまま ゆっくりと立ち上がるロイ。その顔 体中には無数の血管が浮かび上がっている。

「……自我が無くなりそうだ…

一気に決着を着けさせてもいい…」

そう呟くと ロイの姿が一瞬で消える…

…と同時に レイドの背中がザックリと斬り裂かれ は前方へ転がった。

背後には ロイが立っている。

剩りに一瞬の光速移動。

最早 目で追つたり 魔力を感じ取るレベルの話ではない。

「クソがあつ……」

レイドは叫び 転がりながら無理矢理に体勢を整える。
そして 黒いオーラを限界まで大量に放出させた。

「…無駄だ。」

レイドの目に写つたのは 先程まで距離が離れていたはずのロイの姿が目の前にあることと 自分の心臓に深々と突き刺さる大剣だった。

「『ハフッ…！』

激しく吐血し レイドはそのまま息絶えた。

ロイは突き刺さった大剣を ゆっくりと抜き 悲しい表情でレイドを見つめている。

既に瞳の色は元に戻り 半覚醒は解けていた。

「……お前とは もつと別の形で会いたかった
せめて安らかに眠ってくれ……」

そつ咳きながら ロイは意識を失い 豪快に その場に倒れ込んだ。

ロイの体は既に限界を超えて かなりボロボロの状態となっていた。

「ロイ……」

即座にレオが駆けつけ ロイの体の状態を調べ始める。
脈はあり 呼吸もしているが 弱々しいものであった。
直ぐに治癒魔法で体力を回復させないと危険な状態である。

しかし そんな二人の前に 豪魔邪靈衆 ジダンが立ち塞がつたの
だった。

第1-2話 援軍

鉄の体と化したヨークは、余裕の表情でゼクスとカイラスを眺めている。

逆に一人は迂闊に近づくことが出来ないでいた。

「どうした？ 来ないのか？…………ん！？」

何かに気付くヨーク。

その視線はカイラスへと向けられていた。

「お前かあ！ 魔導教典を持つてるジジイってのは…！」

ヨークは薙刀の刃をカイラスへと向ける。
そして、突撃の体勢を取り始めた。

「魔導教典は頂くだ。」

ヨークが走り出そうとした。その時…
ゼクスが数発の弾丸を放つ。

と同時に放たれた弾丸がヨークの鉄の体に弾かれてしまう。

「無駄なことしてんじゃねえよ。面倒臭え。」

ヨークは足を止め 苛立ちの表情をしている。

「ああっ！？」

その時…

ヨークはカイラスが魔導教典を開き 魔力を溜めていることに気が付く。

流石の鉄壁の体も 未知の力を秘める魔導教典に対抗するにはリスクが高すぎる。

ヨークは慌てて後方に飛び 回避行動に移った。

『ジオ・スタンプ』

カイラスが放った魔法で 広域に重力のプレスが広がる。

その範囲はあまりに広大であつた為に ヨークは回避が間に合わず重力のプレスに圧される。

「ぐうっ…クソ…」

ヨークの鉄の体がギシギシと音をたて 押し潰されていく。
ヨークはなんとか踏ん張り それを耐えていた。

「カイラス！そのまま続けてくれ！俺がトドメを刺す！」

「了解した！」

ゼクスは素早く拳銃の弾丸が入ったバレットを入れ替える。
そして銃口をヨークへと向けた。

「…けつ！そんなもんが…俺に通用するかよ…」

ヨークは重力に押し潰されながらも不敵に笑みを浮かべていた。

確かにヨークの鉄の体には 先程と同じように銃弾は通用せず弾かれてしまうだけだろう。

「それはどうかな？」

激しい銃声と共に弾丸が放たれる。

「なつ！…？」

驚愕の声をあげるヨーク。

銃弾を弾き返す筈のヨークの鉄の体に 大きな風穴が開いたのだ。

「今のは徹甲弾つてやつだ。

装甲に穴を開ける為に設計された砲弾さ。

主に戦車砲とかに使われるやつだが 今のはそれをコンパクトにした弾丸だ。

そして俺の銃は特注品でな。徹甲弾を放つ衝撃にも耐えられる。」

ゼクスは自慢気に銃を指で回して見せた。

ヨークが撃ち抜かれたのは体の中心部分。人間で言つところの心臓に当る部分だ。

「がああ……！」

どうやら急所には間違いなかつたようだ。

ヨークの体がみるみる内に鉄から元の姿へと戻つていく。

そして弱りきつた体では重力魔法を防ぐことは敵わない。ヨークは呆氣なく押し潰されて 肉塊と化してしまった。

「よし。ロイ達ももう片付いた頃だろ……

.....

ゼクスの皿に[写つたものはグッタリと倒れたロイと その上に覆い
被さる様にして倒れる 血だらけのレオであった。

「ロイー！レオー！」

ゼクスとカイラスは慌てて一人の元へ駆け寄る。

レオは出血が酷いが 息も心臓の鼓動もしつかりしていた。
しかしロイの方は外傷は見当たらないが 息も微かで 鼓動も弱々
しくなりつつある。

この状況から見て 意識を失ったロイを庇つてレオが盾となつたの
だらう。

ゼクスは怒りの滲み出る瞳を 正面で一矢つけているジダンへと向
けた。

「テメH..

覚悟は出来てんだろうな？」

「おお 怖い怖い。」

ジダンはゼクスに向けられた銃口に一切の動搖を見せずに 余裕の笑みを浮かべている。

「カイラス！ あんたは一人に治癒魔法をかけてくれ。こいつは俺がやる！」

「承知した！」

カイラスは直ぐ様二人の治療へと移つた。

そんなゼクスとカイラスの一人を見て ジダンは呆れた様な笑みを浮かべる。

「クク… お前らは仲間がやられた怒りと動搖で周りが見えていないようだな。
どうやら今到着したようだ。」

ジダンの意味深な言葉に一瞬首を傾げる一人だったが すぐに異変に気付く。

辺り一帯から邪悪な魔力が溢れていたのだ。

「しまった！ 困まれておる！」

カイラスは治癒魔法を中断させ 叫ぶ。

すると 周りからゾロゾロと魔人の集団が姿を現す。数は20。全員がザンバとヨークレベルの魔人だ。ロイ達が今まで相手にしてきた下級ランクの魔物の大群とは訳が違う。

「黒い魔剣士対策に一応援軍を用意してたんだがな…まあいい。お前等 魔導教典を奪え！」

ジダンの号令と共に一斉に魔人達が二人に詰め寄る。

「そこまでだ！！」

その時 背後から馬鹿デカイ声が響いた。

と同時に巨大な肉切り包丁が凄まじい勢いで回転しながら飛来する。

巨大な肉切り包丁が地面に突き刺さり その衝撃波に怯み 魔人達は後退していく。

「ビジッてんじゃねえ！！

テメエ！何者だ！？」

苛立ちに声を荒げながらジダンが叫ぶ。

「俺は白銀の翼、ギルドマスターのバルボアだ！内の者がエラい世話を
になつたなあ！魔人さんよ！」

ゼクスとカイラスの側まで近づいたバルボアは巨大な肉切り包丁を
容易く担ぎ上げた。

「バルボアさん。無茶し過ぎじゃないですか？お仲間さんに その
大つきな包丁が当たつたらどうするんです？」

バルボアの後ろから綺麗な水色の髪をした細身の男が姿を現す。
その男の後ろには黒髪 短髪の左頬に傷のある男の姿があった。

「マスター。後ろのお二人さんはどちらさんだ？」

見知らぬ二人の姿を見て ゼクスは疑問を投げ掛ける。

「ん？ おおそろか！ お前は初対面だつたな！
お前達が出て行く前に俺が あのワンコロの治療を知り合ひのヒー
ラーに頼むつて言つただろ？
コイツがそのヒーラー。」

傭兵、ギルド《暁の刃》のヒューリイだ。」

「よろしく。」

バルボアに紹介を受け ヒューアイは笑顔で軽く会釈をした。

「…暁の刃つてあの有名な！？」

ゼクスは目を見開いて驚きの声をあげた。

「マスター！アンタなんでそんな大物と知り合いなんだよ！？」

「ん？元々はそこギルドのマスターが古い友人でな。
んで このヒューアイはコイツが新人の時代からの知り合いだ……」

「オイ！テメエ等！…いつまで俺様達を無視するつもりだ！…ブチ殺
すぞ！！」

痺れを切らしたジダンが叫ぶ。

その顔は怒りで真っ赤に染まっていた。

ジダンが手を上げて合図を出すと 魔人達が全員 戰闘態勢に入る。

「ヒューアイさん。俺に任せてもらつてもいいっスか？」

黒髪の男が背中に背負つた異様な形の大剣に手をかけながら口を開く。

「そつちの兄さんも暁の刃のメンバーかい？」

ゼクスの問いかけにヒューリは頷いた。

「ええ。彼は新人のアクセルです。僕は戦闘タイプじゃないんで彼が僕の護衛役なんですよ。

：じゃあアクセル。頼んだよ。」

「了解！」

アクセルが背負つた大剣を一気に引き抜く。

刃はノコギリ状。柄の部分はゴツい機械の様な造型をしている。更に柄の先端部分からは太いチェーンが伸び、剣を握る手とは逆の左腕に握つていた。

なんとも異様な造型の大剣である。

「殺れええええ！！！」

アクセルが剣を引き抜くと同時にジダンが号令を出し 一斉に魔人達が押し寄せる。

四方八方から繰り出される攻撃をアクセルは見事な体捌きで 避け続けていた。

「ふんっ！」

アクセルが一呼吸で振り抜いた斬撃は魔人の体を真つ二つに斬り裂く。

魔人達は仲間が真つ二つにされても先程の様に怯む事なく攻撃の手を休めない。

アクセルは素早く回避行動に戻り 再び攻撃の嵐を掻い潜つていく。攻撃から回避の素早い切り替え。彼の戦闘センスは見事の一言だ。

アクセルはヒットアンドアウェイを繰り返し 気付けば既に6体の魔人を斬り伏せていた。

「どけい！俺が殺る！！」

魔人の集団の中で一際体の大きな魔人が叫びながらアクセルに突撃する。

ガキイン！！

魔人の持つ巨大な鉄の棍棒がアクセルの大剣を受け止める。アクセルは初めて動きを止められたのだ。

「ハハハツ！囮に乗るんじゃねえぞ小僧！！」

「お前がな…デブ。

唸れ！チエーンソー・エッジ！！」

アクセルは柄の先端部分から伸びたチエーンを力強く引いた。

ドルルンッ！！！

バイクのエンジンを吹かした様な音を鳴らしながら大剣の機械の部分が振動して煙を吹き上げる。

すると ノコギリ状の刃が高速回転を始めた。

「なんだつ！！？」

高速回転するノコギリ状の刃が火花を散らせながら 大きな魔人を棍棒ごと一刀両断する。

これが彼の武器。

魔剣チエーンソー・エッジである。

「残りは12匹か…

流石にレベルの高めな魔人相手だと疲れるな。」

アクセルの表情には多少の疲労が見えていた。

「手を貸そう…！」

魔人の集団に突撃したのはバルボアだ。

真っ直ぐに走りながら豪快に魔人達を次々と斬り伏せていく。

続いてゼクスの銃声が鳴り響く。

見事に眉間を撃ち抜かれた魔人達がバタバタと倒れ出す。

『ジオ・スタンプ』

カイラスの魔法が残る魔人を一気に押し潰した。

白銀の翼勢の波状攻撃により 魔人の集団は壊滅したのだった。

「……クソッ！バカな…」

これに驚いたのはジダンである。

勝利を確信した矢先 予想外の第一勢力の介入。これにより一気に形勢逆転されたのだ。

「さあ どうする？ 残るはお前だけだな。」

バルボアに肉切り包丁を向けられ ジダンは苦虫を潰した様な表情になる。

「次は失敗は許されん…
テメエ等は何が何でもブチ殺す！…！」

ジダンは手を掲げ 上空に無数の赤い針を形成する。

「待て！お前の相手は俺だ！…！」

「駄目です！まだ動かないほうがいい。」

そこにはヒューリイに支えられながら大剣を構える ロイの姿があつた。

ロイは魔人達との戦闘中にヒーラーであるヒューリイの治癒魔法を受けていたのだ。

しかし短時間の為に全快には程遠い。

この状態でジダンと一戦交えるのは剩りに危険である。

「バルボアさん！彼を止めて下さーよー！」

ヒューリイは困った表情を浮かべながらバルボアに救いを求める。

「ん~…

そいつは何言つても聞きやしねえよ。好きにさせてやれ。ヤバくなつたら俺がなんとかする。」

バルボアは頭を搔きながら答える。

手にしていた武器もしまい、完全にロイに任せゆつもりだ。

「……どうなつても知らなideですよ。」

ヒューリイは渋々支えていた手を離した。

ロイは大剣を構えながらゆつくりとジダンへ歩み寄る。

「…テメエ等どこまでも舐めやがつて。
死にかけの奴が相手だと？ 望み通り殺してやるよー。」

怒りで顔に無数の血管を浮かび上がらせながらジダンは上空に浮かばせていた赤い針をロイに向けて飛ばす。

『レッド・コードル』

襲いかかる無数の赤い針をロイは避けるのではなく 真っ直ぐに走り出した。

誰もが最悪の展開を想像したその時…

ロイが走り抜けると同時に赤い針が地面に突き刺さる。ロイの速度がレッド・コードルの速度に勝ったのだ。

「なんだとつ！？」

レッド・コードルを掻い潜つたロイが既に眼前に迫っていた。

「もうつたああ…！」

ロイは振りかぶつた大剣を豪快に振り抜いた。

後方へ飛び退いたジダンだが反応が遅れた為に 胸辺りをザックリと切り裂かれている。

「ちいっ！」

激しい出血でジダンは舌打ちをする。

そんなジダンにロイは追撃を開始していた。
大剣を振り上げながらジダンを追つ。

しかしそれを黙つて許すジダンではない。

『レッド・ニードル キューブ』

ジダンの周りに赤い針が球体状に集まる。
まるで巨大な赤い針鼠の様だ。

これでは攻撃を当てる手段がない。攻撃をすれば自らの体も赤い針
に串刺しにされてしまうからだ。

だがしかし ロイは躊躇することなく赤い針球に向かつて大剣を振
り下ろした。

ロイの体中から鮮血が舞う。更に両腕は赤い針に串刺しにされてい
る。

しかし これだけの傷を負つたにも関わらず虚しくもロイの大剣は
赤い針によつて防がれ ジダンに傷をつけることは出来なかつた。

「へッ！残念だつたなあ。その腕じゃマトモに剣を握ることも出来
ねえだろ。」

ジダンが赤い針球を解いてニヤつきながら姿を現す。

「……これでいいんだよ。」

そう咳きながらロイは黒いオーラを放出させた。

その全てを腕の治癒能力向上に回し 一気に腕の傷を塞いだ。

そしてそのまま神速の如き速さで大剣を振り抜く。

「なつ！？」

「油断したな。」

ジダンの体が腰の辺りからズルリと擦れ落ち 黒い鮮血を撒き散らしながら豪快に倒れ込んだ。

ロイは黒いオーラの力での回復を視野に入れて自らの腕を潰し ジダンが油断して赤い針球から出てくるのを誘ったのだ。

あの一瞬で判断し この戦略を組み立てたロイのセンスは神がかっていると言つても過言ではない。

更にはこの戦略を思いついたとして 自らの腕を犠牲にした根性は相当なものだ。

見事に勝利したロイは一瞬笑みを浮かべたが 大剣を地面に落とし

そのまま後ろへ豪快に倒れ込んだ。

度重なる負傷と 黒いオーラの多用。

ロイの体は既にボロボロというレベルを超えていたのだった。

第13話 聖水

神秘の森の襲撃事件から数日後…
一行は白銀の翼のアジトへと集まっていた。

「おいヒューイー！ロイの状態はどうなんだ！？」

自室のベッドに横たわるロイの姿を見つめながら バルボアは不安
そうな表情を浮かべていた。

「……体の傷は全て完治しています。体力面もそこそこ回復している
はずなんんですけど…

未だに意識が戻る気配はないですね。
精神面に甚大なダメージがあるようですね。精神汚染の傾向も少し見
えますし。」

ヒューイはロイが眠るベッドの横に立ち 深刻そうに口を開く。

数日が経過して体は回復しているにも関わらず ロイはずつと意識
が戻らない状態が続いていたのだ。

「恐らく半覚醒による精神汚染じゃね？ 魔の力がロイの体を蝕ん
でいるんじゃない。」

後方で様子をうかがっていたカイラスが口を開いた。

「魔の力を浄化する聖水が必要ですね…」

「聖水? その聖水はどこにあるんだ?」

ヒューリーの眩きに素早く反応するバルボア。

「聖水は教会に行けば手に入ります。」

聖水とは読んで字の如く 邪悪な力や呪いを浄化する効果がある聖なる水のことである。

その生成方法は神に仕える神父や神官の神聖魔法によつて生み出される。

神聖魔法とは治癒魔法の上位クラスの魔法の様なもので 失った手足の再生や 時と場合によつては死者を蘇生することもできるという。

「事態は急を要します。早急に聖水が必要なので ここから一番近い教会に取りに行つてください。」

「ここから一番近い教会……マライ大聖堂だ!」

バルボアは大声をあげながら慌ただしく出発の準備に取り掛かる。

「待ってくれマスター！」こはスピードのある俺とレオで行つてくれる！」

話しを聞いていたゼクスとレオが既に準備万端で待ち構えていた。

「そうか？わかった！大至急マライ大聖堂へと向かってくれ！」

「了解！――！」

二人は力強く返事を返すと、直ぐ様マライ大聖堂へと出発した。

豪魔邪靈衆の根城

「ねえエリック。ジダンの奴 殺られちゃつたらしいね。」

金髪の少年魔人ミカエルが口を開く。

「…ミカエルか。ああ つい先日のことだ。部下も引き連れて この坐間とはな…」

奴は豪魔邪靈衆の恥わらしだ。」

ミカエルに答えたのは長髪青髪の魔人エリックだ。

「フフツ ジダンは弱いからねえー だから僕に任せてくれればよかつたのに。」

ミカエルはジダンの死を特に気にする様子もなく陽気に話していた。そんなミカエルを見て エリックは少し呆れた表情をしている。

その時…

周辺に凄まじい巨大な魔力が広がった。

「…じうやうボスのお帰りの様だな。」

エリックとミカエルの視線の先に 逆立つた黒髪の黒いマントを身に纏つた魔人の姿があつた。

「ジダンが殺られたそうだな。誰にやられた?」

威圧感のある低い声が放たれる。

この魔人こそが豪魔邪靈衆の首領ゲオルグである。

「白銀の翼という傭兵ギルドの者達です。どうやらそのギルドに魔導教典を持つ老人もいるようです。」

魔導教典という言葉を聞いてゲオルグの顔色が変わる。

「ほう…

魔導教典はそこにあるのか。何としても手に入れる。」

「僕に任せてしまふ」

ゲオルグの前に ひょっこりとミカエルが立つ。

「…お前は少々遊びすぎる。駄目だ。」

ゲオルグの言葉にミカエルは頬を膨らませて見せた。

魔人ではあるが こうして見るとまだあどけない人間の少年の様に見える。

「ちゃんと仕事するからさあ。お願ひだよ。」

ミカエルは等々駄々をこねだした。

そんな姿にゲオルグとエリックは呆れ返った表情をしている。

「……仕方ない。

ヨハンはいるか？」

ゲオルグが呼びかけると闇の中から年老いた魔人が姿を現す。

鼻の下から頬にかけて白い鬚が生えている。

一見すると普通の老人の様に見えるが、ただならぬオーラを放つて
いることから相当な手練れと見て間違はないだろう。

「何用ですかな？闇下。」

ヨハンが立派な鬚を撫でながら口を開いた。

「仕事だ。ミカエルに魔導教典の奪取を任せる。
お前にはミカエルのお守りを頼もうと思つてな。」

「やつたね よろしくー！ヨハン爺。」

ゲオルグの言葉にミカエルは飛び跳ねて喜ぶ。

「ミカエルのお守りですか…

老体には少々堪えますな。まあ閣下の命令とあらば致し方ない。お任せ下され。」

「…どう? その白銀の翼つてこうギルドの奴らはどうしているの?..」

ミカエルの問いかけにゲオルグは難しい表情を浮かべる。

「奴等の居場所はまだ特定していない。ビツしたものが…」

悩む3人を尻目にヨハンは何かを閃く。

「閣下。奴等は神秘の森に2度現れとるんですよね? ならばその周辺の町や村を襲撃してはいかがですか?」

傭兵、ギルドならば襲撃の情報が奴等の耳にも届くはずですじゃろ?」

ヨハンの提案に3人は目を丸くした。

「なるほど… それならば奴等が出てくる可能性は高い。」

「さつすがヨハン爺 頭いいね。」

「……よしーヨハンの提案でいい。ミカエルとヨハンは神秘の森周辺の町村を派手に襲撃する。」

ヨハンの提案に皆が同意し ミカエルとヨハンの2名は神秘の森周辺の町村へと向かって行った。

マライ大聖堂

ここはマライ大聖堂。幻想的で神々しい巨大な建造物。建物の上部分には色鮮やかな巨大なステンドガラスが備え付けられている。

「すみません。誰かいますか?」

レオが大聖堂の大きな扉を開けて挨拶をする。
すると 奥の方から司祭服に身を包んだ背の低い黒髪の青年が姿を現す。

「何か御用でしょつか?私はマライ大聖堂の神父見習いのアレンと申します。」

アレンと名乗る男は深々と頭を下げ 2人に挨拶をした。

「実は仲間が邪悪な力による精神汚染を受けてまして こちらで聖水の方を頂きたいのですが?」

レオの言葉にアレンはなぜか困った表情をしている。

「……すみません。

生憎今は神父様が不在なんです。神父様の許可なしに聖水をお渡しすることは出来ないんです。」

落胆の事実にレオとゼクスは顔を見合わせる。

「おいーどうする?他の教会を探すか?」

「いえ駄目です。他の教会はかなり距離があります。

……アレンさん。神父様は今どちらに?」

レオの問いかけにアレンは戸惑いの表情を浮かべながら口を開く。

「……実は昨日ここから北の方にあるリベル村という村を訪問に行つたきりまだ戻らないんです。

普通なら数時間歩けば辿り着く距離なんですねけど…
神父様自身も昨日の夜には戻ると言つていたんですが…」

アレンは不安そうに話す。

現在時刻は夕刻。剩りに遅すぎる。

何かトラブルにあつたと考えるのが妥当である。

「……わかりました。

私達が探して来ましょ。」

突然のレオの言葉にゼクスは目を見開いた。

「おい！そんな時間あるのかよ…？」

「他の教会を探すよりは賢明だと思います。

リベル村はそれほど距離も離れてないようですし。

それにこのまま放つておく訳にもいかないでしょう。」

「それはそうだが…」

ゼクスはまだ納得がいかない様子だ。

「わあー！迷ってる暇はありませんー。急ぎませーん！」

レオは半ば強引にゼクスを連れてリベル村へと向かつて出発した。

リベル村へと向かう道中 二人は林道へと差し掛かっていた。
薄暗く気味の悪い光景が長々と続いている。

「……ゼクス。」

そんな中レオは急に立ち止まりゼクスに声をかける。

「ああ……わかってる。困まれてるな。」

同じ様にゼクスも立ち止まり辺りを警戒し始めた。

「来ます！－！－！－！」

レオの叫びと共に茂みから10体の魔物が現れる。

赤黒い皮膚に醜い醜悪な顔。頭部は異様な骨の形状で2本の角が生えた様な形をしている。

レッサー＝モン。

下級ランクに属するズル賢い魔物である。

「時間が惜しい。一気に片付けるぞ！」

「無論です！」

二人は戦闘態勢に入ると同時に素早く攻撃を開始した。

アイコンタクト一つでレオは前方の5体。ゼクスは後方の5体を分担して狙う。

『サンダー・ボルト』

レオの放つ雷の魔法が5体の魔物を黒ずみに変える。

その直後 レオは雰囲気の違う魔力を感じ取り 慌てて後方を振り返った。

「ゼクス！待ってください！！」

ゼクスはレオがそう叫ぶ前に既に攻撃を止めていた。

5体のレッサー・デーモンの内の1体が自らの尾で何か大きな物体を巻き 前方でチラつかせている。

「…あれがそうか?」

「…ええ。意外と早く見つかりましたね。」

レッサー・デーモンがチラつかせていたのは司祭服に身を包んだ一人のグッタリした老人であった。

神父がそう何人も出歩く筈はなく 彼がマライ大聖堂の神父と見て間違いないだろう。

「生きてんのか?」

グッタリ吊るされた神父をゼクスは不安な表情で見ていた。

「かなり衰弱している様ですが息はあります。助け出しましょう。」

「…けどなんでアイツ等は神父を食わずに人質の様に扱ってるんだ?」

ゼクスは最もな疑問をレオに投げ掛ける。

「…恐らく あの人を利用して救出に来た傭兵、ギルドの『屈強な戦士達を捕食するつもりなんでしょう。魔物にとつて鍛え上げた強い戦士の肉ほど美味だと聞いたことがあります。」

レオの推測は的中していた。

レッサー＝デーモンは悪知恵の働くズル賢い魔物なのである。

「しかし…相手が悪かつたですね。その程度の戦術等 私達には無意味。」

「ああ さつさと終わらせよつぜ。」

二人は人質にされた神父に動じる事なく戦闘態勢に入つた。

予想だにしない展開にレッサー＝デーモン達は動搖を見せていく。

『サンダースピア』

「食らえ！ ！」

レオの魔法とゼクスの銃弾が神父を避け、正確にレッサー＝デーモンを捕らえる。

残り5体のレッサー＝デーモン達は断末魔の悲鳴をあげ、一瞬で全滅したのだった。

マライ大聖堂

「神父様！」

神父を救出したレオとゼクスは急いでマライ大聖堂へと戻っていた。それを安堵の表情で神父見習いのアレンが出迎える。

「衰弱していますが、休息をとつて栄養をつければ、すぐに良くなれる筈ですよ。」

笑顔で声をかけるレオに、アレンは深く頭を下げ、何度も何度もお礼の言葉を告げたのだった。

数時間後、意識の戻った神父に了解を得て、レオとゼクスの二人は念願の聖水を手に入れた。

一人は急いでロイの待つアジトへと向かう。
これでロイは助かる筈である。

しかし…

白銀の翼を狙う豪魔邪靈衆の毒牙は　すぐ傍まで迫つて来ていたの
だった。

第14話 強さを求めて

傭兵ギルド白銀の翼のアジトに一人の男がバタバタと慌ただしく駆け込む。

「マスター！聖水を手に入れて来ました！」

レオは息を切らしながら聖水の入った小瓶を掲げる。その後ろではゼクスが同じ様に息を切らしていた。

「よしー・ヒューイー！これでなんとか出来るかー！？」

バルボアは小瓶を受け取り ヒューイーへと渡す。

聖水の入った小瓶を受け取ったヒューイーはニッコリ微笑んだ。

「ええ。これでロイ君は大丈夫ですよ。
すぐに処置します。」

そう言つとヒューイーはロイの体の至る所に聖水を数滴垂らし 最後に残つた聖水をロイの口へと運んだ。

すると ロイの体から眩い幻想的な光が放たれる。
それと同時にヒューイーは再び治癒魔法を発動させた。

苦悶の表情を浮かべていたロイの顔は見る見る内に穏やかな表情へと変わっていく。

「…………ん? ここには?」

意識の戻ったロイが瞼を開け ゆっくりと辺りを見回す。

「…………俺の部屋か」

あれ? あのジダンって奴を倒して
…その後どうなったんだ?」

ロイが豪魔邪靈衆との戦闘を思い出そうとした時 部屋の扉が開かれる。

「ロイ! 一日が覚めたか! ーーー!」

一際馬鹿デカい声が部屋中に響き渡る。
声の主はもちろんバルボアだ。

寝起きにいきなりの大声を聞かされ ロイは顔をしかめている。

「おっさん…

俺はあの後どうなったんだ?」

「倒れたんだよ。まああれだけの傷を負つて 力も多用したんだから無理もないがな。」

バルボアの言葉を聞いてロイは顔を俯かせた。

ナイトメアとの一戦でもそうだがロイは強敵との戦闘で未だ綺麗な勝ち方をしていない。

それがロイにとつては悔しかったのだ。

黒いオーラに頼らないと勝利出来ないということ。力を使って勝利しても必ず疲労で倒れてしまう自分が情けなかった。

「…何浮かない顔してんだ。似合わねえぞ。」

そんなロイの表情をバルボアは見逃さなかつた。
声をかけながらゆっくりとベッドに腰掛ける。

「……俺は自分の力で強い奴に勝つたことがない。力を使わないとマトモにやり合いつ事も出来ないんだ。」

ロイは深刻な表情で口を開いた。

「…けつ！

らしくねえな ロイ！

方法はどうであれ勝ちは勝ちだー真剣勝負に綺麗も汚いもないんだよー

実際お前は勝つてんだろー？種の者だかなんだか知らねえが その力も含めてお前だらうがーそれは紛れもねえ お前の勝利だよー！」

バルボアはロイの悩みを吹き飛ばすかの如く力いっぱいロイの背中をバンバン叩きながら話しを続けた。

しかしそれでもロイの表情が変わることはなかつた。

「……強くなりてえのか？」

バルボアのその言葉に反応して ロイは俯かせていた顔を勢いよく上げた。

「強くなりたいつ！」

力強く言い放つロイの瞳には決意の炎がメラメラと燃え上がつていた。

その眼差しを見てバルボアはフツと笑った後 ゆっくりと立ち上がり 口を開いた。

「ここから遙か北の方に飛燕山という山がある。
そこには剣聖と呼ばれるシバって男がいるはずだ。
とりあえずその男に会ってみろ！その後話しを聞くなり 勝負を挑
むなり 弟子になるなりはお前の自由だ。」

バルボアはそう言い残し部屋を去っていく。

「剣聖シバ…」

「ここにロイの新たなる試練が始まつとしている。

純粹な強さを手にする為 ロイは剣聖シバがいるという飛燕山へ向
かうことを決意した。

飛燕山は白銀の翼のアジトから遙か北方に位置する為に長旅が予想
される。

ロイは水と食料等 必要な物の準備を済ませアジトの扉を開ける。

「小僧。飛燕山へ向カウノダロウ。」

扉を開け 外へ出た所に巨駆の銀狼が腰を下ろしていた。
神秘の森の主 魔食者の銀狼シユバルツだ。

シユバルツは豪魔邪靈衆の襲撃以来 単独で神秘の森へ戻るのは危
険だと判断され バルボアの計らいで白銀の翼のアジトで生活して
いたのだ。

「先程バルボア殿ト話シテイルノガ聞コエテナ。
我モ剣聖シバトイウ男ニ興味ガアル。
ソレニ飛燕山ノ場所ハ把握シテイル。 案内デキルハズダ。
我モ同行サセテクレ。」

シユバルツは立派な長い尾を振りながら瞳を輝かせている。

「お前も来てくれるのか？そりや心強え。
道案内お願いするよ。」

ロイはシユバルツの同行を快く承諾した。

「お前シバつて奴のこと知つてんのか？」

ロイの言葉にシユバルツは目を丸くする。

「ムシロ小僧ハ知ラヌノカ！？」

剣聖シバ。元ハ帝都ノ最上級騎士団 天王騎士団ニ所屬シテイタ男
ダ。

ソノ圧倒的ナ劍ノ才カラ劍聖ト呼バレ慕ワレテイタ。

アル時 帝都ニ上位ランクノ魔物100体ガ攻メ込ンデ来ル事件が
起コツタンダガ ソノ時ニ半数以上ノ魔物ヲ一人デ擊退シテ活躍シ
タノガ ソノ男ダ。

ソレ以来 英雄王トモ呼バレテイル。

今ハ現役ヲ引退シテ 飛燕山デ暮ラシテイルガ 実力ハマダマダ衰
エテイナイダロウ。」

このシユバルツが語る話には世界的に有名なものが ニュースや
新聞を全く見ないロイにとつては初耳であつた。

「英雄王 剣聖シバか…

すげえ… その人からなら何か強くなる為のヒントが得られそうだ…！
早速向かおうぜ！シユバルツ…！」

シユバルツの話で俄然やる気が沸いたロイはシユバルツを連れて
颯爽と飛燕山へ向かつたのだつた。

ロイ達が飛燕山へ向かつて2日後…

傭兵ギルド 白銀の翼に緊急の依頼が舞い込んだ。

「みんな！集まってくれーー！」

バルボアの呼びかけで広間にメンバー全員が集まつてくれる。

「何事ですか？」

バルボアのただ事為らぬ雰囲気を感じ取り レオが口を開いた。

「昨日から神秘の森周辺の幾つかの町村が魔人の襲撃を受けているそうだ！」

既に2つの町と1つの村が壊滅。次に狙われるのは一番近いリントの町と推測出来る。

お前達は早急にリントの町へ向かつて欲しいーー！」

神秘の森と魔人というキーワードで全員の顔色が変わる。

「豪魔邪靈衆…ですか？」

「……おそれくそつだ。」

「敵さんの数は？1日で3つの町村を壊滅させたぐらいだから軍勢か？」

ゼクスが妥当な予想をたてるが バルボアは首をゆっくり横に振つた。

「…2人だ。」

その言葉に全員が息を飲み 驚愕の表情を浮かべる。

「2人！？そんなバカな！
あのジダンつて野郎の戦闘力でも それほどの事は不可能だぞ！？
あいつの比じやない強さの魔人が2人もいるってことか！？」

ゼクスは剩りの信じられない現実に声を荒げた。

「とにかく今は急いでリントの町へ向かいましょうー一刻の猶予もありませんよ！」

皆の迷いを断ち切る様に叫ぶレオ。

しかし現在 白銀の翼はロイとジャガンが不在。

前回の様にマスターであるバルボアがそう易々と出撃する訳にもいかないので 実質レオとゼクスとカイラスの3名しかいないのだ。圧倒的な力を秘めていると予想される魔人2人に挑むには危険な人

数である。

更には敵が豪魔邪靈衆ならば 魔導教典を持つカイラスは自由に動く事は出来ないであろう。

しかし白銀の翼は傭兵、ギルドである。

助けを求める人達を救うのが彼等の仕事なのだ。

3人は決意を固め リントの町へと向かう。

命を懸けて町を 人々を守る為に…

一方のロイとシュバルツは飛燕山へと歩き続け 人気のない荒れた道に差し掛かっていた。

辺りは日が沈み 薄暗い光景が広がっている。

「シユバルツ。もう暗くなってきたし 少し歩いたら休憩すつか。」

「ウム。長旅二ナルダロウカラ早メノ休息ヲトロウ。」

飛燕山へ移動を始めてから既に7時間程経過していた。

これだけ歩き続けて この程度の疲労なのはロイとシュバルツならではであろう。

「おうい 待ちな兄ちゃん。」

突然ロイ達の前に柄の悪い男が現れる。
それに続いて2人の男がその男の後ろから現れた。男達は全員 不恰好な剣を手にしている。

「……なんか用か?」

ロイは特に気にする様子もなく 男達に尋ねた。

「見りやわかんだろ? 盗賊だよ。金目の物置いて とつとと失せな!」

最初に現れたリーダー格と思われる男が一矢つきながら答える。

「やつぱ そうか。」

「氣付イテハイタガ 剩リニ弱イ氣ダツタカラ言ワナカツタガ…
言ツタ方ガ良カツタカ?」

盗賊達は狼から発せられた声に耳を丸くしている。

「いや 別にいいよ。」

お前等 狹う相手が悪かつたなあ？」

ロイは不敵に笑いながら盗賊達を睨み付ける。
その瞬間 ロイの威圧感と鬪氣に触れ 盗賊達はその場で腰を抜かした。

「…な な なんだ！？」
「…つらはーーー？」

盗賊達は完全に脅えきつていた。
その横を通り過ぎながらロイが口を開く。

「なにもしねえよ。

これに懲りたら盗賊から足を洗うんだな。」

盗賊達は通り過ぎていくロイとシユバルツの後ろ姿をただ眺めるこ
としか出来なかつた。

リントの町へ到着した白銀の翼 一行は目の前に広がる光景に歯を嚙
み締めていた。

「遅かつたか…」

辺り一面に広がる火の海。倒壊した建物が瓦礫となつて 其処ら中に散らばり 死体があちこちに転がっている。リントの町は既に町の原型を留めていなかつたのだ。

「クソツ！好き勝手暴れやがつて…」

「あれえ～？見て見て ヨハン爺。
アレつて白銀の翼の奴等じゃない？」

意氣消沈する白銀の翼の面々の前に一人の魔人が現れる。

「テメエ等かあつ！？」

ゼクスは怒りながら銃口を魔人へと向ける。

「ハハツ 惡いなあ

僕は豪魔邪靈衆の一人 死神ミカエルだよ。」

「同じく豪魔邪靈衆が一人 次元のヨハンじや。」

一人は銃口を向けられながらも動搖することなく 余裕の表情で自己紹介は始めた。

「…やはり豪魔邪靈衆ですか。

死神ミカエルと次元のヨハン？貴方達は全員そのような二つ名が付いているんですか？」

レオが冷静に切り返す。

「違うよ 死神や次元みたいな二つ名は幹部だけが与えられるのさ。

」

「幹部！？

…ちなみにあのジダンという魔人も幹部ですか？」

そのレオの言葉にミカエルは笑みを浮かべる。

「ジダン？あれば幹部のなりそこないだよ。つまり下っ派

」

全員に緊張が走る。

あれだけの力を持っていたジダンが下っ派扱いならば 幹部といふこの二人の実力は規格外ということになるからだ。

なぜかミカエルが辺りをキョロキョロと見回し始める。

「…ちえつー黒い魔剣士はいないのか…
まあいいや。それじゃ早速始めようか…
殺し合いをねつ

「

ミカエルが疾走する。

狙いは銃口を向けるゼクスだ。

手に持つ大鎌を縦横無尽に振り回す。

ゼクスは素早いフットワークで全て紙一重でかわしている。

「へえー お兄さん結構早いんだね。
じゃあスピードアーップ

」

ミカエルの鎌を振るスピードが格段に早くなつた。

凄まじい風切り音が辺りに響き渡る。

流石のゼクスも この速度の猛攻をかわしきることは不可能。
左頬を鎌が僅かにかすめた。

「ちいっー……あー？」

驚くゼクスの瞳に写つた物は攻撃の手を止めるミカエルだった。

「なんだ？この程度の傷で満足なのか？」

……「うつ……」

突然ゼクスが崩れ落ちる。

傷は左頬のかすり傷だけだが 何故か苦悶の表情を浮かべていた。

「ゼクス！どうしました！？」

「な なんだこれは……

体から急に力が抜けた様な感じだ……」

その様子を見てミカエルは楽しげな笑みを浮かべている。

「驚いた？この鎌は魔道具の一つなんだ。

魔鎌ソウルイーターって言うんだよ。

斬ると同時に魂を喰らうのさ。大食いだから氣をつけてね

」

ミカエルは得意気にソウルイーターを回している。

「かすっただけで このダメージかよ……」

ゼクスの言つように かすっただけでも相当な魂を喰われている。つまり この魔鎌ソウルイーターが直撃すれば魂を全て喰らわれ絶命するということだ。

正に驚異の一撃必殺なのだ。

『サンダー・スピア』

『ロック・ショット』

レオとカイラスの魔法が同時に破裂する。

「わあっ！！」

油断していたミカエルは慌てながらも全ての魔法をかわした。

「ふう～。そつか 魔導師が二人いるんだったね。
遠距離戦は苦手なんだよなあ～。」

ミカエルは面倒臭そうに頭を搔きむしった。

すると傍観していたヨハンが前へと出でてくる。

「ミカエルよ。ワシが手を貸そつ。」

圧倒的な魔力を放出させながら得体の知れない老人魔人ヨハンが参戦するのだった。

第15話 戦死

レオ ゼクス カイラス 3人の前にヨハンが立ちはだかる。

レオとカイラスは警戒して魔力を溜めるが ゼクスはまだソウルライターの魂喰いによつて立ち上がることが出来ないでいた。

「フフフ…

ワシの世界に御招待しよう。」

ヨハンがゆつくりと両腕を広げる。

すると 彼の背後の空間に闇が広がつていく。

「気をつけて下さい！何が来るかわかりませんよ！

カイラス殿はゼクスをお願いします！」

レオが両手をヨハンに向けながら叫ぶ。

指示を受け カイラスはゼクスの前に移動し 魔法障壁を展開させた。

「無駄じやよ。」

不気味な笑みを浮かべながらヨハンは背後の闇へと吸い込まれる様に姿を消していく。

そして その闇が急速に縮まり跡形もなく消え去った。

「消えた！？」

レオは突如姿を消したヨハンを探し 辺りを見回すが何処にも姿が見当たらない。

そんな中ミカエルは動く気配を見せず 楽しげにニヤついている。

「レオ……」

ゼクスが叫び レオが気配を察知して顔を横に向けると そこには先程と同じ闇が広がっていた。

その闇から伸びる一本の腕。

レオに掴みかかるうとするが 間一髪 後方に跳んでそれを避ける。

「ほう……素早いな。
じゃが次はそうはいかんぞ。」

闇の中からはヨハンが顔を覗かせていた。

しかし闇の中に引っ込むと 闇ごと再び消え去る。

「おそらく異空間に姿を消して そこから此方に攻撃をする能力の
様ですね。

二人共！警戒してください！」

相手の攻撃手段が大体理解できたらレオは辺りを警戒し始める。

「ぐわつ！！」

突如背後から聞こえた苦痛の呻きにレオは振り返った。

最悪の展開。

カイラスの背後に広がる闇から伸びる腕が カイラスの背中から胸
を貫き 彼の持つ魔導教典を握っている。

じわじわと広がっていく血のシミ。

カイラスはビクビクと体を痙攣させていく。

傷の位置。大量の出血から心臓を貫いているのがわかる。

唯一治癒魔法が使えたカイラスがやられてしまったのだ。
こうなってしまえばカイラスを救う術は皆無である。

「カイラス殿おおーーー！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶレオ。

しかし助け出そうにもヨハンはカイラスの背後にいる為に迂闊に手を出すことが出来ない。

そのすぐ隣では未だ自由に体を動かすことが出来ないゼクスが悔しそうに歯を噛み締めている。

その口元からは、かなり強く噛み締めた為であろうか…血が滴り落ちていた。

「フフフ…

ワシ等の目的は魔導教典。いやつを狙つのは当たり前じやろつて。」

ヨハンはそう言い放ちながら、手荒く腕を引き抜く。
夥しい鮮血が吹き出し、カイラスは力無くその場に倒れ伏せた。
既に息は無く、ピクリとも動くことは無かつた。

即死の一撃である。

ヨハンは闇の中から出て、手にした魔導教典をチラつかせた。

『ライティング・スター』

レオが怒りの魔法を放つ。

しかし、星形の雷撃はヨハンに辿り着く前に打ち砕かれた。

「おつと 君の相手は僕だよ 」

雷撃を打ち碎いたのはミカエルだ。

普段の冷静沈着なレオならミカエルの接近に気付いた筈だが、怒りで我を忘れてしまっている為に気付くことが出来なかつたのだ。

「どうしてください…

貴方の相手なんか後回しですよ。」

膨大な魔力を溜めながら、凄まじい形相でミカエルを睨み付ける。

「…………なにそれ？

僕を舐めてるのかな？

…………殺すよ？」

更に凄まじい形相でミカエルが睨み返す。

「そこまでだーこの野郎！ー！」

背後からの怒声にミカエルが振り返ると、そこには銃を構えたゼクスが立っていた。

しかし、まだ立つのがやつとの状態だ。

「なに？完全に魂を喰われたいの？」

ミカエルは余裕の笑みを浮かべながらソウルイーターをチラつかせる。

「ヨハン爺！手は出さないでね。」いつらは僕の獲物だよ。」

動き出そうとしたヨハンをミカエルが制止する。

「ミカエルよ。ワシ等の目的は魔導教典じやろ？
もつて守りは飽きた。ワシは先に帰つとるや。」

そう言い残し ヨハンは闇の中へと姿を消していった。

「待て……！」

ヨハンを追おうとしたレオの前にソウルイーターが向けられる。

「だからあ……」

君の相手は僕だつて言つてるだろ……！」

再び開始されるミカエルの怒涛の連撃。レオは細かく避けるのは辞めて、後方に大きく飛び退いた。

「逃がさないよっ！！」

しかしミカエルは素早く追撃に移行する。

ドゥンッ！！

響き渡る銃声。

ミカエルは追撃を中断して背後を振り返り、ゼクスに片手を向けた。

『ダーク・ボム』

回避行動の取れないゼクスに爆撃が直撃する。

枯葉の様に吹き飛ばされたゼクスはそのまま地面へと落ちていった。

「ゼクス！

貴様あつ！！

更に怒りのボルテージが上がっていくレオ。

『サンダー・ボルト』

冷静さを欠いたレオは手当たり次第に魔法を放っていく。

しかし そんな攻撃がミカエルに通用する筈はなく 放たれた魔法は瓦礫を碎き地面を抉り 虚しく消滅していく。

「がっかりだなあ
もう少し楽しめると思ったのに…
もういいや。死んじゃえ」

高速で移動したミカエルはレオに向かいソウルイーターを振り上げる。

しかし振り下ろす直前 黒き炎がミカエルとレオの間に割つて入る様に広がった。

黒い炎の魔力に驚異を覚えたミカエルは即座に後方へ跳び 態勢を整える。

「Jの炎は…」

見覚えのある黒い炎にレオは我に返り 後ろを振り返った。

そこには黒いローブに身を包み 漆黒の大剣を手にした男。白銀の翼最強の戦士ジャガーンが立っていた。

先程の黒い炎は彼の持つ魔剣ダークエンペラーの炎だつたのだ。

「ジャガーンさん…

すみません。カイラス殿が殺され 魔導教典も奪われました…」

レオは悔しそうに現在の状況を報告する。

「そつか…

だが まだお前等が無事でよかつた。

お前はゼクスの元へ移動して守れ。

「こいつは俺が始末する。」

ジャガーンはそう告げながらダークエンペラーをミカエルへと構えた。

突然の乱入者に困惑したミカエルだったがジャガーンの出で立ちを見て表情を変えていく。

「……あつー！」

もしかして黒い魔剣士だね！？会いたかったよ 」

ミカエルは瞳を輝かせながら 嬉しそうにソウルイーターを掲げた。

「ジャガンさん！ 気をつけてください！」

奴は子供の様な姿ですけど豪魔邪靈衆の幹部の一人です！ それに奴の持つ鎌は魂を喰らう魔道具です！ かすり傷でも致命的になりますよ！」

レオの忠告にジャガンは無言で頷いて応えると ゆっくりミカエルとの距離を縮めていく。

対するミカエルもジャガンのダークエンペラーを警戒して迂闊に飛び込みはせず ゆっくりと距離を縮める。

一步 また一步とじわじわ縮まっていく距離。しかしここで痺れを切らしたミカエルが飛び ウルイーターの射程内に捉えた。

高く上げたソウルイーターがジャガンの首元へ振り下ろされる。

「受けろ！ ダークエンペラー！ ！」

漆黒の刀身から放たれた黒き炎がソウルイーターの刃を受け止める。

ミカエルは驚き ジャガンから距離を取りうとするが それよりも

速く間合いを詰めたジャガンがダークエンペラーを振り抜く。

飛び散る黒い鮮血。

間一髪直撃を避けたミカエルだったが 腹を大きく斬り裂かれていた。

「くっ…！」

やっぱ強いんだ。ワクワクしてきたよ 「

一瞬顔を歪めたミカエルだったが すぐに笑顔になり戦闘態勢に戻る。

「完全に捕らえたと思つたが…

流石に一筋縄ではいかない様だな。」

ミカエルを圧倒したかに見えたが ジャガンはミカエルがまだ本気を出していないことに気付いていた。

「凄く楽しいよ

君も楽しいだろ？」

闘いの興奮からか 笑顔ではあるがミカエルの表情からは狂氣が滲み出していた。

力の無い者なら この表情を見ただけで失神していたことだらう。

今のミカエルはそれだけ殺意を放つて いるのだ。

「…狂つて いるな。

魔人とはお前の様な奴ばかりか？」

ジャガーンは強い眼差しでミカエルを睨み付けながらダークエンペラーオを構えた。

「…逆に人間はそんなつまんない奴ばかりなのつ！？」

再び一瞬で間合いを詰めたミカエルがソウルイーターを豪快に振り回す。

一見闇雲に振り回している様に見えるがその動作に無駄は無く的確にジャガーンの急所を狙っていた。

しかし一方のジャガーンも無駄の無い動きで全ての攻撃をかわして防いでいる。 剣

激しい攻防。

両者一步も譲らぬ闘いが続いていたが ここでミカエルがソウルイーターをダークエンペラーに強く叩きつけ その反動で後ろに後退した。

「こんなのはどうかな！？」

『アシッド・レイン』

ミカエルが詠唱すると 上空から赤紫色の雨が降りだす。

赤紫の雨が落ちた箇所がショワードと曰て煙りを出しながら溶けだしていく。

「ちつ・酸の雨か…」

退避しようとしたジャガンドが赤紫の雨の範囲はかなり広く容易に逃れることが出来ない。

「ハハッ 逃げるのは無理だよー。
溶けて無くなっちゃえ 」

ミカエルはそんなジャガンドの様子を傍観しながら無邪気に笑っている。

ここでジャガンドはアシッド・レインを避けるのを諦め その場に立ち止まつた。

「諦めるの? 潔く死ぬんだね 」

ジャガンに焦つた様子は見えないが、次第に身につけているローブが溶けていく。

このままじつとしていれば体が溶けるのも時間の問題だらう。

暫く立ち止まつていたジャガンだつたが、ソレでダークエンペラーを天に掲げた。

すると刀身から放たれていた黒き炎が一気に燃え上がる。

上空から降つていた赤紫の雨はジャガンに触れることなく全て蒸発していく。

黒き炎の熱気によるものだ。

「す、」「す、」いや

君は最高だよ……」

技を防がれたにも関わらずミカエルは満面の笑みを浮かべながら喜んでいた。

興奮するミカエルの背後に突如黒い闇が広がる。

「やはりまだ遊んでおつたか……」

その闇の中から老人魔人ヨハンが現れた。

「ジャガーンさん！奴も幹部です！
くそっ！戻ってきたのか！！」

ゼクスの元まで駆けつけていたレオが叫ぶ。

流石のジャガーンといえど幹部一人を相手にするのは危険である。

「あれ？ヨハン爺 なんで戻つて来たの？」

突然のヨハンの登場にミカエルは呆気に取られた表情をしていた。

「閣下に連れ戻す様に言われたのじや。

帰るぞ。長居は無用じや。」

「えー！今から楽しくなるとこだつたのにー！」

ヨハンは駄々をこねるミカエルの腕を取り自身の闇へと引きずり込んだ。

「そうそう。白銀の翼の諸君。

我が主が魔導教典のテスト使用に君達を選んだ。
首を洗つて待つておれ。」

そつ言い残しヨハンとミカエルは闇と共に姿を消していった。

ジャガンは深追いはせずにダークエンペラーを背中に納めた。今の状況を考えればジャガン一人で幹部一人を相手にするより、後日万全の態勢で迎え撃つたほうが賢明だ。冷静で的確な判断である。

この日白銀の翼の一員カイラスが戦死。魔導教典も奪われる結果となつた。

後日カイラスの葬儀が行われ、白銀の翼の面々は悲しみにくれたのだった。

豪魔邪靈衆が再び襲撃に現れるということでバルボアは暫く他の依頼を受けずに態勢を整えることを決定した。

ロイがいつ戻るかは分からぬ。

そのロイの穴を埋める為、ジャガンが参戦することも決まった。

白銀の翼と豪魔邪靈衆の闘いはクライマックスを迎へようとしている。

第16話 剣聖シバ

飛燕山頂上付近

霧がかつた視界の中 ロイとシュバルツは頂上を目標して歩いていた。

シュバルツの案内の元 飛燕山にたどり着いたのはいいが 剣聖シバが飛燕山のどこにいるかは分からず ロイの提案でとりあえず頂上を目指すことになったのだ。

その理由は「男なら高い所が好きだろ」というじょうもない理由であつた。

「おっしゃつと頂上が見えてきたぞシュバルツ！」

ロイは意気揚々とシュバルツに語りかけた。

「小僧…

頂上マデ歩カセテ モシ誰モイナケレバ ドウスルツモリダ？」

疲労の見えるシュバルツはロイを冷たい目で睨み付けている。

流石のロイも それに気付き 田が泳ぎだす。

「だ 大丈夫だ。

男なら絶対頂上だつて！」

「ダカラソレハ ドウイウ理屈ナノダ！」

そんな口論を続けながら歩き 気付けば頂上へと到達していた。

道中木々や草が颯爽と生い茂つていたが この場所はパラパラと生えていただけで明らかに人為的によるものだつた。

目を凝らして奥の方を見つめると そこには小さな木造の小屋が建つているのがわかる。

「ほり見ろー絶対あそこに住んでるよー」

ロイはそう叫ぶと一目散に小屋へと駆け出した。

小屋に近づくにつれ 扉の前に人影があることにロイは気付く。

「おーい！アンタがシバか？」

人影はロイに気がつくと ゆっくり振り返つた。

「……んあ？」

俺がシバだけぢへ。お前さん達は誰だ？」

黒髪のボサボサした みすぼらしく出で立つ。
口には煙草をくわえている。

どう見ても英雄王や剣聖といつ名は相応しくない男であった。

「……おい シュバルツ！」

本当に「コイツが剣聖シバかな？」

「イヤ…

我モ姿ヲ見タコトハナイ。ナントモ言エンナ…
ダガ オーラハマルテロダ。」

ロイヒシュバルツは剣聖シバを名乗る男を尻目に 小声で相談を始める。

「… 本当にアソタが剣聖シバなんだな？」

「だから そりだつて言つてるでしょ、つが。
なんなんだお前等は？」

シバは疑いの眼差しで見つめるロイに苛立ち 頭を搔きむしむ。

「よおしーじゃあ俺と勝負だ！」

ロイは大剣を引き抜き 戰闘態勢に入る。

「おいおい。ガキがそんな危ない物振り回すんじゃないよ。
これでいいだろ？これで？」

シバは足元に落ちていた木の棒を拾い上げ 目の前でチラつかせた。
それに腹を立てたのはロイだ。

「！」の野郎：

舐めやがって！本物の剣聖シバなら俺の剣を止めてみやがれ！」

怒りに震えながらロイは叫んだ。

「待テ小僧！」

「奴 オーラハ〇ダガ 剥リニ無サスギル。
目ノ前ニイルノニ氣配ヲ感ジ取リ難イ感覚ダ。
ドンナヒ弱ナ人間デモ多少ハオーラガアルハズダガ…
コノ男…タダ者デハナイゾ。」

シユバルツが警戒するが ロイは既に戦闘態勢万全であった。

「関係ねえ！ブツタ斬る！！」

黒い閃光となつて疾走するロイ。

だがしかし シバは動搖することなく立つたままの状態だ。

一瞬でシバの眼前まで迫つたロイは大剣を振り上げ 淫身の一撃を振り下ろす。

「…なんて雑な剣だ。」

そう呟きながら シバは必要最低限の少しの動きだけで大剣を避け手にした棒をロイの大剣にあてがつた。

「おわつっ！－！？」

シバが剣にあてた棒をぐるりと回すと そのまま同時にロイの体も宙に舞つたのだ。

地面に強く背中を打ち付けたロイは 何が起こつたのか理解出来ずキヨトンとした表情を浮かべていた。

「今のはマグレだろーもつこつちよー！」

その後 ロイは何度も何度も挑み続けたが 結果は全て先程と同じ様に地面に転がされ続けたのだった。

「ハアハア…

アンタ…やっぱ本物のシバなんだな。」

「だから最初から そうだと聞いたでしょうが！
失礼な奴だな！」

息を切らしながら よつやく疑いを止めたロイにシバは機嫌を悪くする。

「俺の剣はどうだった？」

シバに恐る恐る問いかけるロイ。

「……剛の剣と柔の剣は知ってるだろ？」

剛の剣は力任せに豪快に全てを叩き斬る剣。

一方の柔の剣は攻撃を捌き 受け流し 相手のペースを乱す剣だ。

俺が使ったのは柔の剣。

そしてお前は明らかに剛の剣だ。

剛の剣と柔の剣…“ひかりを扱う剣士が最高の剣士と聞へるが如ひへ。”

質問に質問で返すシバ。

ロイは暫く考え込む。

「…………やつや剛の剣だと思ひながら…
アンタの剣に負けたから柔の剣だる?」

「ブブー…答へは両方使いこなせる剣士だよ。」

シバの言い方にロイは明らかな苛立つを見せてくる。

「柔の剣で捌き 隙を作り…
剛の剣で全てをブッタ斬る!
これこそが最高の剣士像でしょ。」

苛立つロイを他所にシバはしつと話を続けた。

一見ふざけてる様な物言いだが話している内容は正論であった。

「で? そんなことより 君達は誰よ?」

「俺は傭兵ギルド 白銀の翼のロイ・ストライド。」

こつちは友達の銀狼シユバルツだ。

出会い系からかなりの時間が経過してようやく名乗る口。端から見ればかなり無礼な話である。

「俺になんか用？」

「…アンタに剣を教わりたい。」

「それは弟子にしてくれってことかい？」

11

「 で、弟子とかそんなんになるつもりはない！
ただ剣を教わりたいだけだ。」

「……世間じやそれを師弟関係つて言うんだと思つたど。」

ロイはシバの剣の腕は認めているが、内心「こんなふざけた奴の弟子にはなりたくない」という思いがあつて、ぎこちないやり取りが続いていた。

「それはもうと

「なんで君達の髪は白いんだい？」

シバはロイとシユバルツに交互に視線を送り 小さな疑問を口にした。

「……それは俺が種の者だからだ。ちなみにこいつのシユバルツは魔食者の狼だ。

種の者と魔食者は色素の抜けた髪色になるんだよ。」

ロイの言葉に終始無表情だったシバが驚きの表情を見せる。

「種の者と魔食者…

話しには聞いたことがあったが まさかこんな感じで同時に挾めるとはな…」

「……で！？」

「俺に剣は教えてくれるのか！？」

苛立ちを見せるロイにシバは無言になつた。

「……ん～～～

……まあ いいよ。

「そのかわり俺のことは師匠と呼べ。」

「だから弟子とかそんなんじゃねえってー。」

頑固者のロイは未だ弟子になるといふことを認めない。

「じゃあ教えないけど?」

あつけらかんと答えるシバにロイは顔を歪めた。

「…わかつたよ!」

師匠つて呼んだらいいんだろ!…?」

やつと折れたロイだつたが 明らかに人に教わる態度ではない。
しかしシバにそれを気にする素振りは見られなかつた。

「お前 種の者なら戦闘能力向上の技が使えんだろう?
それ使って もう一回かかるつて来な。」

シバは驚くべき提案を出してきた。

彼の言う戦闘能力向上の技とはおそらく黒いオーラのことであらう。

「バカ言つな!」

あれは相当危険なんだぞ!…?手合わせで使う様なもんじゃねえんだ

！」

ロイはシバの無謀と思える提案に呆れ返る。
後ろでシユバルツも同意見なのか 頷いていた。

「大丈夫大丈夫。
次はこれ使うし。」

そう言ってシバは小屋の前のボックスから一本の大剣を取り出した。

ロイの持つ両刃の大剣とは違い 日本刀の様な形状をしているが極端に刃の部分が巨大な大剣。

どちらかと言えばバルボアの持つ巨大な肉切り包丁に近い。

「妖刀力…」

異様な氣を放つ その大剣を見てシユバルツが呟く。

「ご名答。

これは妖刀 百鬼爪刃。（ひやつきそうじん）
その昔 百体のオーガを斬り伏せ その魂をこの刀に封じ込めたら
言われる呪われた一品さ。」

「妖刀…

初めて見たけど すげえ威圧感だな…」

ロイは百鬼爪刃を眺めながら生睡を飲み込んだ。

「そりゃ百体のオーガが封じ込められてるからな。」

シバは軽く答えていたが本来 妖刀は持ち主の命を喰らい精神を喰らい その力を發揮する剣とされている。

こうしている間にもシバの身体を蝕んでいたはずだが この男には一切の変化が見られない。

尋常ではない精神力の高さが伺える。

「ほれ。力を使え。」

シバはストレッチをしながら余裕の表情でロイを誘う。
単純 単細胞のロイがこの挑発に乗らない筈がない。

「どうなつても知らねえぞ…。」

激しく放出される黒いオーラ。

その禍々しさはシバの余裕の表情を変えていく。

（ほう…こいつはたまげた。手を抜くと死ぬな。
しかし、この違和感は…）

「いくぜっ！」

漆黒の閃光となつて間合いを一気に詰める。

剩りのスピードにシバは一瞬ギョッとなつたがロイの一撃を 体を捻つて紙一重で避けると 突きの態勢をとつた。

「ぼうりゅうそうはげん
葬龍葬破劍一式！」

牙突！（がとつ）」

シバの繰り出した突きは普通の突きではない。
只でさえ凄まじいスピード 威力の突きだが それに加え剣に回転
が加わっていたのだ。

それによつて威力は桁違いに跳ね上がつてゐる。

「ぐつ……ーー！」

間一髪 大剣で防いだロイだが 激しい衝撃音と共に苦痛の表情と呻きを漏らす。

黒いオーラの強化能力を持つてしても このシバの技を防ぎきる

とが出来ない。

呆氣なく後方に吹き飛ばされたロイは激しく地面に転がつた。

「う~ん…

力 スピードはかなりのものだけど技術がないね。
けど逆に言えば技術を身につければ君は化けるよ。」

既に長距離の移動 激しい戦闘で疲労しきつて黒いオーラが消えて
いるロイに向かって言葉を投げ掛ける。

「ところで その黒いオーラはバトルオーラに近い感じだね。
禍々しさと能力は比べものにならないけど。」

「バトルオーラ?」

聞き慣れない言葉にロイは首を傾げた。

「バトルオーラってのは近接戦を得意とする魔導師が身体能力を上げる為に使う魔法のことさ。

オーラの色は使用者の適性属性によつて変わる。

炎なら赤 水なら青 雷なら黄という様にね。

君の黒いオーラは属性闇つてところかな。」

シバの言葉にロイは田の色を変える。

「ここは この力を自由自在に扱う方法はあるのか！？」

「バトルオーラは俺の専門じゃないからな…
ギルドのメンバーに魔導師ぐらいいるでしょ？ その仲間に聞いたほう
うがいいよ。

それと君… 魔力を抑えてるのはわざとかい？」

「…えつ…？」

ロイ自信は全力で魔力を放出させ すぐに魔力切れを起こすと思つ
ていた訳だから全く意味が分からぬ言葉だった。

「… その様子を見ると知らず知らずの内か。

さつき違和感を感じてね。君の中には膨大な魔力を感じるけど 何
かストップバーの様な物が掛かつて 全部が出しきれてないよ。」

シバの口から聞かれる衝撃の事実。

これが真実ならロイの力は圧倒的に跳ね上がる」とは間違いないの
である。

シバから衝撃の事実を知らされたロイは呆気に取られた表情をしていた。

しかし次第に瞳が輝きだし 満面の笑みを浮かべる。

「じゃあ俺はもっと強くなれるんだなー!?」

卷之三

「 けどかなり伸びると思つよ。」

ロイの刺りの満面の笑みに シバも笑みを溢しながら答えた。

「……けど そのストッパーってどうやって外すんだ?」

「そりだねえ

じゃあまず魔力のコントロールの修行から入ろうか。」

גָּמְעָן

俄然やる気になつたロイは力強く返事を返す。

いるようだ。

「とりあえず今日はもう休みな。

明日から開始しよう。

小屋にソファがあるからそこで休むといい。」

「了解！師匠！？」

ロイの単純ぶりには もつ何も言葉は出ない。

「機嫌なロイが小屋の中に入つていいくが 銀狼シユバルツはじつと
留まり シバに視線を向けていた。

「ん？君も休んだらどうだい？」

シユバルツの視線に気付いたシバが声をかけるが それでもシユバルツはじつと動かないままであった。

「…シバ殿。

何故 突然ノ要求ヲ受ケル氣ニナツタノダ？」

用心深い銀狼は その黄金の眼差しをシバに向け 口を開いた。

その言葉を聞いたシバは困った表情を浮かべながら頭を搔きむしる。

「やれやれ……信用ないな。

ぶつちやけ退屈だからという理由もあるよ。

ここで静かに暮らすのはいいんだけど一人だと結構退屈ですね。

……それとあの口ひつて子から不思議な力を感じたんだ。
少しあの子を見てみたくなった……そんな感じかな？」

そのシバの答えにシユバルツは笑みを浮かべた。

「成ル程ナ。

ソレナラバ納得ダ。我モアノ小僧ニハ注目シテイル。
奴ノ潜在能力ニハ計リ知レヌ物ガアルカラナ。」

「ああ。不思議な青年だよ。

これで疑いも晴れて休む気になつたかい？」

「アア。休マセテ頂コウ。」

律義な銀狼は深く頭を下げてから小屋へと入つていった。

辺りは既に暗くなり 静かな夜が更けてゆく。

翌日…

まだ日が登り始めた早朝に何者かの話し声で目を覚ますロイ。

小屋の中は簡単な調理場とテーブルと椅子 ベッド一つにソファが一つ置かれているだけの質素な狭い空間だが、辺りを見回してもシバの姿は無く、傍らにシユバルツが眠っているだけであった。

しかし、確かに話し声が聞こえる。

シユバルツは相当疲労していたのか、声には気付かず眠り続けていた。

「…外か？」

よく聞くと、その話し声が外から聞こえてくることに気付いたロイは、扉に近づき、耳をすませた。

『フンッ…まさか、面倒臭がりの貴様が弟子を取るとはな。』

「俺も年取っちゃったのかなあ…」

あの子の成長が凄く楽しみなんだよね。』

聞こえてきた声は片方はシバのものだが、もう一方は異様な声をしていた。

邪悪さを感じるが一方でどこか神秘的な雰囲気も感じられる。頭に直接響く様な声で明らかに人間の声帯とは別なものだ。

『…しかし あの小僧。

育て方を間違えれば危険な存在に成りかねんぞ。

その辺は分かっているんだろうな?』

「勿論だよ。

俺が教えるんだから そんな間違いは決して犯さない。
彼は立派な戦士になるはずや。」

『フツ…

何を根拠にそんな自信が出てくるんだか。
まあ精々気をつけるんだな。』

「御忠告有り難うよ。」

会話が終わったのを見計らい ロイはゆっくりと扉を開けた。

しかし そこにはシバの姿しかなく 異様な声の主の姿と気配は微塵も感じられなかった。

「あれ? もう起きたの?」

「…今 誰かと話してなかつたか？」

ロイの存在に気付いたシバに問い合わせるが シバは特に気にする様子もなく口を開いた。

「ああ…

ちょっと古くからのお友人と話してたんだ。
もう行っちゃつたけどね。またいずれ紹介するよ。
それより 折角起きたんだから朝食前に少し修行するかい？」

「ああーさつと強くなつて早く、ギルドに戻りたい！
頼むぜー！」

「…わかった。始めようか。」

ロイの決意の眼差しを受けたシバは微笑みで返した。

「それじゃあ 先ずは魔力のコントロールからだ。」

「昨日言つてた魔力のストップバーつてやつだな。
でもどうやって外すんだ？」

ロイの質問にシバは真剣な顔つきになりながら ロイの胸に手を押し当てる。

「俺は剣術専門なんでね。正直言つて魔力のコントロールは専門外さ。

だからとりあえず俺の魔力を君に流し込み 無理矢理ストップバーを外す。

手荒い方法だが 君はぶつつけ本番で力を発揮するタイプの様だからね。

後は君次第だ。精神を集中させて魔力を上手くコントロールをせらんだ。」

シバの眼差しから緊張感が伝わってくる。

危険な賭けであることはロイにも理解が出来た。

膨大な魔力を抑え切れずに暴走すれば肉体が朽ち果てる可能性も考えられる。

「…頼む…！」

ロイの決意に満ちた返答にシバは頷くと 胸に押し当てる手から一気に魔力を流し込んでいく。

「ぐつ…！」

シバの魔力がストッパーを外し ロイの中に眠る膨大な魔力を呼び覚ます。

凄まじい勢いでロイの体から膨大な魔力が噴出していく。

その魔力に反応してか ロイの意識とは別に黒いオーラが発動する。放たれた膨大な魔力と黒いオーラはミシミシと音をたて ロイの体を蝕んでいく。

このままではロイの体が朽ちるのは時間の問題である。

「ロイ！ 落ち着いて！
精神を集中させるんだ！」

身の危険を感じ ロイから離れたシバが声をかける。

ロイは精神を集中させるが魔力は一向に収まる気配を見せず どんどん放出されていく。

「何事ダ！？ 一体何ラシテイル！？」

強大な魔力を感じ シュバルツが勢いよく小屋から飛び出して来た。その目に写つたのは膨大な魔力に焼かれ 皮膚がボロボロになり身体中から血が吹き出しているロイの姿だった。

「シバ殿！コレハドウイウコトダー！？」

シユバルツは怒りを露に喉を鳴らしながらシバを睨み付ける。

しかしシバは気に止める様子もなく ただロイを見つめ続けていた。

「手荒い方法だが、彼には理屈で説明するより体で覚えた方が早いだろ？」「

「シカシ！コノママデハ魔力ニ飲マレ 肉体ガ崩壊シテシマウゾ！」

「君はロイの表情が見えないのか？あの決意に満ちた表情を！必死にコントロールしようとしている顔を！！

彼がこの方法を選んで後悔しているように見えるかい！？」

シバは急に声を荒げ シユバルツに叫んだ。

まだ出会って間もないシバだが彼は誰よりもロイを理解し ロイの気持ちを汲んでこの方法を実行したのだ。

「危なくなつたら俺が止めるよ。
今はロイの好きにさせてやるわ。」「

「…………承知シタ。」

シバは言葉を失っていたシユバルツに声をかけ シユバルツはそれを承諾した。

ロイは未だ魔力をコントロール出来る様子はなく 膨大な魔力にその身を焦がされ続けていた。

苦痛の呻きをあげながら耐えるロイ。

しかし諦めようとせずに ひたすらに精神を集中させていく。

「…………！見ろ…………！」

シバが叫ぶ。

先程まで四方八方に暴れ狂うかの様に放出されていた魔力と黒いオーラが 徐々に纏まりを見せ始めていた。

ロイが魔力をコントロールし始めているのだ。

「コノ短時間デ アノ魔力ヲ コントロールシ始メタダト！？」

「ああ……

正直驚きだよ。」

シバとシユバルツは共に驚愕し ロイに釘付けになっていた。

その間にもロイは凄まじいスピードで魔力をコントロールしていく。

そして遂に…

溢れ出していた魔力を抑え込み ロイは魔力の放出を自らの意思で止めて見せたのだった。

「いやあ～お見事。

まさかこの1回でコントロール出来るとはね。」

「ハアハア…

すっげえ疲れた。

……あれ？あれだけすっげえ魔力出したのに魔力切れになつてねえな。

「

「そりやストッパーを外した訳だからね。

君は元々膨大な魔力を持つっていたんだよ。

……ただ 何故ストッパーみたいな物が掛かっていたのかは理解しておるべきだよ。」

見当もつかない言葉にロイは疑問符を浮かべる。
その表情を見て シバは呆れた様に微笑んだ。

「その顔は分かつてないようだな。

人間の体の構造つてのは凄くてね…

今は万全の状態だったから なんとか抑え込むことが出来たけど
もし体を酷使した状態でストップバーを外せば たちまち膨大な魔力
に飲み込まれ 体が崩壊していた筈だよ。

だから君の体は無意識の内にストップバーを掛けていたという訳さ。

「……てことは無闇に外すのは危険つてことか。」

ロイは生睡を飲み込む。

「そうだね。

強大な力には それ相応の代償が必要だということだ。
さて ちょっと最初からやり過ぎちゃったね。
朝食がてら休憩に入ろうか。」

ロイ シュバルツ シバの3人は小屋へと戻り 暫しの休息へと入
つた。

豪魔邪靈衆の根城

「如何ですか閣下？」

「ヨハンか…

うむ。魔導教典を使いこなすには もう少し時間が掛かりそうだ。」

老魔人ヨハンの問いかけに 首領のゲオルグが魔導教典をチラつかせながら答える。

「それで？幹部は皆 捩つたのか？」

「はい。幹部4名。全員集まっています。いつでも出撃可能ですぞ。」

「よし。

「こいつを使いこなせ次第 出撃する。」

「御意で御座います。」

ヨハンは深々と頭を下げながら闇の中へと消えていく。

豪魔邪靈衆と白銀の翼の対決は刻一刻と迫ってきていたのだった。

暫しの休息を終えたロイ達は再び外に出て 修行を再開しようとしていた。

ロイの魔力に焼かれた傷は 黒いオーラが共に発動したこともあり
種の者特有の異常な治癒能力で ほぼ完治していたのだった。

「さあ お次は本題の剣術の修行だ。

先ずは剛の剣と柔の剣 両方使いこなせる様にするぞ。」

シバはそう言って 一本の木刀を取り出し 片方をロイに向かって
投げた。

「こいつで修行すんのか？」

ロイは木刀を受け取りながら不満そうな表情をしている。

「真剣でやつたら 体が幾つあっても足りないでしょうが。」

シバは呆れながら 木刀を正面に構えた。

「ほれ。手本を見せるから打つて来い。」

「了解……」

ロイは素早く移動すると 真正面からシバに向けて 木刀を振り下

ろした。

「先ずは受け流す。」

シバは木刀で受け止めると そのまま剣圧には逆らわずに体と木刀を ロイの木刀に合わせて移動し 受け流す。

「そして振り払う！」

更に木刀をロイの木刀の上側にクルッと回すと 素早く振り払う。剛の剣による 漚身の一撃を放つたロイは 態勢を崩して前のめりになるが なんとか踏ん張り 転倒だけは避けた。

「どうだ？コツは掴んだか？」

シバは意地の悪い笑みを浮かべる。

「うへん…

何と無く分かった。」「

「何つづ……？」

「冗談のつもりで言つたシバは驚くしかなかつた。

柔の剣は一度見ただけでコツを掴める様な代物ではないのだ。

「さあ！ 今度は俺の番だろ？」

ロイは自信ありげに木刀を構える。

「…よし…いくぞ…」

今度はシバがロイの真正面から木刀を振り下ろす。

ロイはその一撃を木刀で受け止め 同じ様に剣圧に逆らわずに木刀と体を動かし 受け流しにかかる。

「…」

しかし ロイの木刀は弾かれ 後方へ弾き飛ばされていく。

「あれ！？」

「やつぱ駄目か…」

肩を落とし落ち込むロイ。

だが そんなロイをシバは驚きの表情で見つめていた。

「……こや。

形は出来ていた。

まさか本当に あの一回でコツを掴んだとは…」

シバはロイの格闘センスのズバ抜けた高さに驚かされるばかりである。

白銀の翼の強大な戦力として帰還することは
まず間違いないであ
り。

第18話 激突

飛燕山 修行2日目

「よおし! 昨日の調子なら今日ここでも柔の剣を扱える様になるだろ! 始めるぞ!」

シバが意氣揚々と話す中 ロイは何故かニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「どうした? 頭でも打つたか?」

「打つてねえよ!
へへ… 昨日の夜はずっとイメージトレーニングしてたから 自信あ
んだよ。」

ロイは嬉しそうにニヤニヤしている。

「どうか。

じゃあ その成果を見せてみな!」

勢いよく飛び出したシバは 昨日と同じ様に ロイの真正面から木刀を振り下ろした。

その刹那 ドンという乾いた音が辺りに響き渡る。

「あつや～」

そこには 地面に大の字で倒れ 田を丸くしながら天を眺めるシバの姿があった。

ロイが一瞬の早業で柔の剣による捌きを行なつたのだ。

最早 柔の剣を扱える様になつたといつレベルではなく たつたの1日で完全に自分の物にしてしまつたのである。
いくら馬鹿正直な真正面からの攻撃であつたにしても これまでの早業をこなせる剣士は早々いない。

「やつたぜ！…どうだよ師匠！？」

なかなか綺麗に決まつただろー？」

「…………お前 今まで誰かに剣を教わつたことは？」

「は？ないけど？」

「成る程。

自己流でのレベルまで到達していたのか…

なら 成長の早さも納得だ。

君 剣の才能あるよ。」

シバは笑みを浮かべながら頭を搔きむしる。

その言葉を聞いて ロイはかなり嬉しそうな表情をしていた。

「さてと…

一応剛の剣もやっときますか。」

シバはゆっくりと立ち上がりながら 服に着いた砂埃を取り払う。

「なんでだ？俺は元々剛の剣の使い手なんだろ？」

「まあ形は出来るんだけど 君は剣を腕だけで振りすぎなんだよね。

ただの腕力だよりの剣撃だと宝の持ち腐れさ。

剣を振る時に重要なのは腰と足の踏み込みだ。」

困惑するロイに優しく語りかける。

確かにシバの言つている事は正しいが ロイは腕力任せの剣でもかなりの威力を誇つている。

これがシバの言つ正しい剣の振り方を習得すれば その威力は倍以

上にハネ上がる」ことだらう。

「よし 先ずは手本からだ。」

シバが木刀を振り上げる。

ただ振り上げただけだが その動きにはどこか優雅さが漂っていた。
これが剣を極めた男 剣聖シバである。

「剣を振る時は腰を落として重心を下げるんだ。

これで体重の乗った重い一撃が放てる。

そして踏み込み。剣を振り下ろす瞬間に力強く地面を蹴る感じだ。

シバは説明を交えながら 木刀を振って見せる。

その太刀筋は木刀ながら迫力のあるもので 空気を切り裂き 漆ま
じい風切り音が響き渡る。

「どうだい？君なら これはすぐに出来るんじゃないかな？」

「重心を低く…
重心を低く…」

既にロイは凄まじい集中力を發揮し 今の動きを自分のものにしようとしていた。

۱۹۷۰-

「 いけそ うだ ! 打ち込ん で も いい か ? 」

「ある。こいつでもどうぞ。」

ロイとシバが木刀を同時に構える。

暫しの静寂。

一人の集中力が砕き潰されていく

深く息を吸い込む口イ。

「フツ！」

息を吐くと同時にロイは力強く地面を蹴りだした。

一瞬でシバの懷に飛び込むと 重心を低く構え 木刀を高く振り上げた。

（アーティスト… ！）

シバはその一瞬でロイの繰り出す剣撃の凄まじさを悟った。

木刀を振り下ろすと同時に足を踏み込み 全体重を剣撃に乗せる。

パカーン！！

乾いた鈍い音が飛燕山に響き渡り 木靈する。

ロイの木刀とシバの木刀がぶつかった瞬間 両方の木刀が木つ端微塵に弾け飛んだのだ。

「おつとつと…」

剣圧に圧されたシバは口口口と後退る。

「おお…ビックリした…」

ロイは手で握っていた部分以外 木つ端微塵に弾け飛んだ木刀眺めて驚きの表情を浮かべていた。

「いや～まさかここまで凄いとは。

ただ 今までのは全て真正面からの馬鹿正直な攻撃だつたからね。実戦ではこう上手くいかないから油断しちゃ駄目だよ。後は実戦で腕を磨くことだ。」

「ああ わかった！」

「それじゃあ今までの応用編をお済いするか！
ロイーどこからでも掛かつて来い！」

その後ジバとの実戦練習をみっちりと続け 修行2日目が終了した。

豪魔邪靈衆 根城

元々廃墟と化した街だったが まるで核爆発が起こったかの様な惨状が広がっていた。

散乱する瓦礫。

跡形も無く吹き飛んだ建物。

立ち上る硝煙。

そんな中に一人の魔人が堂々と立っている。

辺りは惨劇が広がっているが その魔人の立つ場所だけが地面の原型を留めていた。

「ククク…

遂にやつたぞ。凄まじい力だ。」

その魔人は豪魔邪靈衆の首領ゲオルグであった。

その片手には邪悪な光を放つ魔導教典が握られている。

「ほう…少しばかり魔導教典を使いこなせる様になつた様だな。」

「誰だつ！？」

部下の物とは異なる 只ならぬ魔力にゲオルグが身構える。

その眼前に姿を現したのは黒ずくめの服に黒いマントを身に付けた黒髪長髪の魔人。

かつてロイと一戦交えた強力な魔人ガルハイトであった。

「貴様：

一体なんの用だ？」

ゲオルグは好戦的な眼で睨み付け 敵意を剥き出しにしている。
しかし 一方のガルハイトは不敵な笑みを浮かべ 余裕の表情をしていた。

「白銀の翼と抗争しているそうだな。」

「貴様が何故 下等な人間のギルドを知つている…？」

ガルハイトの口から放たれた言葉にゲオルグは驚愕の表情を浮かべる。

ガルハイトは魔人界でも名の知れた最強の魔人であった。
そんなガルハイトがいっいち人間のギルドの存在を覚えていることが理解出来なかつたのだ。

「…そのギルドには我が目を付けた小僧がいてな。
種の者の剣士なのだが知つてゐるか？」

「種の者の剣士？」
「…ああ、ジダンを倒したとかいう小僧か。
フツ！あれは駄目だ。内の三下と好戦してゐるようでは、他かが知
れている。」

ゲオルグはガルハイトを馬鹿にする様に鼻で笑うが、それにガルハイトは笑みで返す。

「クク…

あの小僧の真の力を見抜けていないとは、貴様も三下ではないのか
？」

「…なんだと？俺に喧嘩を売つてゐるのか？
この魔導教典があれば貴様を葬ることも出来るのだぞ？」

その言葉にガルハイトの顔色が変わる。

爆発的に放たれる魔力。

その凄まじさは ただ魔力を放出しているだけにも関わらず 周囲の空間が歪み 瓦礫が木つ端微塵に吹き飛ばされていく程の物だ。

「何か言ったか…？」

そう呟くガルハイトの瞳から放たれる視線は強大な殺意そのもの。流石のゲオルグも その凄まじい殺意に言葉を失い 息を飲んだ。

「…まあいい。

精々不様に負けない様にするんだな。」

そう言い残し ガルハイトは立ち去るうと背中を向ける。

「いいのか？ その お気に入りの小僧を俺が殺してしまつても。」

その言葉を聞いたガルハイトは足を止めて振り返る。
その顔には不敵な笑みを浮かべていた。

「それはそれで、その程度の小僧だったということだ。
好きにするがいい。」

ガルハイトは闇の中に消えていく。

残されたゲオルグの表情には怒りの色が見える。

「……舐めやがって。

ヨハン！ いるか！？」

ゲオルグが叫ぶと闇の空間が広がり、老魔人ヨハンが姿を現した。

「……」

「すぐに出撃の準備をしろ！ 明朝に再び神秘の森周辺の町村を襲撃して、奴等を誘き出す！」

ゲオルグの命令に、待つてましたと言わんばかりにヨハンはニヤリと笑みを浮かべた。

「御意に。」

明朝、白銀の翼と豪魔邪靈衆の激突が開始されようとしていた。

翌日 正午。

白銀の翼 アジト。

いつ訪れるか分からぬ襲撃に備えて 白銀の翼のメンバーは広間に集結していた。

そんな広間に慌ただしくバルボアが駆け込む。

「来たぞ！！」

その一言で広間に集結していたジャガン レオ ゼクスの3名が鋭い目付きになり立ち上がる。

「数は どのくらいです？」

レオの質問にバルボアは顔を俯かせた。
そして 静かに口を開く。

「およそ500の魔物と魔人の軍勢だ。」

「500ですか..

それは骨が折れますね。」

遂に豪魔邪靈衆が軍を率いて仕掛けて来たのだった。

現在 白銀の翼は総勢4名。

対する豪魔邪靈衆は500の軍勢を率いている。

誰の目から見ても無謀と思われる戦闘。

自ら命を捨てに行く様なものが、白銀の翼の面々は誰一人として臆していない。

むしろ、この無謀な戦いに勝利することを全員が考えていたのだ。
その時…
扉を叩く音が室内に響き渡る。
その音の出所に目を向けると、それは白銀の翼アジトの玄関口の扉
であった。

「誰だ？」「こんなとき」「..？」

バルボアが渋々と扉を開ける。

「あつ！アンタは！？」

扉の向こうの見知った顔にゼクスは声を出した。

「久しぶりだな。」

鎧に身を包み 背中には大きな盾と剣を背負つた壮年の騎士。

かつて帝都付近の洞窟で魔物討伐任務を共に行動した帝都親衛騎士団 団長のレオナルドであつた。

「なんでアンタがここに?」

「君達が豪魔邪靈衆の一団と一緒に戦交えるといつ情報を耳にしてな。討伐任務の時には世話になつたから 微力ながら助太刀に參上した次第だ。」

そう言つてレオナルドは後方を指差した。

遙か後方にズラリと整列した騎士達が見える。その数はおよそ200名以上はいるだろう。

「……ハハッ。
アンタ結構律義なんだな。
助かるぜ。」

ゼクスは呆然と騎士団の姿を見つめた後 レオナルドに感謝の言葉を告げた。

「帝都の騎士団の方ですかい。

ご助力は心から感謝するが 相手は500の軍勢。かなりの被害が出ると思われるが 宜しいんで?」

バルボアは申し訳なさそうに口を開く。

しかしレオナルドの表情が変化することはなかつた。

「事前に入つた情報で相手が500の軍勢だということは分かっている。

ここに集まつたのは覚悟ある物達です。

その心配は必要ない。」

その決意に満ちた瞳で バルボアはレオナルドの気持ちを理解する。

帝都親衛騎士団の援軍を有り難く承諾し レオナルドと堅い握手を交わしたのだった。

その後 豪魔邪靈衆の襲撃する街に出発。

数時間後 到着した一行は目の前に広がる光景に息を飲んだ。

かつて街であつたはずのその場所は一面に広がる火の海と化していた。

そして その火の向こう側には不気味に蠢く魔物達の姿が見える。

「バルボア殿。 どうする?」

沈黙をレオナルドが破つた。

「豪魔邪靈衆には恐ろしく強力な幹部がいる。おそらくは軍勢の後方に待機しているだろ? その幹部共は俺達が相手をする。だから帝都親衛騎士団には極力俺達の疲労が少ない状態で幹部の所まで到達出来る様にサポートしてもらいたい。」

「分かつた。

雑魚共は我等が蹴散らしそう。」

作戦を練つていた その時…

1体の魔物 ヘルハウンドがこちらに気付いた。

「アオオオオオオーン!-!」

高らかな遠吠えが開戦の合図となる。

その鳴き声に気付いた魔物の集団が一斉に白銀の翼と帝都親衛騎士

団に突撃を開始する。

「陣形を組め！」

レオナルドの号令で帝都親衛騎士団は素早く白銀の翼のメンバーの前方に集結する。

見事なまでに統率された騎士達。

レオナルドの号令一つで一瞬にして統率された動きを見せ 強固な陣形を組み立てた。

日頃の努力により為せる技であろう。

帝都親衛騎士団と豪魔邪靈衆の第一陣が激しく激突する。

響き渡る金属音。

飛び交う喚声。

舞い散る赤と黒の血飛沫。

「怯むなあ！押せーーー！」

レオナルドの号令と共に帝都親衛騎士団の前線が押し上がる。

ファーストコンタクトは帝都親衛騎士団が優勢。

騎士達の圧力にに怯み 魔物達はどんどん圧され始める。

「レオ！仕上げにかかる！」

「了解……」

バルボアの指示でレオは魔法の詠唱を始める。

『ライティング・ボルト』

放たれるレオの魔法。

激しい雷鳴が轟き 後退する魔物の軍勢を一掃した。

「ふう……

今ので何体くらいでしょ?」

「そうだな……

およそ100体ぐらいだろ。全体の2割はいったはずだ。
だが本陣に進むにつれ 魔物共の強さも上がってくるだろ。
気を引き締めて行こう。」

白銀の翼と帝都親衛騎士団の連合軍は進軍を開始する。

バルボアの言ひ様に敵の強さは段々と上がっていくことが予想され
るが 連合軍の損害は微量な物であり 上々の滑り出しが予想され

「前方に魔物の軍勢を発見！
数は先程の3倍はいるようです！…」

数メートル移動した時 前方の騎士が叫んだ。

そこには下級から上級ランクの魔物の姿がウロウロ見える。

「中盤を固めてきたか…

「弓隊！構えろ！…」

レオナルドの号令で騎士団の弓隊が一斉に弓を構える。

魔物の軍勢は勢いよく押し寄せて来ていた。
その足踏みで大地が震える程の勢いだ。

「まだだ…まだ引き付ける！…」

発射の合図はまだ出さない。

「奴等は中盤で戦力と体力を奪つてから 主力で一網打尽にするつもりだな。」

ジャガンは冷静に戦況の分析を始めていた。

この豪魔邪靈衆の戦術は正攻法と言える。

絶大な効果を發揮するだろう。

その間にも魔物の軍勢は連合軍の眼前にまで迫っていた。

「放てえええ！！！」

凄まじい風切り音と共に一斉に放たれる矢。
そのまま弧を描いて魔物共を次々に貫いていく。

「今だ！ 腹するな！

突撃！！！！！」

雄叫びと共に突撃する騎士達。

相手は3倍の数を要するが動搖することなく 斬り込んでいく。

「マスター。

流石にここは我々も斬り込むべきだろ？

敵の思う壺だが 助太刀に来てくれた騎士団を犠牲にする訳にもいくまい。」

「… そうだな。

全員気合いを入れろ！！！」

ジャガーンの提案を承諾したバルボアは渴を入れる。

「突撃――――！」

白銀の翼の面々も帝都親衛騎士団に加わり参戦する。

4人だけとは言え圧倒的な戦力を誇る白銀の翼の加入によつて敵の数は徐々にではあるが減つてきていた。

しかし数では圧倒されているのと 上級の魔物の存在もあり 騎士達は次から次へと命を奪われていった。

この中盤での戦闘は時間にして 2時間にも及んだ。
辛くも勝利した連合軍だが帝都親衛騎士団の被害は甚大な物だった。

連合軍VS豪魔邪靈衆

残り兵力

連合軍 およそ40

豪魔邪靈衆 およそ130

圧倒的 不利に変わりはなかつた。

白銀の翼 帝都親衛騎士団の連合軍と豪魔邪靈衆の戦いは長く続き既に一夜が明けていた。

「レオナルド殿。

負傷者の治療は済みましたか？」

レオが騎士達に指示を出していたレオナルドに話しかける。
連合軍はかなりの疲労とダメージを負つて 休息に入っていたのだ。

「ああ。 なんとか治療は済んだが戦線に復帰することは叶いそうにないな。」

「そうですか…

すみません。手助けしてもらつたうえに大きな被害まで出させてしまつて…
しつかり休ませてあげて下さい。」

「いいんだよ！俺達は進んで この戦に参加したんだ。
それより敵はまだ動きやつにないのか？」

レオナルドの問いかけにレオは視線を敵の軍勢が構える方へと向け

る。

「ええ。

向こうも準備しているのか 余裕を見せているのかはわかりません
が 今のところ動く気配はないです。」

それを聞いたレオナルドは少し安心した表情を見せた。

「 そうか…

…あの青年がいれば戦局は変わっていたかもしかんがなあ。」

「あの青年? ロイの」とですか?」

「そうだ。

彼は修行中らしいな。

襲撃がもう少し遅ければ…」

それを聞いたレオの表情が緩む。

「… そうですね。」

彼には不思議な力がありますから。」

「ギャアアアアアー！」

一人の騎士の断末魔の叫びが静寂を破る。

「何事だ！？」

「あ あれは！？」

レオナルドとレオが振り向いた先には
見覚えのある憎き魔人の姿があった。
忘れてくても忘れられない

「次元のヨハン…」

腕で騎士の体を貫いているヨハンを睨み付けるレオ。

「む？ ああ貴様か…
また会えて嬉しいぞ。」

ヨハンは不気味な笑みを浮かべながら貫いた騎士を放り投げた。

異変に気付いた連合軍のメンバーが続々と集まり ヨハンを取り囲む。

「ほう。

歓迎されるとゆうじやな。」

「逆だよジジイ。

迷惑だからさうさせとくたばれ。」

余裕を見せるヨハンに向け ゼクスが2丁の拳銃を構えた。

「ゼクス！ 気をつけてください！

おそらく 奴の能力は闇の空間を作り出し そこから自在に移動する能力です！」

レオがヨハンの能力を想定し ゼクスに伝えるが ヨハンは不敵に笑みを浮かべていた。

「フフ… それは違う。

闇の空間を作り出し 移動する能力は上位の魔人なら大抵扱える只の移動術じや。

ワシのは特別でな。

どれ 見せてやるつ。」

そう言い残すとヨハンは闇の空間を作り出し そこへ姿を消してい

く。

「いかん！！」

素早く反応したジャガーンが走りだし レオを突き飛ばす。

その刹那 ジャガーンの背後に出現した闇の空間からヨハンの腕が伸び ジャガーンを闇の空間へと引き摺り込んでいった。

それと同時にヨハンがその闇の空間から姿を現し 闇の空間は消え去っていく。

「ジャガーンさん！！」

レオの叫びも虚しく ジャガーンの姿はその場から消え去っていた。

「これがワシの能力。

異次元を作り出し そこに相手を閉じ込める能力じや。

次元のヨハンたる由縁。」

ヨハンは得意気に両手を広げて見せる。

ジャガーンの戦線離脱は連合軍にとって致命的な痛手と言つても過言ではない。

「さあ 次は誰が異次元へ飛ばされたい？」

ヨハンの不気味な笑みに 騎士達は後退る。
ヨハン一人によつて 連合軍の士気は大きく下げられてしまつたのだ。

「フハハハハハ…ハアツ…！」

勝ち誇つた様に笑うヨハンが突然 苦痛の叫び声をあげる。

その胸からは剣の刃が突き出していた。

「な なんじや…？」

ヨハンは振り返り 剣の出所を確認する。

そこには空間に黒いビビが入り そのビビから剣が突き出しているのが見える。

漆黒の刀身。

これは紛れもなくジャガーンの持つ魔剣ダーク・エンペラーであった。

「馬鹿な…？」

ヨハンの叫びと同時に 黒いヒビが更に広がり 空間がガラスの様に砕けると 閻の空間が出現し そこから剣を握るジャガーンが姿を現した。

「この程度の能力で 僕を捕らえたとでも思つたか？

この場から異次元が消滅して 暫く経つて いたなら脱出は不可能だつただろうが この異次元空間はまだ この場所とうつすら繋がつていた。

せめて 気絶させてから閉じ込めるべきだつたな。

異次元だらうが何だらうが俺に斬れない物はないんだよ！」

ジャガーンは背中から胸を貫いていたダーク・エンペラーを振り上げ ヨハンの左肩までを斬り裂いた。

「ぐああああ……！」

大量のどす黒い血を吹き出しながら ヨハンは悲鳴をあげる。

「今だ！ 置み掛けろ……！」

ゼクスが銃を乱射する。

次々にヨハンの体を撃ち抜く銃弾。
反動でヨハンの体はグラリとよろめく。

『サンダー・ボルト』

間髪入れずに放つたレオの魔法がヨハンに直撃する。

勝機を見出だした騎士達が一斉に攻撃を始めようとした瞬間…

「団に乗るな！人間共！！」

『ダーク・ボム』

ヨハンの放つた魔法が周囲に黒い爆炎を巻き起こす。

爆風で吹き飛ばされていく連合軍のメンバー達。

ヨハンは致命的なダメージを受けているにも関わらず まだ自分の足で立っていた。

「くつ…

おのれ…おのれえええ！…！」

傷だらけのヨハンの表情が怒りによつて歪む。

「まだ動けるのか！？」

相手は満身創痍の老魔人だが ジャガーンは油断することなくダーク・エンペラーを構えた。

ほぼ同時にヨハンが再び異次元を作り出し 姿を消す。

「集中して魔力感知を最大限に働かせろ！
来るぞ！！」

ジャガーンの言葉に白銀の翼のメンバーは魔力感知を始める。

「そこだ！！」

ゼクスが真横に銃口を向けると同時に銃弾を放つ。

「ば 馬鹿な！？」

そこには異次元から現れたヨハンの姿があった。
眉間に撃ち抜かれ 驚愕の表情を浮かべている。

「テメエは あの時の俺達しか知らねえから弱いと思つて油断してたんだろ? たんだろ? あの時は油断と仲間を殺された怒りで本当の実力を出ししきれてなかつただけの話だ。

…これが白銀の翼の実力だ! 犀めんじやねえぞ! ! ! 」

「くつ…

申し訳ない 閣下。」

ヨハンはそのまま倒れ 絶命した。

騎士が一名犠牲になつたが 少ない被害で幹部を一人倒せたことは連合軍にとってはかなり大きいことだ。

「そろそろ こちらも動いたほうがいい。

何度も奇襲をかけられれば こちらが不利になるだけだ。」

「… そうだな。

負傷者はここで待機! 動ける者は進軍開始だ! 」

バルボアの提案を承諾し レオナルドは騎士団に号令をかける。

連合軍は最終決戦に向け 進軍を開始したのだった。

「ボス。ヨハン爺が殺られちゃったみたいだよ。」

「ああ。

ヨハンの魔力が消えるのを感じた。
くそ！迂闊だつた！ヨハン 一人で奇襲は成功すると思ったが…
まさか奴等にそれ程の力があつたとは…！！！」

ゲオルグは悔しさと怒りで顔を歪めながら 傍にあつた瓦礫を叩き壊した。

「どうするの？奴等はもつ すぐ傍まで近づいてるよ。」

ミカエルは動搖することなく話を続ける。

「もう遊びは終わりだ！
全力で叩き潰すぞー！」

ゲオルグの言葉に応える様に魔物と魔人の軍勢が雄叫びをあげる。

しかし その雄叫びがすぐに断末魔の叫びへと変わった。

「なんだ！？」

ゲオルグが悲鳴の聞こえた方へ視線を移すと そこには上空から降り注ぐ無数の矢が目に入ってきた。

次々に射ぬかれていく魔物と魔人の軍勢。

「ボス！敵襲です！」

「そんなこと見れば分かる！」

幹部の一人 エリックが報告に現れるが 怒りによつて冷静さを欠いてしまっているゲオルグに突き飛ばされる。

仕返しと言わんばかりの連合軍による遠方からの奇襲攻撃により豪魔邪靈衆の軍勢は混乱に陥つていく。

形勢は一気に逆転しようとしていた。

「あそこか…」

ゲオルグは遠方の連合軍を視界に捉えると魔導教典を開ける。

『ジオ・スタンプ』

激しく光を放つ魔導教典から重力魔法が発動される。

凄まじい轟音と共に地面」と撃し潰される騎士達。

カイテスが使った魔法と同じ物だが威力は桁違いのものであった。

それにより帝都親衛騎士団はほぼ壊滅状態に陥ってしまう。

たつた一つの魔法で再び不利な状況に戻される連合軍。もう残された戦力は白銀の翼だけである。

「今だ！！」

バルボアの号令と共に瓦礫の影から白銀の翼のメンバーが飛び出していく。

騎士団による奇襲攻撃の間を縫つて 白銀の翼のメンバーが岩影に移動し 追い討ちをかける。

これは一段構えの攻撃だったのだ。

虚を突かれた魔物と魔人の兵士達は次々と白銀の翼のメンバーによつて倒されていく。

「ええい！鬱陶しい！
エリック！！」

「はつ！」

「タイム・ストップ！！」

エリックが両手を掲げ 魔力を解き放つと 白銀の翼のメンバーはその場で動きを止められてしまった。

「くつ…！」

まさか こんな能力を持つていたとは…！」

身動き一つ取れない体をなんとか動かそうと試みるレオ。

しかし そんな姿を嘲笑つかの様にエリックが口を開く。

「無駄だ。

俺は時の操者 エリック。

俺の特殊能力は時を自在に操ることが出来る。

よく頑張つた方だが ここで終幕だな。

「ガングブ！」

肥満体型の大柄の魔人を呼び出すエリック。

「ガハハハ！

俺様は怪力無双 ガンブ！

貴様等は この俺様が叩き潰してくれる！」

この魔人も幹部の一人である。

ガンブが魔力を放出させながら力を込めると 弛んだ体がみるみる
内に引き締まつていく。

あつという間にガンブの体は肥満体型から筋肉の塊の様な体へと変
貌していた。

「くつ…！」

「ここまでなのか！？」

流石のジャガンも想定外の能力により 身動き一つ取ることが出来
ないでいた。

その間にも迫つてくるガンブ。

「全員纏めて死にやがれ——！——！」

ガンブが 巨大な腕を振り上げた その時…

一閃の黒き閃光がガンブの隣を通り過ぎた。

「ぎやわわあつ！…！」

ガンブの体は無惨に真つ一つとなり どす黒い血を撒き散らしながら豪快に地面へ転がつた。

瞬き一つの一瞬の早業。

その場にいる誰もが黒き閃光の走つた方へ視線を移す。

そこには白銀の翼が待ち望んだ男の姿があった。

「遅くなっちゃったな。

今戻つたぜ！…！」

修行を終えたロイである。

一瞬にして豪魔邪靈衆の幹部を倒して退けた その力は正に驚異的。

白銀の翼のメンバーは聞かずとも修行の成功を理解したのだった。

「さあ！力を貸してくれよ！百鬼爪刃！！」

ロイの手には剣聖シバが使っていた妖刀 百鬼爪刃が握られていた。
ロイも戻り 白銀の翼と豪魔邪靈衆の戦いは決着を迎えるとして
いた。

第20話 託された力

連合軍 VS 豪魔邪靈衆

現在の残り兵力

連合軍 12

豪魔邪靈衆 74

数的な差は縮まつてはいないが、連合軍は敵の主力である幹部を2名倒していることから善戦していると言つていいだろ？

「おお！ ロイ！」

早かつたな！ 修行の成果はどうだ！？」

「バツチリ！」

バルボアの言葉にロイは満面の笑みで答えた。

「それは妖刀ですよね？」

また貴方は物騒な力ばかり手に入れて…」

続いてレオが呆れ顔で百鬼爪刃を見つめながら心配そうに言葉を投げ掛ける。

「大丈夫だ！」

もう黒いオーラもこの妖刀も使いこなしてみせるよ！」

口イのその今までと違つ
解する。
自信に満ち溢れた表情と言葉でレオは理

彼が想像以上に強く
たくましくなって戻ってきたのだと

「… もう心配はいらぬようですね。」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

レオの笑顔にロイも笑顔で応えたのだった。

飛燕山
數時間前：

「トキシ」

今日はいい日でござるか。いい感じになつておたんじやない?」

ପ୍ରମାଣିତ

ずっと俺の負けっぱなしじゃねえか。」「

シバの褒め言葉にロイは少しうて腐れた表情で答える。

何度も実戦形式の手合せを繰り返しているが ロイは未だにシバに一太刀も浴びせることが出来ないでいたのだ。

「そりゃ一応 英雄王だの剣聖だの言われてる立場だからね。

2田3田の修行で簡単に負けちゃつたら 格好つかないでしょ。」

最もな意見であるが 極端に負けず嫌いのロイにひとつでは かなりの悔しさを感じずにはいられなかつた。

「… それはそうと お友達のワンちゃんの姿が見えないけど どこか行つたのかい？」

シバは辺りを見回しながらロイに尋ねるが 当のロイも辺りを見回している。

「もういや いねえな。
どこ行つたんだろ？」

二人がキヨロキヨロしていた その時…

疾風の如き速さでシユバルツが茂みから飛び出してきた。

「大変ダゾ！」

町ニ情報ヲ集メニ 降リテイタンダガ 数日前 白銀ノ翼ト豪魔邪
靈衆ガ激突シテ ソノ時ニ カイラス殿ガ殺サレテ 魔導教典ガ奪ワ
レタラシイ！！」

珍しくかなり慌てた様子で話すシユバルツ。

「なんだって！？」

じいさんが殺された……？」

ロイはショックを隠しきれないでいた。
自分の不在の最中の悲劇。
そして悲しみは怒りへと変わっていく。

「ソシテ今日マタ 豪魔邪靈衆ガ町ヲ襲撃シテ 白銀ノ翼ガ迎エ擊
ツソウダ。
…ドウスル？」

シユバルツはロイの行動を待っていた。

そんな中 沈黙していたシバが口を開く。

「ロイ。

行つてこい！修行は終わった様なもんだ。

後は実戦で腕を磨け。」

シバの その言葉でロイの闘志は燃え上がる。

「わかった！」

色々世話になつたな師匠！ また来るよ！」

「……あつー・ひよつと待つた！」

素早く出発しようとしたロイを シバは慌てて引き止める。

「なんだよ？」

「これを君に授けよ。つ。
持つて行くといい。」

そう言ってシバが手渡した物は妖刀 百鬼爪刃であった。

「これは…
いいのかよ？」

「ああ。

この妖刀も君なら使いこなせると想つ。
それとも「つーつ…」

シバは右手を掲げる。

「来い！レムナント！…！」

掲げた右手の上に突如 激しい光を放ちながら 高エネルギーの
収集体が発生する。

その眩い光でロイが一瞬目を奪われた間に シバの右手には一本の
剣が握られていた。

「…その剣は魔剣？」

「そうだ。

魔剣レムナント。

この前 僕が小屋の外で話していた相手がコイツだ。」

「そうか…

…は？？？？」

淡々と話すシバの言葉にロイは耳を疑つた。

「剣と話すつて なんかの病氣かアンタ。
そんなわけ…」

『おい！貴様！
どうこいつもりだ？我をこの小僧に渡すだと？』

「……」

まさかの剣から発せられた声にロイは驚愕の表情を浮かべている。
だがしかし この声は確かに あの時聞いた異様な声であった。
それに感じ取れる魔力もあの時のものだ。

「… な なんだよ その剣！？」

「だから魔剣レムナントだつて言つてゐるでしょ？
魔界には魔物や魔道具みたいな人間には考えられない不思議な物が
いっぱいあるんだ。
喋る剣があつても不思議じやないでしょ。」

『ええい！そんなことはどうでもいい！

『どうこいつらもりかと聞いているんだ！』

一人の会話に割つて入るレムナント。

「どうこいつらもりもなにも 聞いたままの意味だよ。
彼なら君を十分に扱える筈だ。」

それに彼の中には膨大な魔力が眠つていて。

君にとつても悪い話しじゃないと思うけど？」

『そんなことを言つて 危険払いしたいだけではないのか？』

「ああ それもある。」

『貴様つ……』

剣と会話をする 異様な光景にロイは呆然と立ち尽くしていた。

『……まあいい。』

貴様といても もつ戦に出ることもないからな。』

「交渉成立だね。」

ロイー彼は魔力を食らつて力を發揮する剣なんだ。だから『える魔

力が大きければ大きい程 憎まじい力を発動させる。
仲良くするんだよ。

…よし！それじゃあ契約を始めようか。」

「契約？？？」

聞き慣れない言葉にロイは疑問符を浮かべる。

『この人間界には召喚師と呼ばれる 魔物を召喚できる人間がいる
だろ？』

其奴等は特定の魔物と契約を交わすことによって その魔物を召喚
出来る様になるのだ。

それと同様に我と貴様で契約を交わし 貴様が好きな場所で我を
召喚という形で呼ぶことが出来る様にする契約だ。
まあ出てきてやるのは我的気が向いた時だけだがな。』

「そういうこと。

今は俺とレムナントが契約を結んでいるけど その契約者を君に変
えるんだよ。』

レムナントとジバが説明をするが ロイはあまり理解出来ておらず
首を傾げていた。

『さつさとしろ小僧！

『我は暇ではないのだ……』

「いや、すこい暇でしょ？」

『貴様つ……』

次々に決められていく話に流石のロイも困惑していた。

「まあ、契約と言つても難しく考へることはないよ。

レムナントが契約の為の魔力を解放するから、その時に『我 汝と契約を結ぶ』って言うだけさ。」

「……わ わかった。
始めてくれ。」

あまり理解は仕切れていなかつたが、やり方がわかつたロイはとりあえず、それを承諾したのだった。

『では始めるぞ小僧。』

レムナントが契約の為の魔力を解放し、剣全体から眩い光が放たれる。

「我 汝と契約を結ぶ。」

その言葉を呴いた瞬間 ロイとレムナントの間に紋章の様な光が放たれ レムナントの姿が消えた。

「……ん?」これでいいのか?」

ロイは自分の体を探りながらシバに問いかける。

「うん。契約成立だよ。」

シバは満足気な表情で答えるが 全くの変化を感じられないロイは煮え切らない表情をしている。

『これからは我を存分に満足させりよ~小僧。』

「……」

急に頭の中で響く声に驚くロイ。

『フハハ！驚いたか！

私は今 魔界から貴様の脳内に語りかけておるのだ！
契約すればこんな芸当も可能になる！』

「え…なんか面倒くせえ…」

『貴様つ！！！！！』

決戦の地 現在

ロイの登場で戦局は傾くかと思われたが未だに時の操者 エリック
の能力によつて 白銀の翼のメンバーの動きは止められたままであ
つた。

実質動けるのはロイ一人ということになる。

「くく…

俺の能力を解除しないかぎり他の奴等は身動き一つ取ることは出来
ないぞ。

それとも貴様一人で我等を相手にするつもりか？』

エリックは勝ち誇った様に笑みを浮かべている。

「流石に一人じゃきついか…」

能力の解除方法が分からぬ以上 この状況を変える方法は見つか
らない。

「ロイ！この能力を解除するには奴の魔力を打ち消すしかない。
奴から皆に放たれている魔力の軌道を見極め こちらも魔力を含
だ攻撃をぶつけるんだ。」

突然かけられた声に振り向くと そこには何事もなかつたかの様に
動くジャガーンの姿があつた。

その手に持つ魔剣ダーク・エンペラーからは漆黒の炎が燃え上がつ
ている。

「ジャガーンさん！？
なんで？？」

「馬鹿な！？なぜ貴様だけ動ける！？」

ロイとエリックは同じ疑問をジャガーンへとぶつけた。

「この魔剣ダーク・エンペラーの炎は全てを燃やす。
例えそれが魔力であろうと燃やすことは可能だ。」

体の動きを止められても魔力を放つぐらいのことは出来る。

だが、それには貴様に感づかれない様にする必要があつたが、ロイが現れたことによつて、貴様の意識はロイへと移つた。

隙が出来たので行動に移つたまでのこと。」

エリックに、ダーク・エンペラーを向けながら、そう言い放つジャガーン。

エリックは苦虫を噛み潰した様な表情になつていぐ。

「燃やせ！ ダーク・エンペラー…！」

ダーク・エンペラーの刀身から漆黒の炎が散乱していく。

「有り難う御座います。

これでよつやく動けますよ。」

「ふう〜。

じつとしては、性に合わねえ。」

「よおしー、反撃開始だー！」

ダーク・エンペラーの炎によつてエリックから放たれていた魔力が燃え尽くされた。

これによりレオ ゼクス バルボアと全員の体が解放されたのだ。

「おお！君はあの時の青年！

遂に来たのか！」

戦場に突然 身体中に細かい傷を作ったレオナルドが現れる。
あの魔導教典から放たれた魔法を辛くも逃れて姿を現したのだ。

「レオナルド殿！

帝都親衛騎士団は奇襲攻撃の後 撤退する約束だつたはず…なぜここに！？」

バルボアが驚いた表情でレオナルドに叫んだ。

「部下達は撤退させた。

だが帝都親衛騎士団 団長の維持だ。ここは参戦させてもらうぞ。」

そう言い レオナルドは剣と盾を構える。

「ちいっ！虫ケラ共が！

何人集まろうが同じ事…ここで全員死ね…！」

「待てっ！！」

攻撃を始めようとしたエリックをゲオルグが制す。

「あの剣士小僧…

ガルハイトのお気に入りは俺の獲物だ！」

ゲオルグの言葉にロイが反応する。

「ガルハイト…

お前 あいつの知り合いなのか？

居場所は知つてんのか！？」

「クク…

興味津々だな。

知つていたらどうする？」の俺を倒して吐かせるか？」

「ああ そうさせてもうう！」

みんな！コイツは俺にやらせてくれ！！」

ロイは百鬼爪刃を構え 臨戦態勢に入る。

「じゃあ 黒い魔剣士は僕の獲物だよ 」

続いてミカエルがジャガンの前に立ちはだかる。

「…いいだろ？。

決着をつけようか。」

ジャガンもダーク・エンペラーを構えた。

「やれやれ…

二人共 勝手に話を進めますね。
仕方ない。残りの魔物と あのエリックという幹部は私達で倒しま
しょう。」

レオ バルボア レオナルドの3人がエリックと魔物の軍勢を迎
え撃つ。

最終決戦の火蓋は切つて落とされたのだつた。

レオ&バルボア&レオナルドVSエリック&魔物の軍勢

「俺と この数の魔物をたつた3人で相手にするとは…

舐められたものだな。

行け！兵士共！！！」

エリックの号令に呼応し 魔物の軍勢が雄叫びをあげながら3人に突撃を開始する。

「二人共！あのエリックという魔人の能力は厄介だ！
軍勢相手に少々酷だが 纏めて食らわない様に散るぞ！」

「了解！」

バルボアの作戦を承諾し 3人は散り散りに移動を開始していく。

『ライトニング・ボルト』

前方の魔人の集団に向けてレオが魔法を放つ。

放たれた凄まじい落雷が魔人の集団を一瞬で黒ずみに変えた。

「よし！いい調子です。」

しかし 流石に数が多い。

レオはすぐに魔物の集団に四方を囲まれてしまった。

数的にいくと一人頭20体以上は倒さないと軍勢を潰すことは出来ない。

更に後方には幹部のエリックが待ち構えている。
苦しい戦いになることは まず間違いない。

『スパーク』

四方から飛び掛かる魔物を レオの周囲に対流する電撃が防ぐ。

「ふう…

次から次へと 危険ですね。」

レオは足を止めることがなく移動を続ける。

魔法で纏めて多くの敵を倒せる位置を探つているのだ。

一方のバルボアは順調に敵を薙ぎ倒していく。

どんどん前へ前へ進んでいく。

彼の目線の先には奥で構える一人の魔人。

つまり バルボアの狙いは幹部のエリックだ。

「鬱陶しい雑魚共が！」

道を開けろおつ！――！」

凄まじい闘志を剥き出しにバルボアは突き進んでいく。彼の通つた跡は豪快に切り裂かれた魔物の死骸が弾けたポップコーンの如く飛び交っていた。

「……」

エリックまで後少しの距離で急に足を止めるバルボア。その前には巨体の魔物が2体立ち塞がっていたのだ。

上位ランクの魔物 ベヒーモスが2体。

「ちつ！

貴様の番犬つて訳か。」

「さつ今までの勢いはどうした？

単身で俺に向かつて来たのは失敗だつたな。」

エリックは笑みを浮かべて 腕を組みながら余裕の表情をしている。

「ハハハッ！

「この感覚は久しぶりだ！血がたぎる！――」

しかしふルボアは臆することなく、ベヒーモスに対し正面突破を試みる。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

腹の底から地を揺るがす雄叫びをあげながらベヒーモス2体が同時に動く。

1体はバルボアの頭目掛け、もう1体は胴体目掛け、その太い腕を振り下ろす。

「なんのこれしき！」

走り続けながら頭を目掛けた攻撃を上体だけでかわすと、そのまま跳躍し、胴体を狙つた腕に飛び乗り、腕の上を走り抜ける。

「うおおおおおつ！－！」

バルボアは腕の上で更に高く跳躍し、ベヒーモスの頭を巨大な肉切り包丁で叩き割つた。

「ガアアアアーー！」

頭を割られたベヒーモスが苦痛の呻きを漏らす。

これに驚いたのはエリックだった。

「何者だ……？」

「俺は白銀の翼のギルドマスター！バルボア・ヤンクマンだ！
部下達に情けない姿は見せられないんでな！貴様等如きには負けん
ぞ……！」

バルボアは肉切り包丁をエリックに向け 言い放つ。

「グオオオオーー！」

しかし その間に もう一體のベヒーモスがバルボアの背後から襲
いかかる。

バルボアはいち早く反応し 体を捻つて太い腕をかわす。

そのままの勢いでベヒーモスの腕に肉切り包丁を叩き付ける様にぶ
つけた。

大量の血飛沫を撒き散らしながらベヒーモスの腕が半分程まで切り裂かれる。

「わっわと寝てるー。ワンロローー。」

バルボアはベヒーモスの頭部まで跳躍すると 固い拳をベヒーモスの顔面に叩き付けた。

殴られたベヒーモスは脳震盪を起しげ グラリとその巨体をよろめかせ豪快に倒れ込んだ。

「さあ！次はお前だ！」

「いいだろ。

格の違いといつものを見せてやる。」

エリックがゆっくりとバルボアの元へ歩み寄る。

バルボアVSエリック。

強大な戦闘力を持った者同士が激突する。

第21話 漆黒の魔剣士VS死神

対峙する黒き魔剣士 ジャガノと死神 ミカエル。二人が放出する強大な魔力によって 周りの空間がグニャリと歪んで見える。

「ハハツ

今日は全力で相手しようかなあ」

ミカエルは魔鎌ソウルイーターを取り出し 楽しそうに微笑んでいた。

「そうしたほうがいい。

俺は端から遊ぶ気はない。」

ジャガノがゆっくりダーク・エンペラーを構えると 刀身から凄まじい勢いの黒炎が噴き上げられていく。

その光景にミカエルは目を丸くして 口笛を鳴らす。

「最初から そんなに飛ばしちゃうんだ。

仕方ないなあ。流石に僕も本気出さないと黒焦げになっちゃうよ

」

相変わらずの楽しそうな表情ではあるが ソウルイーターを低く構え 膨大な魔力を放出させていることから 彼が本気だということは明白だった。

「それじゃあ いくよ～」

楽しげな声をあげた直後 ミカエルの姿が消える。

ミカエルの立っていた位置に砂埃が舞い上がっていることから 瞬間移動等の特殊能力ではなく 憎まじい速度の光速移動だと判断出来る。

ジャガンは素早く迎撃態勢を取るが それよりも速くミカエルの大鎌がジャガンの左肩を斬り裂いた。

「ぐつ……！」

苦痛の呻きを漏らしながら後退するジャガン。

しかしソウルイーターの効力は斬つた者の魂を喰らうつもの。少しがすつただけでも致命傷となるのだ。

ジャガンは全身の力が抜け バランスを崩して地に転がる。

「アハハッ！」

油断しちゃあ駄目じゃないか

それとも その程度のものだつたのかな?」

ミカエルは満足そうに笑顔を浮かべながらソウルイーターの刃に付着した血を舐め取つた。

「……！」

その刹那 ミカエルの表情が変わる。

「これ…

そうか お兄さんもそうなんだ。」

何かを納得した様に薄気味悪い笑みを浮かべるミカエル。

ジャガンはその光景を無表情で見つめていた。

「…だからどうした?

貴様には関係のないことだつ！…」

強く大地を蹴つて ジャガンは前進する。

その速度は徐々に速まり ジャガンの姿が途中で消えた。

ガキン!!

衝突する金属音。

ジャガンの放った一撃は辛うじてミカエルに防がれる。

「田には田を。歯には歯をだ。」

「へえ~

僕と同じくらい速く動けるんだ。
でも おかしいなあ。少しあはいえソウルイーターに魂を喰われた
筈なのに。」

ミカエルは不思議そうにジャガンを見つめていた。

本来少しでも魂を削られれば暫くは動くことさえ出来ない筈なのだが。
しかしジャガンは動く所がミカエルと同等の光速移動で一撃を放つ
たのだった。

「それだけ もの凄い精神力を持つてるんだね。

流石 僕が見込んだだけのことはあるよ。」

しかし ミカエルは動搖することなく 寧ろ嬉しそうに話す。

近年 稀に見る好敵手。

ミカエルの鼓動は高まっていた。

（強い精神力か…）

フツ…こつちは少しでも気を抜けば意識が飛びそ�だと言ひついに。（

平気なふりを見せているが ジャガンの体はかなりのダメージを負つていたのだつた。

（長期戦に持ち込まれれば 圧倒的に不利になる。
ペース配分を考えず 最初から全力でやらねば 勝機は見出だせないな。）

再び地を蹴つたジャガンは一気に間合いを詰め ミカエルに怒涛の連撃を繰り出す。

「わつ！わつ！

危ないなあ！」

ミカエルはジャガンの素早い連撃に対し ソウルイーターを上手く操つて攻撃を防ぎ続ける。

しかしミカエルも防戦一方という訳ではなかつた。
隙を見つけては お返しとばかりに連撃を繰り出す。

正に一進一退の攻防。

両者一歩も引かない闘いが繰り広げられていた。

「ハッ！」

このままでは埒があかないと悟ったジャガーンは地を蹴り ミカエルから距離を取る。

しかし ミカエルはそれを許さず追撃へと移った。

「せつかく楽しくなつてきたのに止めないでよー。」

尚も手を休めないミカエルの連撃はジャガーンを苦しめていく。

ソウルイーターの一撃を既に喰らつているジャガーンにとつて 次の傷は敗北を意味することになるのだ。

「ダーク・エンペラー！！」

ジャガーンの叫びと共にダーク・エンペラーから黒炎が噴き上がる。

放たれた黒炎がジャガーンの身を包む様に広がり ジャガーンとミカエルの間に壁となつて燃え上がつた。

「熱つ……！」

くそお……邪魔な炎だな！」

凄まじい熱気にミカエルは堪らず距離を取った。

ジャガンがダーク・エンペラーをミカエルに向けると 摆らめく黒炎が動き ミカエルを追撃する。

「ああーもつつーーー！」

苛立ちを見せながら黒炎から逃げるミカエル。
ダーク・エンペラーから放たれた黒炎はまるで龍の様に動き 執拗にミカエルを追い続けた。

「黒爆・龍火閃！」

動き続けた黒炎が突如 爆発を巻き起こす。

広範囲の爆発により 流石のミカエルも避けることが出来ずに爆風に飲み込まれていく。

「ふう……」

爆炎に飲み込まれたミカエルの姿を確認したジャガーンはダーク・エンペラーを下ろし 溜め息をついた。

あの技をまともに喰らって生き延びる者はいない。

…そう思つた矢先のことだつた。

爆風により漂つていた煙幕が一瞬で焼き消されたのだ。

突然の異常事態にジャガーンはダーク・エンペラーを構え直し 警戒する。

「ああ～ビックリした」

煙幕が焼き消された中心部。

そこに爆炎に飲み込まれた筈のミカエルの姿があつた。

ミカエルの周りには球体状の魔法障壁が展開されていた。この術を即座に発動し ジャガーンの技を防いでいたのだ。

「くつ…！」

身構えていたジャガーンはガクツと崩れ 地面に片膝をつける。既に体は限界を越えていた。

「あれれ？もう動けないの？」

折角楽しくなつてきたところのに残念。
仕方ないな。すぐに楽にしてあげるよ。」

邪悪な笑みを浮かべたミカエルはソウルイーターを高く掲げる。

「バイバイ」

『ヘル・フレイム』

仕留めに掛かつたミカエルに対し ジャガンは地獄の業火を撃ち放つ。

しかし寸前の所でミカエルは身を捻つてかわして見せた。

「まだ足搔いてくれるんだ。

でも…

まともに聞えないんじゃ鬱陶しいだけだよ！」

怒りの形相で疾走するミカエル。
ジャガンとの間合いは一瞬で詰められる。

万事休す。

この状態でミカエルの攻撃を防ぐ術は 今のジャガーンには皆無である。

だがジャガーンの瞳はまだ闘志を燃やしていた。

「来い！ケルベロス！！」

ジャガーンが右手を上に掲げると そこに魔方陣が現れ 赤い眩い光を放つ。

ソウルイーターの刃がジャガーンの額に触れるギリギリの所で魔方陣から黒い体の三つ首の犬が現れた。

伝説級の魔物。

地獄の番犬 ケルベロスだ。

ケルベロスは魔方陣から飛び出すと即座に ソウルイーターに食らい付く。

「召喚魔法！？」

危機を感じたミカエルは なんとかケルベロスを振り払い 後方に退避する。

「…まさか そんな隠し玉を持っていたとはね。」

ケルベロスは低く喉を鳴らしながら その巨大で屈強な体でジャガンの周りを守る様に回っている。 その鋭い6つの眼光はミカエルを捕らえていた。

「よくやつた ケルベロス。
すまないが暫く頼むぞ。
俺は回復に専念する。」

そう言つてジャガンは魔力を治癒力に回し 体力と精神力の回復に入る。

託されたケルベロスは 立ち止まり 身を低く構えて防御から攻撃態勢へと移り変わる。

「犬つコロが僕の相手?
ふざけ……！」

ミカエルが話し終える前にケルベロスが突撃する。

ケルベロスの三つの首から剥き出しにされた鋭い牙をミカエルは間一髪 ソウルイーターを横に構えてギリギリの所で止めた。

圧倒的な突進力によつて ミカエルの立つていた地面が抉れ 徐々に押され始めていく。

「くつ…！」

仕付けのなつてない犬だなつ！！」

ミカエルがケルベロスの牙を押さえながら 中央の顔に蹴りを放つた。

蹴られたケルベロスは鮮血を撒き散らしながら 巨体を後方に吹き飛ばされる。

しかし直ぐ様 地面に踏み止まり態勢を整えると 再びミカエルへと突撃していく。

「ぐうつ…！」

その巨体からは想像も出来ないスピードでケルベロスが食らい付く。

流石のミカエルも捌ききれずにケルベロスの左頭部の牙が彼の右脇腹を抉つた。

「ああ！もう…！」

鬱陶しいよ…！」

ミカエルは苛立ちを見せながらケルベロスの左頭部に右手を当てる。

『ダーク・ボム』

ミカエルの放つた爆炎魔法がケルベロスの左頭部を吹き飛ばす。

その衝撃で一瞬 後退つたケルベロスの隙をミカエルが見逃す筈はない。

「スピリッツ・マーチ！！」

異様な光を放つたソウルイーターを振り下ろすと ソウルイーターから無数の光の弾が放たれた。

「ギャインツ！！」

その無数の光の弾を喰らつたケルベロスは呻きを漏らしながら 後方へ飛ばされる。

今度はダメージが大きかったのか 踏み止まればずに地面を豪快に転がつていった。

「なかなかの威力でしょ？」

「これはソウルイーターが食らつた魂を弾丸として放つ技さ。」

得意気に話すミカエル。

生物の魂の重みは計り知れない。
それを弾丸として放つということは威力は想像を絶するものである
う。

ミカエルはケルベロスに止めを刺す為にゅうくじと歩を進めていく。
そこで異変に気付いた。

「どうだ！？」

先程まで座り込んでいたジャガンの姿が消えていたのだ。

ミカエルは辺りを見回すがジャガンの姿はない。

「逃げやがったな！…」

「誰がだ？」

ミカエルの憤怒の表情が驚愕へ変わる。

突如 上空から飛来したジャガンがミカエルにダーク・エンペラー
を振り下ろした。
なんとか身を翻し 避けたミカエルだったが 間に合わずに彼の右

腕が根本から断ち斬られる。

「ぐおっ…一しまつた!!」

ミカエルは右手でソウルイーターを握っていた為に 不様にもソウルイーターは右腕」と地面に転がっていたのだ。

「勝負ありだな。」

ジャガンはダーク・エンペラーの切つ先をミカエルの首に突き付け勝ち名乗りをあげた。

「う…うう…」

今にも泣き出しそうなミカエルの表情にジャガンは困惑した。その顔は子供が泣きべそをかいてる様にしか見えなかつたのだ。

「…ちつ！」

「行け！ 次に悪さをすれば 容赦はしない！」

ジャガンは背中にダーク・エンペラーを収めると そのまま歩き出していく。

残されたミカエルは悔しそうに歯を食い縛りながら自分の右腕とソウルイーターを抱え 静かに闇の空間へと姿を消していったのだった。

ジャガン VS ミカエル
勝者 ジャガン

第22話 修行の成果

連合軍VS豪魔邪靈衆の闘いは最終局面へと突入していた。

群がる魔物と魔人の軍勢の中を上手く攻撃をかわし続けながら走るレオ。

「よしー! とりあえず数を減らしますか。」

レオは胸の前で両手に魔力を込めると そのまま振り返り 魔物が密集している位置に向け 両手を突き出した。

『ライトニング・ボルト』

轟音を唸らせながら レオの雷魔法が上空から魔物と魔人の軍勢へ落とされる。

雷に触れた魔物共は一瞬で黒ずみに変えられていく。

今の攻撃で敵の半数は倒されたであろう。
しかし まだ30体程の敵が残されていた。

一方でバルボアとエリックの一戦は予想外の展開が起っていた。

拮抗する実力ある者同士の長期戦になると思われたが そこには満身創痍でよろめくエリックと 堂々と立っているバルボアの姿があつたのだ。

「ハア ハア：

「バカな！？この俺が一方的に打たれるだと？」

「大層な二つ名の割には その程度かい？幹部さんよ！」

バルボアの顔には余裕の笑みが浮かんでいる。

「貴様： 一体何者なんだ？」

「また同じ質問かよ。

さつきも言つただろ！俺は白銀の翼ギルドマスターのバルボアだ…」

「そんなことは聞いていない！

「これ程の実力を持つた男が只の傭兵ギルドのマスターである筈がない。

「元は名のある武人か何かか？」

バルボアの言葉を遮り エリックは鋭い眼光を向けて口を開いた。
その言葉にバルボアはニヤリと笑みを浮かべる。

「…まあ 減るもんでもねえし 墓土の土産に教えてやるよ。
俺はこの人間界では それ程有名って訳でもねえ。
お前等 魔界の奴等なら聞いたことあるだろ?」

（龍殺し）って名をな。」

「……龍殺しだ…と…!…?」

バルボアの言葉にエリックは目を見開く。

「ドラゴン…

それは古より最強とされてきた 伝説級の魔物である。
凄まじい攻撃力。

ダイヤモンドより硬いとされる皮膚による防御力。
人間には太刀打ち出来ないとされてきた魔物なのだ。

地域によつては神として崇められる程の存在である。

人間界は勿論 魔界でもドラゴンの価値観は伝説級とされていたのだ。

「過去に この人間界にドラゴンが4体現れたことがある。
人知れず行動したことだから事実を知る者は一部しかいないが その内の2体を俺が倒した。」

「魔界では有名な話しだ。

人間がドラゴンを単独で討伐したという事実。しかも 1度ならマグレと済ませた話しだが 2度となると その実力は本物という証。

その男を魔界では龍殺しと呼び 要注意人物として扱われてきた。
…まさか その男が目の前にいるとはな。」

エリックは笑みを浮かべながら俯く。

伝説級の魔物を倒した伝説の人間。

普通の魔人程度なら戦意を失う程の脅威であろう。

普通の魔人程度ならば…

「ハハハッ！！

俺はついてる様だな！まさか こんな所で伝説の男を始末出来ると
は…！」

エリックが高笑いを始める。

その様はまるで勝利を確信したかの様な余裕を見せていた。

「何が可笑しい…

…つつ…！…！？」

バルボアが歩き出そうとしたその時 ある異変に気付く。

体が動かないのだ。

「馬鹿な！？」

能力を発動させる隙は『えなかつた筈！』

「ククク…

自分の体をよく見てみる。」

バルボアはエリックの言葉通り 視線だけを落として体を確認してみる。

しかし 返り血を浴びているぐらいで自らの外傷は見られない。

「…！」

「そうか…この血か…」

「そういうことだ。

俺は自分の血液にも魔力を流している。

つまり 俺の血を浴びれば能力の餌食となる訳だ。

まあ俺が直接魔力を放出している訳ではないから効果が出る迄に時間が掛かるし あまり使い勝手のいいものではないがな。」

エリックは懐から短刀を取り出し 止めを刺す為にバルボアへ歩み寄る。

しかしバルボアに動搖は見られない。

「ふう…

一応保険をかけておいて正解だった。」

バルボアのその言葉にエリックはピタリと足を止め 睨み付ける。

「保険？なんの話しだ？」

「今戦つてる俺の仲間達をよく見てみろよ。」

バルボアの笑みに 怪訝な表情をしながら戦場に目をやるエリック。

「…なつ！？」

一人足りない…あのガンマンか！…？」

「ドンッ！！」

エリックが叫んだ瞬間 銃声が響き渡る。

「気付くのが遅えよ。」

テメエの能力は厄介だから マスターに言われて俺が身を潜めて対応する作戦だつたんだ。

卑怯だなんて言わねえよな？数ではテメエ等のほうが圧倒的優位だつたんだ。

まあテメエは戦う前からマスターに負けてたつてことだな。」

エリックの背後の影からゼクスがゆっくり姿を現した。

その姿を胸の中心部を撃ち抜かれ 大量の出血をしているエリックが睨み付ける。

「く……くそ……

この……俺が……人間如きに……」

エリックはそのまま ゆっくりと倒れて絶命していく。

「危ねえ危ねえ。

助かっただぞ ゼクス。」

エリックが倒れることにより 体の自由を取り戻したバルボアが首を鳴らしながら口を開いた。

「アンタが隙を作ってくれたから 簡単に成功したんだよ。しかし さつきの話しさ驚いたぜ。

アンタの過去の経歴は聞いたことなかったからな。
本当…何者だよ？」

ゼクスの問いにバルボアは鼻で笑いながら顔を俯かせた。

「まあ その話しさ追々する…
それより…」

バルボアは話を切り上げ レオとレオナルドのいる戦場の方に目を配る。

そこには 相変わらず走り回っているレオと 満身創痍になりながらも 1体ずつ確実に敵を倒しているレオナルドの姿があった。

バルボアはレオを視界に捉えると 大きく息を吸い込んだ。

「ぐおらあああ…！」

いつまで遊んでんだ！レオ…！

あの新しい魔法で一掃しちまええ…！…！」

バルボアの馬鹿デカイ声が戦場に響き渡る。

一部の魔物達は攻撃と勘違いして 辺りを警戒している程だ。

「あれはもしもの時の為に残しておきたかったんですが…
魔力の消費がかなりのものなので1発しか撃てませんよ？」

「つべこべ言うな！」

後は口イを信じるんだ！！

さつさと終わらせりまえ！！」

納得がいかないレオを他所にバルボアはマスターとして命令を下す。

「…了解です。

レオナルド殿！すぐに退避してください！一気に片付きます！！」

渋々 承諾したレオは魔力を溜めながらレオナルドに指示を飛ばした。

状況を理解したレオナルドは前方の魔物を蹴り飛ばすと 直ぐ様レオの方へ駆け出す。

魔物共はレオナルドを逃がすまいと追撃を試みようとしたが辺りの一変した空氣に その足を止める。

その空氣はレオの魔力の強大さによるものであった。

溜められた魔力が空氣を振動させ 大地を揺るがす。レオは残りの魔力を全て注ぎ込んでいるのだ。

「なんと膨大な力だ…！」

魔力を使つた戦闘法を持ち合わさないレオナルドでも分かる程の強大な魔力。

レオの両手の間には今にも弾け飛びそうな程にバチバチと音をたてて雷属性の魔力が集合していた。

レオはレオナルドが射程から外れたのを確認すると 上空へ向けその雷属性の魔力の集合体を解き放つた。

『ライトニング・ヘヴン』

魔物の軍勢は位置がバラけていたが そんなことはお構い無しに軍勢を全て射程に收め 上空から無数の雷が降り注ぐ。そして止めどばかりに1筋の太すぎる雷が砲弾の如く飛来する。

ズドオオオオオオオンンン！――――――

耳鳴りを起こす程の凄まじい轟音が轟き 魔物の軍勢の姿は跡形も無く消し飛んでいった。

残されたものは地面にある 焦げた巨大な穴だけであつた。

バルボア&レオ&ゼクス&レオナルドVSエリック&魔物の軍勢
勝者 バルボア&レオ&ゼクス&レオナルド

ロイヽヽゲオルグ

対峙する二人の間に激しく火花が散るかの如く睨み合つ両者。

「いくぜ！クソ魔人！」

「さつさと来い！クソ人間！」

攻撃を開始したのは ほぼ同時。

ロイは百鬼爪刃を ガルハイトは腰に下げていた剣を互いに振り下ろし 刃と刃が激しく衝突する。

その衝突音は鼓膜を刺激し 軽い耳鳴りが発生していく。

「つおおおおおお！－！－！」

「シャアアアアアア－！－！」

両者は耳鳴り等全く気にする様子もなく 連続で激しく剣をぶつけ合つ。

刃と刃の衝突によって 火花が大量に飛び散り この戦闘の激しさを物語る。

拮抗した闘いだが 両者はそれぞれ隠し玉を所持している。

ロイは魔剣レムナント。

ゲオルグは魔導教典。

この隠し玉の投入タイミング。 使用法が戦局を左右する」という。

「なにっ！？」

長く続いた剣のぶつけ合いから 先に仕掛けたのはロイ。

ゲオルグの振り下ろしを 百鬼爪刃で受け流し 態勢を崩したのだ。
柔よく剛を制す。

ロイは修行の成果を惜しみなく披露した。

「もうつたあ！」

前のめりに態勢を崩したゲオルグの背中に 百鬼爪刃を振り下ろす。

しかし刃が体に触れると思われた刹那 何か見えない衝撃の力で百鬼爪刃が弾かれる。

「なんだ！？」

「バカがつー！」

百鬼爪刃を弾き上げられて がら空きになつたロイの腹に ゲオルグは強烈な蹴りを放つ。

苦悶の表情を浮かべ ロイの体はくの字に折れ曲がりながら後方へ吹き飛ばされ 背後の岩に激しく衝突した。

「今のが俺の特殊能力。
見えない衝撃波。エア・インパクトだ。」

ゲオルグは笑みを浮かべながら ロイが衝突して粉々に碎けた岩の方に視線を移した。

洗練された剣術。
特殊能力 エア・インパクト。
魔導教典。

この多彩で驚異的な戦術を持つたゲオルグを相手にするのは一筋縄ではないかといでのう。

「くつそお……

油断した。けど次はそうはいかねえぞ。」

砕かれた岩を押し退けながらロイがゆっくりと立ち上がる。厄介な能力を見せられたロイだが、その瞳の闘志は更に燃え上がっていた。

「フン！ 見えない力を相手に、どう対処するつもりだ？」

「うるせえっ！」

そんなもん勘でなんとかなる！勘だ！勘！！！」

ロイのその知恵の無さと無鉄砲さにゲオルグの表情が変わる。

「愚かな…
何故 貴様の様な馬鹿なガキにガルハイトが興味を持ったのか理解出来ぬ。」

「苦戦シテイルヨウダナ。
手ヲ貸スカ？」

いつの間にか ロイの背後には巨駆の銀狼の姿があった。

「いらっしゃいよ。

シユバルツはそこで観戦でもしてくれ!』

そう言い放つと同時に ロイは黒いオーラを放出し 黒き閃光となって疾走する。

格段に上がったロイのスピードにゲオルグは目を見開いた。

しかし そう簡単になんとかなる相手でもない。

ロイのスピードに乗った一撃をいつも簡単に剣で防いで見せた。

「特攻か? 馬鹿が考えそつなことだな。」

「馬鹿はテメエだ!」

黒いオーラが形を変形させ ガルハイトへと伸びる。

「ぐつ……」

伸びた黒いオーラは衝撃波となつてゲオルグの顔面を襲つた。

ロイの一撃を防いだ為 両手を塞がれていたゲオルグは その衝撃波をまともに喰らつたのだ。

「俺のは見える衝撃波だったのに 防げなかつたか？」

ロイはニヒルな笑みを浮かべる。

修行の成果によって 黒いオーラも多少は自由に扱うことが出来る様になつていたのだ。

「…もういい。

貴様は一瞬で塵に変えてくれる！！」

怒りで額に血管を浮き上がりさせながら ゲオルグは魔導教典を取り出す。

魔導教典からはドス黒い光が放たれていた。

『おい小僧！ 我を出せ！

あの力は危険だ。手を貸してやうつ。』

ロイの脳裏に声が響く。

魔剣レムナントだ。

「…よし…頼むぞ…

来い！レムナント…！」

ロイは叫びながら手を掲げる。

すると 魔方陣が現れ 黒い光を放つ。

『フフフ…

久方ぶりの戦闘だ。

腕が鳴るわ。』

「お前腕無いじゃん。」

『やがましい！…！…！

ロイの魔剣レムナント。

ゲオルグの魔導教典。

両者の隠し玉 最大の力同士が激突する。

第23話 駆け巡る闘争本能

ロイは魔剣レムナントを正面に構え ゲオルグの出方を窺っている。対するゲオルグは魔導教典に膨大な魔力を注ぎ込み 攻撃開始の最終段階に入ろうとしていたのだった。

「……

すげえ魔力量だな。

おい！アレをなんとか出来んのかよ？」

額に汗を垂らしながらロイはレムナントに視線を送る。

『愚問だな。 我に不可能は無い！

貴様の魔力を我によこすんだ。

その魔力を攻撃エネルギーに変換して我の体に蓄積させる。

後は貴様がそれを放てば 貴様の魔力 + 我の力が合わさった強力な技になる。』

「それを魔導教典の魔法にぶつけて相殺させるつてのか？ 成功するんだろ？』

『愚問だと言つた筈だ。 戯けが！ 四の五の言わず魔力をよこせ！』

偉そうに命令するレムナントにロイはしかめつ面をしながらも 魔力を大量に注ぎ込んでいく。

現時点では魔導教典に対抗する手段は皆無。
となれば、必ずしもレムナントに頼らざるを得ないというわけだ。

『ククク… その調子だ小僧。
力がみなぎつてくるわ。』

ロイの魔力を大量に取り込んだレムナントの刀身は 漆黒の鋭いオーラを放っている。

種の者が放つ 禍々しく揺れ動く黒いオーラとは違つて、鋭く研ぎ澄まされた様な黒いオーラだ。

「貴様も奥の手という訳か。

面白い！力比べといいつじやねえか。」

膨大な魔力を蓄積させていくレムナントを見つめながら ゲオルグは笑みを浮かべた。

「はつ！いいね。
後で吠え面かくなよ。」

ゲオルグの言葉に応えるロイ。

両者はそれぞれの武器に魔力を溜め続ける。

その2つの魔力に辺りの空気が押し潰され 静寂が包み込んでいく。正に嵐の前の静けさだ。

『メテオ・キャノン』

先に動いたのはゲオルグ。

魔導教典から発動させた魔法は上空から巨大な隕石を呼び寄せた。

もし地面に衝突すれば辺り一帯は衝撃で消し飛ばされるだろう。それに備えてか ゲオルグは自信の周りに魔法障壁を展開させていく。

「で でけえ……」

『小僧!!

ボケつとするな! あれに このエネルギーをぶつけろ!』

呆気に取られていたロイをレムナントが一喝する。

我に返ったロイは直ぐ様態勢を整え 巨大隕石に向かってレムナントを振り抜いた。

刀身から放たれる 銳い漆黒のオーラ。
その凄まじい威力はロイの体をも蝕む。

レムナントを握った手は氣を抜けば両腕共 弾き飛ばされそうな程の衝撃。

尚且つ 足もかなり力を込めて踏ん張つていないと 後方へ吹き飛ばされるであろう。

更には全身の皮膚を削り取られそうな程の反動。内蔵を搖るがす衝撃。

この技は正に諸刃の刃である。

刀身から放たれた漆黒の斬撃は凄まじいスピードで巨大隕石へと向かっていく。

「いけええええ！－！」

漆黒の斬撃と巨大隕石が激しく衝突する。

辺りに凄まじい轟音が響き 衝撃波が一帯を吹き飛ばす。

斬撃の衝撃に耐えるのが精一杯だったロイは衝突の衝撃波によつて枯葉の様に吹き飛ばされていく。

一方のゲオルグも魔法障壁は展開させているものの圧倒的な衝撃波に歯を食い縛りながら踏み止まっていた。

一瞬の静寂。

ロイとゲオルグは共に上空に視線を移した。

「…………」

空は何事も無かつたかの様に広がっている。

漆黒の斬撃も巨大隕石も その姿は跡形も無かつた。

「…やつたのか？」

ロイは呆然と立ちつくしている。

『フハハハ！だから言つたであろう。我に不可能は無いとなー』

得意気に高笑いをするレムナント。

状況を理解したロイは安堵の表情を浮かべたのだった。

「馬鹿な…

俺があれ程苦労して習得した魔法を こいつもあっさり相殺させただ
と…」

信じ難い出来事にゲオルグの表情は曇っていた。
しかし その表情からはすぐに戦意が溢れ出す。

「なるほど。

ガルハイトが興味を持つのも少しは理解出来た。
なんとも未知数の力だ。」

そう言いながらゲオルグは魔導教典のページをめくる。

『メテオ・レイン』

次に発動させた魔法は 無数の小隕石を呼び寄せた。

それらの小隕石は雨の如く上空からロイド掛けて降り注ぐ。

「おい！レムナント！

これはどうすりやいい！？」

『.....』

知らん！避ける！』

「なにつ！？」

この無数の小隕石の対処法が浮かばなかつたロイドはレムナントに助けを求めたが レムナントも対処法が浮かばなかつた様だ。

その間にも迫り来る小隕石。

ロイは気持ちを切り替え 回避行動に移る。

右へ左へ華麗に隕石をかわしていくロイ。

落ちた隕石は地面を抉り めり込んでいく。

小隕石とは言え その威力は一つ一つが凄まじい物を持っていた。

当たれば致命傷は確定だ。

それが いつも無数にあると かなり厄介である。

「くつ……！」

隕石に全部はかわしきれねえぞ！なんとかならねえのか レムナン
ト！？」

隕石の雨を避けながらレムナントに叫ぶ。

しかしレムナントは沈黙していた。

「おい！聞いてんのか！？」

『……決めた！

わたくしの技名は黒燕斬と名付けよつ！』

「……

なんの話しだ！バカ野郎！－！

……

レムナントが ようやく口を開いたかと思えば 全く脱線した話しだった。

『ぬつ……！

馬鹿とはなんだ!? 我を愚弄するか!』

「いいから なんとかなんねえのか!/? もうヤベホヤ!-」

ロイは小隕石を避け続けてはいるが 剩りに数が多い。

徐々に小隕石に体をかすめられていたのだった。

ロイの体をかすめた小隕石はロイの肉を削ぎ 赤い鮮血を撒き散らす。

『フン……』の程度で弱音を吐くとは 情けない男だ。

いいだろ? もう一度魔力を込める。

今度はエネルギーを拡散させてやる。

黒燕斬・乱だ!!』

「技名はどうでもいいつづーのつー!」

レムナントは未だに技名に妙なこだわりを持っていたのだった。

「いくぞ！ レムナント！」

『分かつておる！

黒燕斬・乱！』

ロイは魔力を溜めたレムナントを力いっぱい振り抜いた。

すると刀身から無数の小型黒燕斬が放たれる。

小型の拡散タイプの為 黒燕斬程の威力はないが その数は圧倒的。

無数の黒燕斬・乱は小隕石を次々に斬り刻み 破壊していく。

「ハハハハツ！！

これも防ぐか！ 楽しませてくれるなあつ！！」

メテオ・レインを防がれたゲオルグは魔導教典を閉じ 激しい勢いでロイへ疾走する。

「レムナント！

ちょっとここで待つてろーー！」

ロイはレムナントを地面に突き刺し 百鬼爪刃を構えて ゲオルグに真っ向から向かっていった。

『おい！小僧！
我を荷物の様に扱うでない！』

レムナントが叫ぶが ロイは既に遙か彼方へ疾走していた。

両者は間合いに入ると ロイは振り下ろしの一撃。ゲオルグは振り上げの一撃を各々繰り出す。

ガキイーーン！――！

激しい鋼鉄の衝突音。

その凄まじい一撃同士は両者の腕をビリビリッと振動させる。

「死ねいつ――！」

ゲオルグは百鬼爪刃を弾き上げると 体を素早く回転させて横薙ぎの一閃を繰り出した。

しかしロイはその軌道を見極め 間一髪 上体を反らして剣をかわす。

ゲオルグの剣の切つ先はロイの鼻先をかすめていく。

「つまらあああ……」

ロイは弾き上げられた百鬼爪刃をそのままの勢いで振り上げ 一気に
ゲオルグ目掛けて叩き付ける。

ゲオルグの頭部に百鬼爪刃が当たるかと思われた瞬間 見えない衝
撃波が百鬼爪刃を再び弾き上げた。

ゲオルグの特殊能力ニア・インパクトだ。

「しまった！」

「馬鹿がつ！…」

隙だらけのロイに 今度は逆回転の横薙ぎの一閃を繰り出す ゲオ
ルグ。

「なにつ！…」

驚愕の声をあげたのはゲオルグだ。

なんとロイは百鬼爪刃を弾き上げられた反動を利用して その場で
後方宙返りをして 攻撃をかわしたのだ。

そして着地すると同時に力強く地面を蹴つて ゲオルグから距離を取る。

「ふう〜 危ねえ危ねえ。

流石に一筋縄じやいかねえか。』

ロイは深く深呼吸をしながら剣を構え直す。

『小僧！何故我を使わない？』

『だつて お前使つたら2対1みたいで卑怯じやん。』

ロイはレムナントの声に振り返らず 視線をゲオルグに合わせたまま答えた。

『何を甘つちよひこことを むかしてある！生死を掛けた戦闘に綺麗も汚いもあるものか！』

レムナントの罵倒にロイは一ヤコと笑みを浮かべる。

『それに お前つむせえし。』

『ぬつ！！！』

ロイは力強く地を蹴り 再びゲオルグに向かつ。

懐に入り込むまでのコノマのスピード。

黒いオーラの身体能力強化を駆使した早業である。

「はあつ！！」

懐に入り込んだそのままのスピードで百鬼爪刃を振り抜くが それは空しく空を斬る。

凄まじいスピードの攻撃であつたが ゲオルグはそれさえも見切り百鬼爪刃を避けたのだ。

「いいスピードだ。

だが もつと速くなれば俺は斬れんぞ！」

ゲオルグはロイに向かつて拳を打ち付けた。

なんとか その一撃を百鬼爪刃を持つ方とは逆の左腕でガードしたロイだつたが 剰りの威力に左腕が痺れを起こす。

「イッテ！！」

なんつうパンチだよ。」

ロイは左手をパタパタと振りながら楽しげに笑みを浮かべていた。

「クク…

どこまでも面白い小僧だ。
だが、あの五月蠅い魔剣を手放したのは失敗だつたな。」

ゲオルグは邪悪な瞳を輝かせ、再び魔導教典を開けた。

『ジオ・スタンプ』

魔導教典から黒い光が放たれ、魔法が発動する。

「ぐうつ…！」

ロイの体は重力によつて押し潰されようとしていた。

なんとか踏ん張つて耐えているロイだが、ゲオルグの強大な魔力が込められた魔法は、そう長く耐えられるものではなかつた。

膝が崩れ落ち、四つん這いの状態で必死に抗う。

ミシミシと音を立てながら軋む骨。

早急に脱出しなければ完全に押し潰されるのは時間の問題だ。

「ハハハハ！！

まだまだ青いなあ小僧！
早くなんとかしねえと潰れちまつぞ！」

ゲオルグは邪悪な笑みを浮かべて 楽しげに笑っている。

『ちいっ！

世話の掛かる小僧だ！』

魔剣レムナントの鍔[元にある水晶が光り輝く。
すると レムナントの刀身から黒い光の斬撃が放たれた。
それは黒燕斬と全く同種のものであった。

その瞬間 辺りが静寂に包まる。

「……あれ？」

ロイは急に身が軽くなつたことに気付く。

レムナントから放たれた黒燕斬がジオ・スタンプの魔法を斬り裂いたのだ。

「ななんなんだ！？
あの薄気味悪い剣は？」

ゲオルグは歯をギシギシと鳴らしながら魔剣レムナントに視線を移した。

『フン！ 我が名は魔剣レムナント！
我に斬れぬ物等 存在せぬわ！』

レムナントが得意気に叫ぶ。

「お前 僕が振らなくても斬撃が飛ばせたのか！？」

『その程度造作もないわ。念のため貴様の溜めた魔力を少し残しておつたからな。

だが 我が単独で黒燕斬を放つのは威力も劣るし正確性にも欠ける。実戦には不向きだ。

今のは奴も油断していたし 静止している魔法を斬つただけだから容易だつたがな。』

魔剣レムナントは意思を持つ魔剣。

ロイは只の武器ではなく 心強い相棒を手に入れていたのだ。

『さあ早く我を手に取れ。

次に我を使わず くだらんことで窮地に陥つても手は貸さんぞ！』

「了解！」

ロイは百鬼爪刃を背中に納めながら素早く後方へ跳び 魔剣レムナントを拾い上げた。

「ぐ…ぬうう…

この、ゴミめがあ…！」

怒り狂つたゲオルグは魔導教典を豪快に破り捨ててしまつ。その表情は正に鬼の形相であつた。

「なんの役にも立たんではないか！なにが魔導教典だ！」

「おいおい 物に当たんなよ。

結局は お前じゃあ魔導教典は使いこなせなかつたつてだけだろ？」

ロイはゲオルグを挑発する。

だがロイの言つたことは当たつていた。

ゲオルグは大量の魔力を持つてゐる魔人ではあるが 魔導師ではない。

魔導教典の力を存分に發揮するには到つていなかつたのだ。

「舐めた口を聞くな小僧…
ハツ裂きにされたいか？」

ゲオルグの殺氣が極限まで膨れ上がる。
それによって辺りの視界はグニャリと歪んだ様に見えていた。

「やつてみろよ？クソ魔人。」

しかし ロイには一寸の動搖もなかつた。
あるのはゲオルグを倒すという闘争本能のみ。

「殺してやる！！！」

殺氣と魔力を同時に放出するゲオルグ。
その姿は修羅その物。

魔導教典の脅威が無くなつたとはいへ それがロイにとつて有利な
状況とは言えない。

むしろ より過酷な闘いになることだつ。
何故なら 修羅となつたゲオルグを相手にするよりも 中途半端な
魔導教典の力を扱つていていたゲオルグを相手にするほうが断然優位に
進められたからだ。

この闘いの結末は未だに見えないでいた。

第24話 死闘の果てに

傭兵ギルド 白銀の翼の若き剣士ロイと魔人集団 豪魔邪靈衆の首領ゲオルグの闘いを静かに見つめる銀狼の姿があった。

「ナンテ闘イダ…

アノ魔人ノ凄マジイ殺氣ト戦闘力ニモ驚キダガ ソレト互角ニ渡リ
合エル程 小僧ガ強クナツテイタトハナ…」

銀狼シユバルツは呆然とロイの背中を眺めていた。

すると そこへ黒いロープに身を包んだ男がゆっくりと近づいて来る。

「シユバルツ。

アイツをどう思う?」

その男は白銀の翼 最強の魔剣士 ジャガンだつた。

死神ミカエルとの闘いを終え ロイの元へ駆けつけていたのだ。

「ウム…

ロイニハ コノ世界ヲ変エル程ノカヲ感ジル。
マダ粗削リデハアルガナ。」

フツと鼻で笑いながら 話すシユバルツ。

ジャガンも同じ様に微笑み ロイの背中を見守っていた。

「お～お～！」

アイツ善戦してるじゃねえか！」

「まさか ここまで強くなつていたとは……」

そこへ 各々の闘いを終えた白銀の翼の面々が姿を現し 合流する。

「ジャガン お前も終わつたのか。」

「ああ……」

バルボアの言葉に返事を返すジャガンだが 既に意識はロイに集中していた。

「始まりますよー！」

レオが口を開いた直後 ロイとゲオルグが激しく衝突する。

両者一步も引かぬ 火花舞い散る凄まじい剣と剣のぶつかり合い。

「「おああああ……」

ゲオルグの剣筋は怒りによつて先程より雑にはなつてゐるもの
その威力は桁違ひにはね上がつてゐた。

ロイは剣をぶつける度に少しづつ押し返され始めていたのだった。

『小僧！何をしておる！？このまま続ければ不利になる一方だぞ！』

「ぐつ……！
んなこたあ 分かってる！けど剣圧が凄すぎて 引くに引けねえん
だよ！
こじで一歩でも引いたら 一瞬で斬られちまつ！」

激しく剣をぶつけ合つてゐるにも関わらずロイは冷静であつた。

このロイの判断は正しいのだ。

この剣圧の中では 引かずには押さなければ一瞬で肉塊に変えられてしまつである。

だがしかし このままぶつけ合ひを続ければ不利になる一方だとい
うのは真実である。

ロイは この状況を打破する為 一か八かの賭けに出る。
ゲオルグの剣を受け流しにかかつたのだ。

絶妙なタイミングで受け流し ゲオルグの懷に飛び込むロイ。

しかし 懐に入り込んだのは一瞬
ロイの体が後方へ弾き飛ばされる。

「エア・インパクトか…！」

ゲオルグの厄介な特殊能力は健在である。
更には弾き飛ばされたことにより 意図的ではないが一步引いたことになる。
最悪の展開だ。

「くたばれ！糞餓鬼があー！」

ゲオルグの凶刃がロイを襲う。

ロイは左肩 左脇腹 右腿を深く斬り裂かれ
赤い鮮血を撒き散らす。

「ぐうっ…！」

呻きを漏らしながら 今度は自ら後方に跳び ゲオルグの追い討ちを回避する。

「ハハハハ！その傷じやあ もつまともに動けねえだろ？勝負あつたなあ。」

ゲオルグは高らかに笑い 勝利を確信する。

しかし 万事休すかと思われたロイの表情には まだ諦めの色が見られない。

「アホぬかせ。

まだまだ これからだよ。」

ロイは黒いオーラを爆発的に放出させ その力を治癒力向上に回していく。

みるみる内に赤い蒸氣を吹き出しながら塞がつっていく傷口。

「そりゃ…

種の者には そういう鬱陶しい能力があつたんだつたな。」

ゲオルグは舌打ちをして ロイを睨み付けた。

一方のロイは 塞がつていく傷口とは逆に 何故か次第に表情に曇りが出ている。

『傷口を塞ぐには相当な魔力が必要な様だな。
早々何度も この手は使えぬか…
いけるのか?』

「ああ なんとかな。
けど魔力を大分失つちました。」

ロイの表情が曇っていた原因は 魔力の大量消費。
傷を負つても 何度も何度も一瞬で傷を塞ぐ無敵の超人という訳にはいかなかつたのだ。

「ならば 傷を治す隙を与えぬ程 八つ裂きにしてくれる…」

当然のことだが ロイの傷が完全に塞ぎきる前に攻撃を再開するゲ
オルグ。

強烈な剣での一撃をレムナントで受け止めたロイだったが 治りか
けていた傷口から再び鮮血が舞う。

「さつさと死ぬんだな!」

ゲオルグは徐々に剣に力を込め ロイに圧力をかけていく。
ロイは黒いオーラの力を治癒力向上から身体能力向上に回し応戦す

るが 次第に押され始め 体からは血が滲んでゆく。

「くつ…そがああ…！」

ゲオルグの刃がロイに触れるかと思われた刹那 見事な剣捌きで刃を受け流し ゲオルグの背後へと回った。

しかし 態勢が崩れ隙だらけのゲオルグに対しロイは攻撃をせずに間合いを取る。

これはエア・インパクトを警戒しての行動であつた。
今までの流れからゲオルグは隙を作つた瞬間に能力を発動させる鉄壁の戦術を駆使していることを悟つたのだ。

隙が出来たからといって迂闊に手を出せば たちまち此方に死の危険が及ぶ。

判断としては正しいが これではゲオルグに対し攻撃を当てることが出来ない。

現にロイはゲオルグに対しても一太刀も浴びせれてはいなかつた。

「フン！少しばれるじゃねえか。

だが いつまでそうしているつもりだ？」

ゲオルグは不敵な笑みを浮かべ ロイの方へゆっくりと振り返つた。

エア・インパクトを打破する為には 裏の裏をかく攻撃か 衝撃波

『』と叩き斬るしか方法はない。

「仕方ねえ……」

危険だけど やってみるか。』

『何をする気だ？』

「まあ 見てろって！」

何かを閃いたロイは 一ヤリと笑い 駆け出していく。

傷を完全に塞ぐことが出来なかつた以上 長期戦は出血多量の危険性も浮上してくる。

出来るだけ速く 『の闘いに決着を着けなければならなかつた。

「うあらあああ！……！」

ロイは本当に何かを閃いたのか疑わしい程の 大雑把な連撃を繰り出していく。

ゲオルグもこれには呆れ顔になつた。

『何か策があるのかと思えば また特攻か？不様な。』

ゲオルグはロイの連撃を軽々と受け止め ロイの動きを完全に停止させた。

「悪いな。 それが俺のやり方なんだよ！」

一瞬の早業で 何かの動きを見せるロイ。

「な なに…！？」

驚くゲオルグの瞳には自身の胸元が切り裂かれ ドス黒い鮮血が舞つていてる光景が目に写っていた。

何が起こったのか理解出来ないといった様な表情のゲオルグはロイに視線を移す。

「ふう〜。 どうやら成功した様だな。」

ロイの右手には魔剣レムナント。

そして 左手には妖刀 百鬼爪刃が握られていた。

ゲオルグの胸元を斬り裂いたのは この百鬼爪刃であった。

土壇場での一刀流。

しかし大剣での一刀流は破壊力こそ凄まじいが扱いの難しさ 体力

の消耗はかなりのものがあるだろう。
それを このタイミングで実行して 成功させたロイの勇気は賞賛に値する。

「小賢しい。
大人しく殺されていれば 良いものを。」

「残念ながら大人しくするのは性に合わなくてね。」

鋭い眼光で睨み合う両者。
ゲオルグは剣を上段に構え ロイはレムナントと百鬼爪刃を目の前で交差させる様に構えた。

『おい小僧！そのまま二刀流で挑むつもりか！？』

「アーツには普通にやつても勝てねえ。
こんぐれえ 一か八かの戦法を使わねえとな。」

レムナントが心配をするが ロイの決意は固かつた。
元々こうだと決めたら絶対に他人の言つことを聞かない頑固な性格なので当たり前と言えば当たり前である。

「いくぜっーー！」

電光石火の突撃でロイが先に動いた。

どんどんスピードを上げて真正面から向かっていく。

ゲオルグの懷の寸前まで来た所でロイはサイドステップを駆使し
ゲオルグの右側面へと回り込む。

そして そのまま右手に持つレムナントを首目掛けて振る。
しかし この攻撃は容易く剣で受け止められてしまった。

次にロイは間髪入れずに左手の百鬼爪刃をゲオルグの背後から振り
抜いた。

怒涛の前後攻撃。

これには流石のゲオルグも反応仕切れないと思われたが 案の定工
ア・インパクトを発動させて 難を逃れる。

衝撃波によつて大きく仰け反らされたロイだが 足を踏ん張り
吹き飛ばされることは回避した。

しかし休む間もなく 今度はゲオルグが剣を ロイ目掛けて振り抜
く。

これをロイはバランスを崩しながらもレムナントで受け止めて見せ
た。

「ついあつー」

「ぐつ…何つ…?」

ロイの意表を突いた蹴りがゲオルグの右脇腹に直撃する。サイドからの強烈な一撃にバランスを崩すが、直ぐ様左足で大地を蹴る様にして踏み止まり、態勢を無理矢理整える。

これには追撃を狙っていたロイも足を止めざるを得なかつた。

「塵になりやがれ！！」

『ダーク・ボム』

黒き爆炎が辺り一帯を吹き飛ばす。

ロイはいち早く反応し、後方へ大きく飛び退いたが、凄まじい爆音によつて、五感の内、聴覚をやられてしまつていた。

一見、耳が一時的に聞こえなくなつただけで、大したことはない様に思われるが、戦闘において音が聞き取れないということは圧倒的に不利である。

平衡感覚の低下。

間合いの読みすらも狂わされてしまうのだ。

更には今のロイの場合、爆音によつて鼓膜が損傷されたために、凄まじい程の耳鳴りにも苦しめられている。つまりは集中力の低下にも繋がつてしまつ。

ロイが不利な状況は変わらずも悪化してしまつた。

「ちひ……」

『大丈夫か？小僧。』

ロイの苦し気な表情に レムナントが声をかける。
しかし ロイに反応はない。レムナントの声も聴こえなくなってしまったのだ。

『……ふう。』

突如 レムナントの鎧元の水晶が光り輝く。

『おい！聴こえるか？小僧。』

「…レムナント？」

レムナントの言葉にロイが反応を示す。

今の言葉は音声ではなく 脳内に直接語りかける言葉であった。
これならば 今のロイにも声が届く。

『不甲斐ないが 今は貴様が我の主。
我が貴様の耳となろう。』

「耳になる？何言つてんだ？」

レムナントの突然の申し出にロイは疑問符を浮かべた。

『我が周りの全ての音をデータ化し リアルタイムで貴様の脳に送つてやる。

これで聴覚をやられたこと等 全くの無意味だ。』

「お前 そんなことまで出来んのかよー？」

『フン！我をその辺の平凡な魔剣と一緒にするでないわ。では早速始めるべ。』

再びレムナントの水晶が光り輝く。

「……！」

聞こえる！いや 聞こえるといつより周りの音が分かるつて感じか…
不思議な感じだ。』

レムナントから脳内に送られてくる特殊な信号にロイは驚いていた。
しかし 確かに感じ取れる周りの音。

これにより不利な状況からは抜け出すことが出来た。

『LJのモードを使っている間は我の力を攻撃には回せないぞ。己の実力で戦うんだ。』

「ああ。端から そのつもりだ。」

ロイは百鬼爪刃を背中に納め レムナント一刀を両手で力強く握り締める。

意識を集中させ 感覚を研ぎ澄ます。

強き眼差しの矛先は豪魔邪靈衆 首領ゲオルグに向けられていた。

「いぐゼーーー！」

黒いオーラを放出させながらフェイントを織り混ぜ 激まじいスピードでゲオルグに迫る。

その凄まじいスピードから繰り出されるフェイントは黒き残像を生み出し ゲオルグの目を撹乱させていた。

「くつ……！」

動搖するゲオルグは全方向にエア・インパクトを発動させて防御態

勢を整えた。

しかし、この判断は致命的ミスとなる。ロイの狙いはエア・インパクト「」とゲオルグを叩き伏せること。素早くゲオルグの背後に回ると、黒いオーラの全力をレムナントと両腕に集め、渾身の一撃を振り下ろした。

全能力を攻撃に回した、力まかせの一撃。

本来ならば隙だらけで回避することは容易な筈だが、回避を考えずエア・インパクトで対抗しようとしたゲオルグには回避不能。

強烈な一撃がエア・インパクトの衝撃波と衝突する。

「ちいっ！！」

ゲオルグは自分の犯したミスに気付くが、時既に遅し。黒きオーラを纏つたレムナントが衝撃波を切り裂き、ゲオルグの背中に深くめり込んだ。

「ぐがああああ！！」

雄叫びをあげながら、ドス黒い血を撒き散らすゲオルグ。

しかし後一歩という所でレムナントの刃の動きがピタリと止まつてしまつ。

「なつ！？筋肉で止めやがったのか！？」

切り裂かれはしたが エア・インパクトの衝撃波。ゲオルグのすば抜けた反射神経と鋼の肉体。ロイの傷 疲労。いろんな要素が重なつて為せる技である。

かと言つて ゲオルグの受けた傷が相当な致命傷なことは変わりない。

「おのれえ… ガハッ！」

ゲオルグは憎悪の瞳でロイを睨み付けながら激しく吐血する。

ロイによる一撃は背中から内蔵にまで達していたようだ。

「ゴホッ！まだだ…

人間如きに殺られてなるものか…」

吐血を繰り返しながら モロヨロとロイに向かって歩を進める。一方のロイは動きを見せず その場に仁王立ちしていた。

「…」の…下等種族がああ…

ゲオルグは最後の力を振り絞り 剣を振り上げると渾身の力でロイ
目掛けて振り下ろす。

「人間舐めんじゃねええ！――！」

ロイはその一撃をレムナントで弾き飛ばし 間髪入れずに横薙ぎの
一閃を繰り出した。

一瞬の静寂。

その後 ゲオルグの首がズルリと擦れ落ち 地面へと転がった。
大量の黒い血を吹き出しながら 首を失った胴体が崩れ落ちる。

『終わつたな。』

レムナントが呟く。

遂にゲオルグとの死闘に決着を着けたロイ。

今までの様に力を使い果たして氣を失うことも無く 全身傷だらけ
になりながらも その足で威風堂々と地面に立っていたのだ。

「ロイ――！」

闘いを見守っていた白銀の翼の面々が続々とロイの元へ駆けつける。

「テメエー強くなつてんじゃねえかよ！」

ゼクスが片腕でロイの首をガツチリと掴み 頭をくしゃくしゃと撫で回す。

「痛え痛え！！怪我人なんだから 丁重に扱えよ！」

ロイはゼクスに怒りながらも 嬉しそうな表情を見せていた。

「おかえり。

本当に強くなつて戻つてきましたね。」

続いてレオがいつもの笑顔でロイの頭に優しく手を置く。

「おう！ただいま！」

笑顔でそれに応えるロイ。

見馴れた笑顔だが それが何よりも嬉しかったのだ。

「青年よ。久しいな。
見違えたぞ。」

「あれ？アンタはたしか帝都の時に会った騎士団長さんじゃねえか。
なんでここに？」

ひょっこり現れたレオナルドに対し疑問顔を向ける。

「レオナルド殿は騎士団を引き連れて俺達に力を貸しに来ててくれた
んだ。

彼等のおかげで俺達は勝利を手にすることが出来た。改めて礼を言
わせてもらうよ。レオナルド殿。」

深々と頭を下げるバルボア。

「いやいや。

微力ながら力になることが出来て良かったよ。

その変わりと言つてはなんだが また帝都で何かあつた時は君達の
力を貸してほしい。」

「それは勿論だ。

我々 白銀の翼は依頼があれば すぐに駆けつけます。」

バルボアとレオナルドは固い握手を交わした。

白銀の翼と豪魔邪靈衆の闘いは 多大な被害は受けたものの白銀の翼の勝利という結果に終わった。

帝都に戻ったレオナルドは国王エドワード3世に この闘いを報告。白銀の翼の名声はグンとハネ上がったのだった。

そして豪魔邪靈衆 首領ゲオルグを討ち取った 白銀の翼のルーキー・ロイ・ストライドの名は一躍有名となつて広まつていいくのであつた。

豪魔邪靈衆との闘いを終えて数ヶ月。傭兵、ギルド、白銀の翼は、名声が上がったことにより、依頼数が大幅に増加していた。

「ふいー。やつと終わつたぜ。」

「ただいま戻りました。」

任務に出ていたゼクスとレオが戻れた表情で戻つてくる。白銀の翼は所属メンバーが少ない為に、依頼をこなすペースが戻つては出撃、戻つては出撃のかなりハードなロー・ティー・ションで回っていたのだ。

当然、依頼から戻つて来た者は今の一人の様な戻れた表情で戻つてくることになる。

ただ一人だけは例外であつた。

「おかえり！よーし！次は俺の番だなー！」

その一人とは言つまでもなくロイであつた。

そんなロイをゼクスとレオの二人は呆れた表情で見つめていた。

「ん? なんだよ?

二人して変な顔で見て。」

それに気付いたロイは 不思議そうに一人に尋ねたのだった。

「ロイは元気でいいですね。」

「いや レオ。コイツはただのアホなんだよ。」

ゼクスの聞き捨てならない言葉に ロイはいち早く反応を示す。

「誰がアホだ!?

なんだよ?一人はもうへばつたのか?

だらしねえな。」

ロイは得意気な顔をしながら胸を張つて話すが 一方の一人は呆れ顔のままであった。

この二人が正常であり ロイが異常なのである。

「おおーー騒がしいと思ったら もう戻つてたのか!」

その時 マスターの扉が開かれ バルボアが中から姿を現した。

最近は稼ぎもいい為に 常に上機嫌である。

「はい。今戻りました。」

「(イ)苦労だつたな。」

「オッサン！俺の仕事は…？」

バルボアとレオの会話に割つて入るロイ。
その表情は早く外で遊びたくてウズウズしている子供と一緒にそれであつた。

「ああ それを言つつもりだつたんだ。」

ロイ お前宛に帝都から依頼が届いている。」

「帝都！？俺宛に！？」

ロイは意外な所からの依頼に驚きを隠せないでいた。

「そうだ。しかも国王直々の依頼の様だな。」

おそらく レオナルド殿がお前の話を国王に話して 気に入られた
んだろうな。」

「国王！？ すげえ！

じゃあ王宮に入れるんだな！」

ロイのその言葉に一同の顔色が変わる。

確かに国王直々の依頼ならば王宮に招かれ 国王に謁見するに
なるだろう。

しかし そこが問題なのだ。

この単細胞で世間知らずのロイに王宮での作法 礼儀が分かる筈が
ない。

一人で行かせれば間違いなく失礼極まりない行動を起こすであろう。

「俺も一緒に行くべきか…」

「でも依頼はロイ宛ですよね？

場所が場所だけに他の者が勝手に同行するのは まことにんじやない
ですか？」

バルボアとレオはロイに聞こえない様に小声で相談し始める。

そんなことなど露知らず ロイはワクワクした様子で 既にヤル気
満々になっていた。

「仕方ないですね。

あの状態になつたロイは何を言つても聞きませんよ。」

「ああ。重々承知だ。仕方ないか。」

ロイの説得を諦めた二人は渋々見送る形となつたのだった。

帝都 広場

帝都に到着したロイは前回の帝都での任務の時に集合した中央広場へと辿り着いていた。

相変わらず街の中は高級そうな衣服に身を包んだ人々が行き交つてゐる。

「久しぶりだなあ。」

ロイが辺りをキョロキョロと見回していると 一人の若い騎士が近づいてきた。

「白銀の翼のロイ・ストライド様ですか？」

その騎士はまだあどけない顔立ちで オドオドした様子で話し掛け

てくる。

おそらく入団間もない若い新兵である。

「ああ。お前は？」

「あ！失礼しました！」

僕は《旋風騎士団》所属のトーマです。

ロイ様の案内役を任せられましたので お迎えにあがりました。」

ロイに尋ねられ更にオドオドして答える若き騎士トーマ。流石のロイも 少しづつ少しづつ顔をかきむしっていた。

「まあ いいや。せ

といあえず王宮に案内してくれるか？」

「分かりました。いひひひです。」

ロイはトーマに続いて王宮へと足を進める。

綺麗な街並みを横目に黙々と歩くロイとトーマ。

すると 暫くして二人は巨大な鉄製の門の前へと辿り着いた。

「ここが城門です。」

もう入城なされますか？

「ああ 賴む。」

トーマはロイの返事を聞くと 門の前まで歩き出した。

「旋風騎士団所属のトーマです！」

白銀の翼のロイ様をお連れしました！開門お願いします！――

トーマが門に向かって叫ぶと 頑丈そうな鉄製の門が「ゴゴゴ」と音を立てゆっくりと開いていく。

「なんじゅうじゅうーー？」

驚愕の声をあげるロイの瞳には凄まじい光景が広がっていた。

一つの街かと思われる程の広大な中庭が眼前に広がり その遙か彼方に巨大な城がそびえ立っていた。

「あああ…

そろそろ参りましょうか？」

呆然と立ちつくしていたロイに、トーマが申し訳なさそうに声を掛けた。

「ああ…すまねえ。頼む。」

我に返ったロイはキヨロキヨロしながらトーマの後を追つて行く。

歩き続けて數十分。

ようやく城の前へと辿り着いた。

目の前にすると圧倒される程の巨さ。
丁寧に作り込まれた石造りで、その頑丈さを想像出来る。

「それでは中へ」案内します。」

トーマが大きな扉を開けると、そこには開けた空間が広がっていた。

高い天井には巨大なシャンデリア。

壁には高級絵画や豪華な装飾。

床には高級そうな赤い絨毯。

正面には一階へと続く階段が左、中央、右と3つに分かれている。

城の中は想像通りの豪華な光景が広がっていた。

「中央の階段を上がつて正面の大きな扉が玉座の間となつておりま

す。

それでは参りましょう。」

ロイとトーマの二人は玉座の間へと向かつて行く。

扉を開けると 奥行きのある大きな部屋が広がっていた。床には先程見た絨毯よりも更に高級そうな絨毯が敷き詰められている。

装飾品も更に豪華な物が取り付けられていた。

その部屋の一一番奥に堂々と置かれた立派な玉座に毛皮のコートに身を包み 王冠を被つた威厳のある老人が腰掛けている。彼がこのガレン公国の中エドワルド3世である。

玉座のすぐ隣には黒いスーツを着こなしたオールバックの堅物そうな男がロイに睨みをきかせていた。

その玉座を挟み込む様に 銀色の鎧を身に付けた騎士が一人立つている。

向かつて左側の騎士は金髪のロングを後ろで縛つている顔立ち整つた青年騎士。

背中にはガレン公国紋章の入った盾を背負い 腰には剣を下げている。

向かつて右側の騎士は黒髪短髪で背が高く ガタイのいい細目で寡黙そうな壮年騎士。

こちらは背中に装飾の施された両刃の大斧を背負つている。

どちらも ただ者ならぬオーラを放つていた。

「陛下。白銀の翼のロイ様をお連れしました。」

トーマはエドワルド3世の前まで移動すると 方膝を着き 報告を済ませた。

「うむ。」
「苦労であった。

ロイ君だったな。遠い所 邑々くじ苦労であった。」

エドワルド3世は優しい微笑みでロイを歓迎する。
彼は威厳もあるが 暖かい優しさも持ち合っていた。良き王であることは間違いない。

「白銀の翼のロイ・ストライドです！」

陛下からじいじの依頼を光栄に感じております！」

ロイは右手で拳を作り それを左胸に押しあてながら口を開いた。
この動作は この国での敬礼に当たる動作なのである。

出発前にバルボアに みつかり仕込まれた事は言つまでもない。

しかしエドワルド3世は何故か目を見開き 驚いた表情をしていた。
そしてすぐに優しい笑顔に戻る。

「ホホッ！ロイ君 無理をしなくてもよござれ。
レオナルドから君の話しさ聞いてる。どうか楽にしておくれ。」

「うわあ、王様はお見通しだったようである。

ロイは暫く悩んだ後に口を開いた。

「サンキューっすー王様。」

許しが出たとは言え 国王に對して この軽いノリはロイなりではある。

「貴様っ……無礼であるぞ……！」

これに対し ハーヴィング3世の隣に立つ 黒スーツの男が激怒する。

額に血管を浮き上がりせ ロイを睨みつける。

「スター！私は別に氣にしておらん。
よいではないか。」

「しかし、国王陛下に對して あのよつな無礼な態度……」

納得のいかないスター^ルと呼ばれた男の目を、エドワルド3世は威厳ある瞳で真っ直ぐに見つめた。

「……わかりました。」

スター^ルは小さく頭を下げ、渋々承諾したのであった。

「すまないね、ロイ君。

彼は私の側近でスター^ルという者だ。

少々堅物でな。君は気にしなくてよいぞ。」

スター^ルは無言でロイを睨み続けていた。

その態度に苛立ちを覚えたロイだったが、流石にこの場で喧嘩を仕掛けれる程バカではなかつた。

「そして、この両サイドにいるのが私の護衛騎士達だ。

君から見て左の金髪がスタンス、右の大男がフォーリーだ。

二人は相当腕が立つ騎士でな。私の自慢の護衛騎士だよ。」

ニコニコと笑顔を振り撒きながら話を続けるエドワルド3世。しかしロイは、依頼内容が気になつて辛抱ならず口を開く。

「あの…それで依頼つて？」

「おお そうであった。

実はな 私の娘達…つまり一人の姫がいるんだが その一人に海を渡つて隣の国の王に挨拶に行かせるんだが その護衛を頼みたいんだよ。」

てつくりまた討伐任務だと予想していたロイは啞然とする。ロイにとって護衛任務はこれが初めてだつたのだ。

「護衛つて ここには騎士団がたくさんあるんじゃなかつたつけ？」

ロイの言葉にエドワルド3世は苦笑いを浮かべる。

「それはそうなのだが大勢そろそろ引き連れて行くのは相手に失礼だろう？」

だから少数精銳で向かわせたいのだが 上位の天王騎士団と王宮近衛騎士団は 長旅で帝都から離すのは得策ではない。

よつて 機動力のある旋風騎士団。防衛能力に長ける鉄鍵騎士団の精銳数名。

そしてロイ君を雇つた訳だ。頼めるか？」

「了解です。

ところで 姫さん達は誰かに命を狙われてたりとかは？」

その言葉にエドワルド3世は反応する。

「クリムゾン……」

「クリムゾン？ それは？」

一瞬にして その場の空気が変わる。

「有名な暗殺ギルド クリムゾンだよ。
奴等が姫達を狙つて不穏な動きをしているといつ情報が入った。」

「暗殺ギルドがなんでまた？」

「実は姫達は特殊な能力を持つていてな……

おそらくは その特殊な能力に脅威を感じておる何者かの依頼だろ
う。」

エドワルド3世は歯を噛み締めながら怒りを露にしていた。
これは国王としてではなく一人の父親としての感情であろう。

「…まあ大体は分かりました。

俺に任せて下さい。必ず姫さん達を守りますよ。」

ロイの強い眼差し。

不思議とエドワルド3世は ロイに任せれば大丈夫だと感じたのだった。

「期待してあるぞ。

サラ！入って来なさい。」

エドワルド3世がそう呼び掛けると 玉座の後方にある扉から一人の美しい少女が現れる。

女神を思わせる美しい顔立ちに 眩しい程の白い肌。サラサラの水色のロングヘアーガ輝く。

更には透き通った様な白いドレスを見事に着こなしている。

「サラ・エドワルドです。

よろしくお願ひいたします。」

その美しい唇から耳に心地よく響く 美声が流れる。
そういうふた事には無頓着なロイでさえ魅了され 呆然としていた。

「あーよろしく！俺はロイだ。」

我に返つたロイは慌てて返事を返す。
見とれてしまつていたことを隠すのに必死であった。

「貴様！姫様に対してまで その態度か！？」

ロイに對して再びスタークが激怒する。

「構いませんよ。スタークさん。」

しかし それをサラは優しく制す。

温厚な性格は父親譲りのものであった。

そして透き通つた青い瞳でロイを見つめる。

「あなたからは何か不思議な力を感じますね。」

一つ一つの動作に氣品漂つサラの神聖な雰囲気に ロイは全てを見
透かされたかの様な感覚に陥る。

そしてロイの体がざわめきだす。

ロイの中に流れる 種の者の邪悪な血が サラの神聖なオーラに反
応しているのだ。

「アンタは一体…

……おぐうつつ…」

突如ロイの下腹部に衝撃が走る。

奇妙な呻きを漏らし、つづくまるロイ。

「ちよつとアンタ…サラにちよつかい出してんじやないよ…」

ロイが振り返ると、そこにはサラそつくりな顔をした水色のショートカットの美少女が腰に手を当てながらロイを睨みつけていた。

おそらく彼女がもう一人の姫である。顔はサラそつくりだが、性格は真逆。

初対面の男の下腹部に蹴りを放つなど、かなりのおでんば娘である。しかし大人しくしていれば、優雅な黄色いドレスを着こなす美しい女性なのだが…

「ほりー！なんとか言こなさーよーバカ男！」

「ひつやーひれは無理な話のよつである。

「ハラーリー・シャー！」

なんてことするの！彼は私達の護衛をしてくださる方よ。ちょっと
いなんて出されてません！」

「えー…？ そ、うなー…？ ヤバ…？」

「妹が その… すみません！」

一人の姫は年齢的にはロイと同年代ぐらいのようだが 雰囲気から
見ると 落ち着いたサラは年上に。
活発すぎるリーシャは年下に見える。

「ロイ君 すまないね。

リーシャは昔からおてんば娘でね。
謝りなさい。リーシャ。」

「えつと…」「めん！

なんか変人ぽかつたから。」

驚く程 感情のこもっていない謝罪の言葉である。

「テメエ！ 謝る気ねえだろー！？」

「はあ！？謝つたでしょ！」

変人っぽい奴に変人って言つて何が悪いのよー！」

「なんだとコノヤロー！」

先が思いやられる護衛任務となりそうである。

第26話 新たな出会い

帝都 ガレン王城

広大な城の通路を不機嫌そうに歩く男が一人。

「くそ！なんなんだ あの姫さんは！」

不機嫌そうに歩く男 ロイ・ストライドは先程のリーシャ姫の態度に腹を立てていた。

ロイとリーシャの口論が始まり それを見兼ねた王の側近スタールがロイに任務開始まで退室を命じたのだ。
そして暇をもて余したロイは王城内をフラフラと迷つているという訳だ。

『まさか あんなじやじゃ馬娘の護衛任務とは。
災難だな ロイ。』

一連の流れを覗き見ていたレムナントがロイの脳内に語りかける。

「全くだ。任務じゃなかつたら誰があんな奴護衛するか！」

ロイの機嫌は一向に直る気配がなかった。

しかしそれでも仕事を放棄するつもりはなく 最低限のプロ意識は持ち合はせていたようだ。

「ロイ様――――――！」

その時 背後からロイを呼び聞き覚えのある声が聞こえてくる。ロイが振り返ると そこにはトーマスの顔が浮かびあがめながら、トーマスの姿が

あつた。

「ロイ様はおられましたか。

リーシャ様はあいつお方なんですよ。お気になさらないでください。

トーマスは申し訳なさそうに口を開いた。

そんなトーマスの姿を見て ロイの心が穏やかになる。

「なんだ? われわせそんなことまで聞いて来たのか?」

「あ……はー。」

トーマスの純粹さがロイの怒りを完全に停止させた。

「変な奴だな。ありがとよ。

そういうや お前旋風騎士団所属つて言つてたな。お前のとこからも何人か護衛に参加するんだろ?」

「はい!僕も同行させていただきます。」

「……は?」

耳を疑う言葉にロイが啞然とする。

たしか国王は旋風騎士団と鉄鍵騎士団の精銳数名と言つていた筈だ。それが真実ならば この幼さの残る少年騎士が精銳の一人といつことになる。

「お前新兵じゃなかつたのか!?」

「いえ。まだ新兵ですよ。
でも成績はいいほうなんです。それで今回の任務に選抜して頂くことになりました。」

それは真実だつたようだ。

雰囲気からは感じ取れないが この少年騎士の実力は侮れない。
帝都程になると騎士団の力は相当なものになる。

人数合わせやそういうつたもので精銳に選抜されること等ない筈なの

だ。

つまりはトーマの実力は本物といつてよくなる。

「…やつぱ いじめ面白えな。」

「はい？」

帝都の未知数の強さにロイの心が高揚する。
ロイの師匠にあたる剣聖シバも帝都の騎士団出身。
帝都の強さは計り知れないものがあるのだ。

「シバのおっさんのお育つた街か…」

「シバ様を存知なんですか！？」

ロイの脳裏にトーマは素早く反応を示した。

「ん？ああ。

おっさんは俺の師匠だ。」

「シバ様の弟子！？」

まさか…シバ様は弟子をとらなかつた筈…

本当なんですか！？

トーマは興奮した様子でロイに詰め寄った。
今までのオドオドした態度が嘘のように鼻息を荒げ 田を輝かせて
いる。

「な なんだ？師匠はそんなに有名なのか？」

「有名人なんてものじやないです！英雄王 剣聖シバ！彼の名前を
知らない人間なんてこの国にはいない筈です！伝説の騎士ですよ…
僕もシバ様に憧れて騎士になつたんですから…！」

…………
あ すみません…」

更にヒートアップしていたトーマは我に返り 恥ずかしそうに俯く。

「へえ…やっぱすげえ人だつたんだな…」

「 今の話は真言か？」

突如 背後から低い男の声が響いた。

余りの異常なオーラにロイは素早く振り返り 身構える。

「今の話は真言かと聞いておるのだ。小僧。」

「イルザーク様！？」

声の主は黄金に輝く鎧を身に纏い、朱色のマントを着けた金色の長髪の男だった。

端正な顔つきのポーカーフェイスで異様な雰囲気を醸し出している。

「ロイ様。この方は最上位の騎士団 天王騎士団の所属で かつてシバ様と共に闘い シバ様の跡を継いで副団長になられたお方ですよ。」

「へえ……どうりでヤバそうな雰囲気をブンブン匂わせてる訳だ。」

ロイはイルザークのオーラに圧倒されて額に汗を滲ませていた。圧倒的な戦闘力。刃を交えずとも それなりの実力がある者ならばそれを読み取ることが出来た。

「さつきの話は本当だ。

俺はシバのおっさんに剣を教わった。」

「そつか…

抜け 小僧。確かめてやる。」

イルザークは腰に下げた剣の柄に手を伸ばし　噴き出す様に殺氣を放出させた。

「くっ…！」

ロイの手が無意識に百鬼爪刃へと伸びる。
脳が命の危険を察知し　体を動かせたのだ。

常人ならば　この殺氣だけで命を落とす可能性がある程の凄まじい殺氣。

辺りの空気がピリピリと反応している。

「イルザーク様！騎士団では私闘は禁じられている筈です…」

「…これは私闘ではない。只の手合せだ。」

トーマが殺氣に耐えながら叫ぶが　イルザークは聞く耳持たずといった感じで動きを止めない。

困ったトーマは今度はロイに視線を送る。

「やつじつことだ。」

しかしロイはニヤリと笑みを浮かべ 既に臨戦態勢をとっていた。
この一人は最早誰にも止められない。

「いくぞっー！」

先に動いたのはロイ。

地を蹴り 一瞬でイルザークの懷に入り込んだ。

否 イルザークの姿がない。

「あー…？」

何が起こったのか理解できないロイは その場で動きを止めてしまう。

戦闘において未知数の相手に対しても動きを止めてしまうことは大変危険な行為である。

ロイの背筋に凄まじい悪寒が走った。

慌てて百鬼爪刃を構えて振り返ると そこには冷たい表情で剣を振るイルザークの姿があった。

それを間一髪 防いだロイだったがバランスを崩してしまった。

「くっ…！」

ロイはあえて踏みとどまらずに 地面を転がつてイルザークから距離を取る。

相変わらずのポーカーフェイスでイルザークはゆっくりとロイに近づいていく。立ち上がったロイは今度は自分から攻めずにイルザークの出方を伺っていた。

そしてロイを間合いに捕らえたイルザークは躊躇なく剣を振り下ろす。

「はあっー！」

その一撃を百鬼爪刃で受け流し そのまま体をイルザークにぶつける。

田にてば田を歯には歯を。イルザークの態勢を崩す目的の体当たりだった。

しかしイルザークの体は微動だにしない。

ロイはあるで岩石に体当たりしたかのような錯覚に陥った。

「嘘だろ……？」

余りの圧倒的な力を前にロイの脳裏に絶望が過る。

しかしイルザークは呆然とするロイを前に剣を納めたのだった。

「ふふ…なるほど。

その太刀筋 剣捌き 体捌きに至るまでシバのものに似ている。
どうやら本当に奴の弟子のようだな。
まさか あいつが弟子を取るとはな…」

懐かしむ様に微笑むイルザーク。

急に変化した様子にロイは啞然としていた。

「試す様な真似をしてすまなかつた。

私は天王騎士団 副団長のイルザークだ。」

イルザークは右手を差し出した。

こうは言つているが あの凄まじい殺氣は紛れもなく本物であった。
得体の知れない男である。

「白銀の翼のロイ・ストライドだ。」

ロイは警戒しながらも差し出された右手を握った。

「覚えておくぞ。

シバの認めた男 ロイ・ストライド。『

イルザークは意味深な言葉を残し 通路の奥へと去つて行く。
ロイはその背中をじっと見つめていたのだった。

「まだまだ強くならねえと駄目だな。」

ボソッと呟くロイ。

その瞳には熱い闘志がみなぎっていた。

「ロイ様！ 一体何を考えているんですか！？
一步間違えば命の危険だつてあつたんですよー！」

トーマは青ざめた顔でロイに詰め寄る。
しかし当のロイに反省の色は既無であった。

「お前 天王騎士団について何か知つてんのか？

「そりや一応 僕も帝都の騎士団なので知つてこますよ。
天王騎士団は帝都の誇る最強戦力。
所属人数が7名の超精銳部隊です。」

それを聞いたロイの表情がみるみる輝いていく。

「あんな強え奴が後6人もいるのかよ？」

「ハハッ！楽しい所だな。」

先程見事に打ち負かされたロイだが、懲りずにこの現状を楽しんでいた。

そんなロイを呆れた表情で見つめるトーマ。

「もう変なことは考へないでくださいよ。」

まだ出合つて間もないがロイの単純な性格を理解するのに、そう時間はかからなかつた様だ。

――

姫達の出立1時間前

騎士団詰所

使用者から出立の時刻を聞かされたロイとトーマは騎士団詰所で控えていた。

既に同行する他の護衛騎士達も全員が騎士団詰所へと集まっている。人数はトーマ含め旋風騎士団が3名。

鉄鍵騎士団が4名。

そしてロイの合計8人編成となる。

旋風騎士団の装備は必要最低限の防具を身に着けた軽装備。
一方の鉄鍵騎士団は頑強な鎧に身を固めた重装備。

機動力の旋風騎士団。防護力の鉄鍵騎士団。対照的な装備の違いで
あつた。

「おうい トーマ。

そちらの兄さんが噂の白銀の翼のロイさんかい？」

ロイとトーマが椅子に腰掛け ノンビリしていると 一人の旋風騎士団の軽そうな男が一人に近づいてくる。

パーマをかけた茶髪のロングで 両手には軽装備に不釣り合いなゴツめの手甲を着けていた。
見たところ何故か剣や槍といった武器は所持していない。
おそらくは拳闘士の類いであろう。

「あつ！ リンレイ先輩。

そうです。この方がロイ様ですよ。

ロイ様。此方は同じ旋風騎士団のリンレイ先輩です。」

「リンレイだ。よひしく～。」

トーマからの紹介を受けるとリンレイはへラへラしながら右手を掲げた。

「ロイだ。よろしく。」

ロイは こういったタイプの人間は苦手なのか ぶつつきながらぼうに返事を返す。

するとリンレイの背後から一人の褐色の肌の女が近づいてきた。

「リンレイ。彼…困つてる。
リンレイ…ウザい。」

綺麗な黒いボニー・テールの美しい容姿をした彼女だが、かなりの口下手で毒舌だった。

スラリとした見事なスタイルで、背中には「」と矢を背負っている。

「相変わらずヒューナ。ヒスカちゃんよ。」

「ロイ様。彼女も同じ旋風騎士団のヒスカ先輩です。」

トーマが紹介し終えると、ヒスカはロイの顔を覗き込んだ。

「わっ！なんだよ…？」

突然の接近に驚いたロイは椅子ごと後退る。
するとヒスカはニッコリと微笑んで口を開いた。

「よのしく…白髪のお兄さん。」

「なつ？白髪…」

珍しく自分のペースを崩されたロイは呆然とするしかなかった。
二人共 独特な空気を持った人物だが雰囲気からそれなりの手練れ
であることが読み取れる。

「おい！ 旋風騎士団ってのは こんな変な奴等ばっかりなのか？」

ロイが小声でトーマに投げ掛けると トーマは苦笑いを浮かべた。

「いいえ。この人達は特別ですよ。」

トーマも小声で返事を返す。

ロイは流石帝都！ 变な奴が多い！ と思つたのだった。

「おい！さっきから五月蠅いぞ 旋風の！
ピクニックに行く訳ではないのだぞ！」

ロイ達が騒いでいると向かいの席で腰掛けっていた4人の鉄鍵騎士団の内の スキンヘッドの堅物そうなゴジい男が怒鳴った。

「これはすいませんねえ～。部隊長殿～。」

リンレイが軽い謝罪をするが 謝罪には見えない。
すると スキンヘッドの男は顔を赤くして荒々しく立ち上がった。

「リンレイ！貴様という奴は！

その軟派な態度は止める！！私はこの即席の部隊の部隊長を任せられたのだ！いわば私がリーダーなのだからもう少し敬意を払え！」

「はい。以後気をつけるつス。」

尚も変わらないリンレイの軽いノリ。
これを直せといつのは無理な話である。

スキンヘッドの男は更に顔を赤くして血管を浮き上がりせていたの
だった。

これを見ていたロイは楽しげに笑っていた。

「ロイ様。彼はこの護衛部隊の部隊長を任せられた人です。鉄鍵騎士団のハインリッヒ様です。」

トーマがロイの耳元で囁く。

その間にもハインリッヒは爆発寸前の火山の様になっていた。

「貴様ー！いい加減に…」

「はーーそこまでー
出立前に仲間同士でござれいざを起しうのはどうかと思しますよ？部隊長。」

「ぬつ…エンリケ。」

ハインリッヒの怒りを遮る様に エンリケと呼ばれた男が割って入る。

逆立つた赤い短髪の強気そうな青年騎士だ。
腰には2本の小型の斧を下げている。

ここでロイはある違和感に気付いた。

他の3人の鉄鍵騎士団のメンバーは防御に向いたゴツい体つきをしているが このエンリケという男は筋肉質な体つきは変わらないが 防御というよりは攻撃に特化した感じの筋肉のつき方だったのだ。

「トーマ。あのエンリケって奴は何者なんだ？」

「エンリケさんですか？

僕もよくは知りませんが防衛能力に長ける鉄鍵騎士団で唯一攻撃的な人物らしいですよ。

なんとかは分かりませんが自ら鉄鍵騎士団に志願したそうです。」

「…へえー。」

ロイはそれとは別にもう一つ 不思議な違和感を感じていた。
それは自分と同じ邪悪な力。

しかしエンリケの髪色は種の者や魔食者の様に銀髪ではない。
種の者や魔食者の髪色は染めてもすぐに銀髪に戻ってしまうものなのだ。

つまり彼はその類いではないということ。

これが一体何を意味するものなのかロイには理解することが出来なかつた。

その時 騎士団詰所の扉が開かれる。

「姫様達が出立なされる。

護衛部隊は直ちに護衛車に乗り込め。」

謎を残したまま 護衛任務が開始されようとしていた。

第27話 クリムゾン襲撃

護衛部隊は全員 城門前に停められた3台の車の前へと集合していた。

大きめの黒の高級車が1台。

その前後に頑丈そうな装甲車両が1台ずつ配置されている。

「なんだよコレエー。

ダセエなあ。俺もあつちの高級車に乗りたいもんだ。」

リンレイが装甲車両を見て残念そうに頃垂れていた。
そんな彼を部隊長のハインリッヒが物凄い形相で睨んでいた。

「生意気言つな！我々の役目は姫様の護衛。
嫌なら貴様は留守番でもしていろ！！」

「へーへーい。申し訳ありません。」

どうやらハインリッヒは先程の事をまだ根に持つているようだ。
しつこい男である。

そういうしている内に姫 二人が城門から従者を4名引き連れ 爽と現れた。

「陛下さん 護衛宜しくお願ひします。」

サラがわざわざ護衛部隊の前で立ち止まり 軽く会釈をする。
これに護衛部隊の面々は驚き 体を硬直させてしまう。
一国の姫ともあらう者が一介の護衛部隊に頭を下げてくれるなどと
誰が思うだらうか。

その優しさ 高貴さに啞然とするしかなかつた。

「任せとけーーアンタ、らは俺が守るよ。」

空気を読まず ロイが堂々と名乗り出る。

それを見たサラは一瞬目を丸くした後 クスリと微笑んだ。

「頼もしいですね。ロイ。」

「おう、よーー任せとけーー。」

従者達の冷たい視線には気付かず ロイは満面の笑みで答えたのだった。

サラと話をしていると 彼女の背後に不気味な影の存在があることにロイは気付く。

「 リラ 变人ーサラに気安く話しあげてんじゃないわよー。」

その正体はサラの妹 リーシャ姫であった。
ロイの表情が笑顔から しかめつ面に変わる。

「 出やがったなーじゃじゃ馬娘ー。」

「 はあ！？誰がじゃじゃ馬よー。」

大体アンタみたいな騎士でもない部外者に護衛が勤まるのー？

再び始まったロイとリーシャの言い争い。

場の空気が一気に悪くなる。

「 なんだとー？こちとら好きでお前の護衛をする訳じや…」

「 貴様何をしているー！
すみません姫様。」

怒り狂うロイを慌ててハインリッヒが止めに入った。
押さえられたロイは子供の様にジタバタと暴れている。

その光景を見たリーシャは勝ち誇った様に鼻で笑つて ロイに見下

した視線を送った。

「そのバカのしつけはちゃんととしておいてね。」

「はつ！御意でござります。」

「もが！…もが…」

言い返したかつた口イだつたが
られ喋ることが出来なかつた。

そんなロイを尻目に サラとリーシャ。従者達は黒の高級車へと乗
り込んでいったのだった。

「姫様に対してなんと無礼な態度だ。

貴様は少し大人しくしていろ！」

ハインリッヒに突き飛ばされたロイは無様に地面を転がつた。

「あん」やうに…一発ブン殴つてやうつか。」

止せ
口イ。

これ以上問題を起らせば任務から外されるぞ。この戯けが…』

今にもハインリッヒに飛び掛かりそうだったロイをレムナントが制止する。

レムナントの言葉に落ち着きを取り戻したロイは渋々立ち上がったのだった。

姫達が車に乗り終えたのを確認すると 護衛部隊が続々と装甲車両に乗り込んでいく。

旋風騎士団とロイが先頭の車両。

姫達の乗る車両を挟んで 後方の車両に鉄鍵騎士団が乗り込んだ。

そして一向は フインデル王国行きの船が停泊する ローベリック港へと向かつて出発したのだった。

—

出発から約1時間…

先頭車両 車内

「なんだ… なにも起きないじゃねえか。

退屈だな。」

問題なく移動中の車内で 後部座席に座るロイは暇をもて余していた。

「なにも起きてないのがいいんですよ。

僕達の任務は姫様達を無事にフィンテル王国に送り 帝都まで戻る
こと。

鬪うことが仕事じゃないですよ？」

助手席に座るトーマが呆れた表情で口を開く。
その言葉にロイは頭を搔きむしめた。

「そりや分かってるけどさ。

退屈なもんは退屈なんだよ。」

「そんな縁起でもなことばばかり言つたら本当に何か起つてしまりますよ？」

「何か…来る…」

「え…？」

ロイの隣に座っていたヒスカが急に何かに反応を示し 辺りを警戒
し始める。

どうやらトーマの言葉は真実となってしまったのである。

「んん！？前方2時と10時の方向に人影だ！」

ハンドルを握る リンレイが叫ぶ。
と同時にハンドブレーキを引き ハンドルを左へ急回転させる。

キキイイイー！！！

激しい音と共に装甲車両が横滑りを始める。
すると 車両の右側面に無数の矢が接触した。

「おわっ！-ビビッた！」

防弾ガラスとはいえ間近で矢の接触を見たロイは叫び声をあげる。

「襲撃だ！全員 車から降りるんだ！」

リンレイの指示が飛び 全員が素早く降車する。
外に出ると 後続の車両2台も停車していた。

「襲撃だ！鉄鍵騎士団！」

姫様の乗る車両の四方を囲め！」

最後尾の車両に乗っていた鉄鍵騎士団の面々はハインリッヒの命令のもと 車を降りるや否や一目散に姫達の乗る車両を取り囲み 巨大な盾で四方を守りに入る。

前方に見える人影は2時の方向に1人。 10時の方向に2人が配置されている。
しかし距離が かなりある為に此処から攻撃することは難しい。

「ヒスカ先輩！」

「了解……だ。」

ヒスカが背中の弓を取り出しながら前に出る。

「おいおい！

こつちみたに車とかデカイ的じやねえんだ！
此処から人間射抜くのは無理があるだろ！！」

「問題……ない。」

ロイの心配を他所にヒスカは背中から3本の矢を取り出し 3本同時に弓を引き絞った。

「鷹の目 発動！」

ヒスカの綺麗な黒い瞳が 鷹の様な瞳に変化する。

「うわ！恐つつ！！」

ヒスカはなんの迷いもなく3本の矢を射ち放った。

放たれた矢はピューンという高音の風切り音を奏でながら 真っ直ぐに刺客達へと伸びる。

そして まさかの全矢命中という結末を迎えた。
しかも全てが相手の頭部に突き刺さっていたのだ。

「おおー。やるなあ。
ゼクスといい勝負だ。」

ロイはヒスカの見事な腕前を賞賛した。

この距離で3本同時に放つて 全て頭部に命中させるとは人間業を超えている。

「驚いただろ？俺も最初にあの日を見た時はマジでビビったからなあ。」

リンレイがロイに歩み寄り 口を開く。

「ヒスカちゃんは北の地方にあるジャヤ族つつ 『』の扱いに長けた戦闘民族の出身なんだ。

ジャヤ族には特殊な能力があつてな。

それが今の鷹の目だ。眼球に血液を供給して鷹と同じ視力を得るこどが出来る技だよ。」

鷹の目は 網膜の光を感じ取る部分に150万個もの視細胞を持っている。

人間の視細胞は20万個なので 鷹の目は人間の目の約8倍もの視力があるということになる訳だ。

もつとも視力が優れているとはいへ 矢を全て命中させたのはヒスカの腕前であるが。

「油断…駄目。

まだ…いる…」

ヒスカの言葉で全員に緊張が走る。

ロイも百鬼爪刃を抜き放ち 辺りを警戒し始めた。

道の両端は生い茂った茂みが広がっていた。

視界の悪いこちらにとつては かなり不利な状況である。

ロイが魔力探知を開始させると、辺りに無数の魔力反応が示される。数はおよそ30前後。

「思ったよりも多いな。

30人近くはいるぞ。」

ロイは舌打ちをするが、表情はどこか楽しげであった。

丁度退屈をしていた時の突然の襲撃。

ロイのアドレナリンは一気に高まっていた。

その時、姫達が乗る車両の両サイドの茂みから、暗殺者達が飛び出してくる。

「両側面だー迎え撃てー！」

ハインリッヒの指示が飛ぶ。

鉄鍵騎士団達が統率の取れた動きで両サイドに2名ずつ展開し、巨

大な盾を構えた。

強烈な鉄の衝突音。

盾が暗殺者達の攻撃を遮る。

「今だーー！」

ハインリッヒの命令と同時に 鉄鍵騎士団の面々が武器を振るつ。
次々と斬り伏せられる暗殺者達。

「黒い覆面」

間違いない。クリムゾンの下級戦闘員だな。」

リンレイが呟く。

暗殺ギルド クリムゾンの第一陣は6名。

残るはおよそ25名前後。

ここで今度は前方からクリムゾンの第一陣が押し寄せてくる。
数は10名。

「よおし 今度は俺達の出番だね。」

リンレイが首と拳の骨を鳴らしながら前へと出る。

威風堂々たる その姿は強者の証。

それを見たロイも負けじと百鬼爪刃を軽々と回しながら前へ出る。

「あらりっ・ロイ・ちも やる気全開だね。」

「言つただろ? 退屈してたつてな。」

「やうだつたな。

よおし こつちょ 暴れますか！」

リンレイは量腕を下方向に振り下ろす。すると彼が両手に着けていたゴツい手甲の先端から鋭い鉤爪が飛び出した。

1つの手甲に長めの太い鉤爪が2本ずつ。彼の武器はこの鉤爪だったのだ。

そして そのまま凄まじいスピードで前方へ駆け出していく。

「はあっ！…」

リンレイは踊る様にして 華麗に両手の鉤爪を振り回す。次々と引き裂かれていく暗殺者達。

「あっ！俺の分も残しとけっつーの…！」

慌てたロイは百鬼爪刃を構え 疾走する。黒き閃光となつたロイのスピードはリンレイのそれを遥かに上回っていた。

「速い……」

護衛部隊の面々は ロイのそのスピードに唖然としていた。

一瞬でリンレイに追い付いた ロイは更にスピードを上げて 縦横無尽に百鬼爪刃を振り回す。

赤い鮮血が まるで花火の様に飛び散り 暗殺者達は一瞬で動かぬ屍と化していくのだった。

「よし…終了…！」

準備運動にもなりやしねえな。」

ロイは百鬼爪刃で肩をトントン叩きながらスッキリした表情をしていた。

「ヒュー やるねえ。」

リンレイは口笛を吹きながら ロイに拍手を送っていた。

残るクリムゾンの戦力は15名前後。

「ヒヤハハハハ…！！！」

思つたより やるようだなあ…！！

突如 辺りに響き渡る不気味な声。

敵の位置を特定できない護衛部隊の面々は辺りを見回すことしかできなかった。

「卑怯者め！姿を見せろ！？」

業を煮やした鉄鍵騎士団の一人が 姿の見えない敵に叫ぶ。

すると 辺りが一瞬静寂に包まる。

その後 叫んだ騎士の首から大量の血が吹き出した。

「イワンー！－！－何が起こつた！？」

突然の出来事。

護衛部隊に一気に緊張が走る。

「誰が卑怯者だつて？誰が？

殺すぞ この野郎。ああ…もう死んでるか。

ヒヤハハハハ！－！－！」

いつの間にか 黒いローブを身に纏つた 黒の編み込み頭の凶悪そ

うな容姿をした男が、姫達の乗る車両の天井に立っていた。

素早く迎撃態勢を取る 鉄鍵騎士団。

「！」こつこつの間に「！？」

ハインリッヒは歯を食い縛りながら、男を睨み付けた。

「気付かねえ　お前等が悪いんだろ？」

俺様は卑怯者じやねえ。」「

「下りやがれ！」の野郎！――

鉄鍵騎士団の騎士が男に向けて剣を振るつ。
しかし　男はそれを跳躍して軽々と避けたのだった。

圧倒的な威圧感。見事な身のこなし。

この男が只者ではないことは明白であった。

「はずれー。

俺様はクリムゾンのヒドラ様だ。
姫達の命はもうつていぐぜえ。」

ヒドラに続いて 戦闘員が続々と姿を現した。
数は16人。これで全員であろう。

「ザルニ！ロイッち！」

あいつは多分幹部クラスだ！急ぐぞ！」

ロイとリンレイは姫達の車両の方へ疾走する。

「さあーて そろそろ死んでもいいのか?」

「ヤセマヘんーー！」

瞬でヒドラの間合いに飛び込んだトーマが2本の剣を振り下ろした。

トーマは「刀流の剣士だったのだ。対するヒドラは細身の長剣を一本。

トーマー一撃をそれで軽々と防いでみせた。

「なんだあ？ ガキンちよめ。

生意氣なんだよ……」

「はあつ！！」

浮遊した状態のまま蹴りを放つトーマ。

しかしそれもヒドリは左腕一本でガードしたのだった。

そのままトーマは蹴りの反動を利用して 後方宙返りで離脱する。

「トーマ…伏せる…」

ヒスカの声に反応して 着地と同時にしゃがみ込んだ。
するとトーマの頭ストレスを通して 1本の矢が凄いスピードで通過する。

「ああ 鬱陶しい。」

ヒドリは近くにいた戦闘員を引っ張つて 自分の前へと移動させた。

矢はその戦闘員へ深々と突き刺さる。
自分の部下を盾にしたのだ。

「なんて卑劣な…」

トーマはヒドリの行動に怒りを覚えた。

一方のヒドリは盾にして息絶えた部下を まわで「ハハハ」とひたひた投げ捨てる。

「うへ…」

飛び出そうとしたトーマより先に何者が凄まじいスピードで飛び込んでいく。

口
イ
だ。

ヒドラに飛び掛かったロイは、強烈な連撃を繰り出していく。しかし怒り任せの攻撃等、腕の立つヒドラにどうしては子供を相手にするようなもの。ロイの連撃を「ヒ」とく避けていく。

「死んでろ。」

ヒドラは百鬼爪刃を打ち払い、ロイの首目掛けで突きを放つた。

しかし次の瞬間
驚愕したのはヒドラの方。

ロイは上体だけを反らし
見事に突きをかわしたのだ。

「テメエが死んでろお！！！」

そのまま左の拳でヒドラの右頬を殴り付ける。

「ぐふうつーーー！」

ヒドラの顔が激しく歪む。

そして そのまま後方へと殴り飛ばされていった。

地面を転がり 仰向けに倒れ込むヒドラ。
ピクリとも動かなくなってしまう。

まさかの指揮官の無様な姿に戦闘員達は慌てふためく。

「なんだよう。

こんな面白え奴がいるなんて聞いてねえぞお。」

ヒドラは倒れたまま ボソボソと呟いている。
その光景は不気味以外のなんでもなかつた。

そして ボソボソと一人呟きながら ゆっくりと起き上がって
いく。

「殺す…殺す…

絶対殺おすーーお前等！何ボサツとしてやがるー！

今から俺様はそいつと遊ぶ！お前等はさつさと姫を殺せつ……！」

狂氣じみた形相でヒドリは部下に指示を送った。

「来るぞ！鉄鍵騎士団！』

守り抜け！！』

戦闘員達の猛攻をハインリッヒを筆頭に迎え撃つ 鉄鍵騎士団。

そんな中 遥か後方に殴り飛ばされたヒドリは距離があるにも関わらず 細身の長剣を振り上げていた。

何をしているのか分からず 呆然と眺めているロイに向けて不気味な笑みを浮かべながら 遠くから剣を振り下ろす。

すると 長剣がロイに向け 勢いよく伸び始めた。中心に鋼の太いワイヤー。

そして刀身は無数に分裂して鞭のよろこび伸びていく。

「うわっ！』

意表を突かれたロイだったが間一髪 不思議な剣の刃を屈んで避けることに成功した。

「まだまだあ！」

ヒドラは刃を伸ばしたまま 再び剣を振る。

すると 伸びた刃が波打つように蠢き始めた。

刃の根元の部分から切つ先に向けて 急激に動き始めた。

避けた筈のロイの頭上にある刃が波打ち 再びロイを急襲する。今度は避けきれずに ロイは左肩を刃で切り裂かれた。

「く…そつ…」

大量に出血した傷口を押さえながら ワンステップで その場から離れる。

傷は結構な深いものであった。

一方ヒドラは満足気に伸びた刃を戻し 笑みを浮かべている。

「ヒヤハハハハ！」

顔の一発のお返しだよ。

だが俺様のお返しは万倍返しだ！まだ終わらねえぞ…！…

ヒドラは元に戻した刃を再びロイ目掛けて伸ばす。

予測不能の奇抜な動きを見せる伸びる刃は かなり厄介である。ロイは向かいくる刃を舌打ちしながら避けにかかった。

右へ左へ
縦横無尽に襲いかかる刃。

ロイはなんとかギリギリの所で回避に成功していた。

休みなく襲いくる刃はロイの体力を確実に削っていたのだ。

「どうだあ？俺の愛剣
蛇攻剣の動きはあーー？」

ヒドリは楽しげに蛇攻剣の刃をまるで体の一部の様に操っていた。

その時 駆けつけたリンレイがロイを呼ぶ。
その手には 謎の黒い球体が握られていた。

リンレイに気付いたロイは刃に追われながらも言われた通りに接近していく。

急なリソレイの指示に一瞬動搖したロイだつたが、他に為す術もないので、言われるがままに大きく跳躍したのだった。

その瞬間 リンレイは黒い球体を伸びる蛇攻剣の刃に向けて投げつ

ける。

ドカアアアアアンーーー

凄まじい爆音と爆風を巻き起こし 黒い球体が破裂する。
今の黒い球体は爆薬だつたのだ。

爆風によって 蛇攻剣の刃は明後日の方向へ吹き飛ばされていく。

「はあん！？爆弾だと…？」

小賢しい真似を…！」

ヒドラは怒りを露にしながらも 仕方なく刃を元に戻した。
リンレイの咄嗟の策は 見事に成功したのだ。

「ウザつてえなあ…

皆殺しにしてやる…！」

「それは無理だな。」

何者かの声がヒドラの殺氣を遮る。
その声の主は姫達の乗る車両の方向。

そこには クリムゾンの戦闘員達の屍の上に立つ男が一人。

「ここからは もう全滅だ。

テメエ 一人で俺達全員を相手にするつもりか？」

その男とは 謎の多い騎士 エンリケであった。
どうやらあの数のクリムゾンの戦闘員達を一人で全滅させたようだ。
彼の戦闘力は相当なものらしい。

「あらりっ?

役立たず共め。まあいい。

ここは退かせてもらおうか。」

「逃がすとでも思つて いるのかー?」

撤退しようとしたヒドラをトーマが阻止する。

今の言葉が勘に触ったのか ヒドラは物凄い形相でトーマを睨み付けた。

「ガキが

あんま調子こいてんじゃねえぞ。

「そうだなあ。置き土産をやうつか。」

その瞬間 ヒラリテにて皿をひきあわせで蛇攻剣を振るつた。

凄まじい風圧が護衛部隊を襲つ。

「…なんだ あれ？」

風圧によりて一瞬視界を奪われた後 皿を開けると 上空に謎の物体が舞つてゐることに気がついた。

「それでは 諸君。

「さきづさんよつー。

全員が謎の物体に目を奪われてゐる隙に 姿を消してしまつた。

「おこ…あれって…

「ぐううう…

「…マーテ」

その謎の物体の正体は マーテの斬り落とされた右腕だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3952r/>

白銀の翼

2011年11月20日02時09分発行